

藤原長司を偲ぶ

— 広撫四十五年史 —



昭和48年 7 月 福井商工会議所会頭室にて将棋の大山康晴名人と対談中

ごあいさつ



広撚株式会社
社長 藤原 隆

このたび、『藤原長司を偲ぶ』と題して本誌編集を企画致しましたところ、関係各位におかせられましたは、公私ご多忙のなかにもかかわりませず、ご執筆・ご寄稿をいただき、誠に有り難く、厚く御礼申しあげます。

わが社の会長にして、わが家の父 藤原長司が逝って早一年の月日が経過致しました。当社の会長室に飾られた父の写真や胸像を眺めるたびに、哀惜追慕の情が胸に迫り、目頭が熱くなることも度々ある今日このごろであります。

私は五人兄弟の中で最も長く父の身近で生活と仕事を共にしてきた者として、最も多くの語るべきものを持っている立場にあります。しかし、それを

一つずつ列挙してゆくには紙数が許しませんでしたので、ここで最も適切な言葉を一つ述べるとすれば、それは、極めて優れた商人であった、ということであります。父は高等教育は一つも受けず、偶然に就職した神戸の鈴木商店への丁稚奉公を出発点として、種々の経験と実務勉強を積み重ね、挫折や困難を不屈の闘志によって乗り越えながら商人としての成功を勝ち得てきたものと思います。その優れた商人としての資質は、不屈の闘志であり、誠実さであり、人を引きつける人間的魅力であり、卒直にしてたくまざるその話術であり、計数に対する明るさであり、人情味でありました。どんな人ともわけ隔てなくお付き合いをし、誠意と温かさをもって人に接する父は、魅力ある人柄であり、敬愛の念が尽きない父でありました。

晩年は、福井における種々の公職に推挙されて、誠心誠意、真面目に努めておりました父は、心から次のように申しておりました。「自分は福井の地元のおかげで今日のようにしていただいたのであるから、老軀の続く限り死ぬ迄、地域のためにご奉仕させていただくつもりだ」と。父は心からそう思い、最初はそのような不慣れな公職に躊躇していたようですが後には、生き生きと、使命感すら持って、忙しい日程の仕事に日夜いそしんでおりました。そして五十年四月、遂に不帰の客となった訳であります。その心中を察す

るに、もう暫くこの波乱時代を生きて眺めたり、自己の出来る努力をしてみなかったのではないかと思ひ、残された者としてそれが残念に思えてなりません。しかし父の最後は、父の言葉どおり、死ぬまで微力ながら地元のために働きつつ逝ったのでありますから、その本懐これに過ぎるものはなかったと思います。

本日ここに、「藤原長司を偲ぶ―広摺四十五年史―」が完成致しましたので、皆様方のお手元にお届け致します。ご一読を賜われれば誠に幸せに存じます。

最後に、故人存命中、皆様方からお寄せいただきました数々のご厚情に対し、心から御礼申しあげると同時に、弊社に対する変わらぬご支援ご鞭撻を、御願ひ申し上げます。

昭和五十一年七月

目次

思い出のアルバム
ごあいさつ

第一部 創業者を偲ぶ

寄稿	
自治大臣	福田 一……………一
帝人株式会社社長	大屋 晋三……………四
東洋紡績株式会社社長	大谷 一二……………七
株式会社北陸銀行頭取	馬瀬 清亮……………二〇
福井商工会議所会頭	市橋 督……………二三
福井県体育協会会長	黒川 誠一……………二七
帝人製機株式会社相談役	鷺田 勇……………三〇
帝人株式会社副社長	徳末 智也……………三三
住友商事株式会社顧問	芝 梅太郎……………三七
社団法人福井人絹会館理事長	酒井 伊三男……………四〇

五十嵐貿易株式会社社長	五十嵐 義昌……………三
岸商事株式会社会長	彼島 桂二……………六
松文産業株式会社会長	小泉 次郎……………九
徳光経営能率事務所所長	徳光 泰治……………一四
株式会社福井繊維情報社社長	永井 正四……………一七
社団法人福井県繊維卸商協会専務理事	細川 喜代治……………二〇
元神戸市議会議長	成瀬 佐太郎……………二五
福井市中央卸売市場関連団地協同組合理事長	玉村 亀太郎……………二八
福井県馬術連盟副会長	滝波 義隆……………三一
富田医院院長	富田 信夫……………三六
福井県立病院整形外科部長	志羽 孝……………三九
写真家	八木 源二郎……………四二
	山田 小つね……………四七
社内寄稿……………	……………五〇
物故役員を偲ぶ……………	……………五三
創業以来の柱石……………	……………五七
経理組織の基礎づくり……………	……………六〇
	……………六三
	……………六六
	……………六九
	……………七二
	……………七五
	……………七八
	……………八一
	……………八四
	……………八七
	……………九〇
	……………九三
	……………九六
	……………九九
	……………一〇二
	……………一〇五
	……………一〇八
	……………一一一
	……………一一四
	……………一一七
	……………一二〇
	……………一二三
	……………一二六
	……………一二九
	……………一三二
	……………一三五
	……………一三八
	……………一四一
	……………一四四
	……………一四七
	……………一五〇
	……………一五三
	……………一五六
	……………一五九
	……………一六二
	……………一六五
	……………一六八
	……………一七一
	……………一七四
	……………一七七
	……………一八〇
	……………一八三
	……………一八六
	……………一八九
	……………一九二
	……………一九五
	……………一九八
	……………二〇一
	……………二〇四
	……………二〇七
	……………二一〇
	……………二一三
	……………二一六
	……………二一九
	……………二二二
	……………二二五
	……………二二八
	……………二三一
	……………二三四
	……………二三七
	……………二四〇
	……………二四三
	……………二四六
	……………二四九
	……………二五二
	……………二五五
	……………二五八
	……………二六一
	……………二六四
	……………二六七
	……………二七〇
	……………二七三
	……………二七六
	……………二七九
	……………二八二
	……………二八五
	……………二八八
	……………二九一
	……………二九四
	……………二九七
	……………三〇〇
	……………三〇三
	……………三〇六
	……………三〇九
	……………三一二
	……………三一五
	……………三一八
	……………三二一
	……………三二四
	……………三二七
	……………三三〇
	……………三三三
	……………三三六
	……………三三九
	……………三四二
	……………三四五
	……………三四八
	……………三五一
	……………三五四
	……………三五七
	……………三六〇
	……………三六三
	……………三六六
	……………三六九
	……………三七二
	……………三七五
	……………三七八
	……………三八一
	……………三八四
	……………三八七
	……………三九〇
	……………三九三
	……………三九六
	……………三九九
	……………四〇二
	……………四〇五
	……………四〇八
	……………四一一
	……………四一四
	……………四一七
	……………四二〇
	……………四二三
	……………四二六
	……………四二九
	……………四三二
	……………四三五
	……………四三八
	……………四四一
	……………四四四
	……………四四七
	……………四五〇
	……………四五三
	……………四五六
	……………四五九
	……………四六二
	……………四六五
	……………四六八
	……………四七一
	……………四七四
	……………四七七
	……………四八〇
	……………四八三
	……………四八六
	……………四八九
	……………四九二
	……………四九五
	……………四九八
	……………五〇一
	……………五〇四
	……………五〇七
	……………五一〇
	……………五一三
	……………五一六
	……………五一九
	……………五二二
	……………五二五
	……………五二八
	……………五三一
	……………五三四
	……………五三七
	……………五四〇
	……………五四三
	……………五四六
	……………五四九
	……………五五二
	……………五五五
	……………五五八
	……………五六一
	……………五六四
	……………五六七
	……………五七〇
	……………五七三
	……………五七六
	……………五七九
	……………五八二
	……………五八五
	……………五八八
	……………五九一
	……………五九四
	……………五九七
	……………六〇〇
	……………六〇三
	……………六〇六
	……………六〇九
	……………六一二
	……………六一五
	……………六一八
	……………六二一
	……………六二四
	……………六二七
	……………六三〇
	……………六三三
	……………六三六
	……………六三九
	……………六四二
	……………六四五
	……………六四八
	……………六五一
	……………六五四
	……………六五七
	……………六六〇
	……………六六三
	……………六六六
	……………六六九
	……………六七二
	……………六七五
	……………六七八
	……………六八一
	……………六八四
	……………六八七
	……………六九〇
	……………六九三
	……………六九六
	……………六九九
	……………七〇二
	……………七〇五
	……………七〇八
	……………七一〇
	……………七一二
	……………七一四
	……………七一六
	……………七一八
	……………七二〇
	……………七二二
	……………七二四
	……………七二六
	……………七二八
	……………七三〇
	……………七三二
	……………七三四
	……………七三六
	……………七三八
	……………七四〇
	……………七四二
	……………七四四
	……………七四六
	……………七四八
	……………七五〇
	……………七五二
	……………七五四
	……………七五六
	……………七五八
	……………七六〇
	……………七六二
	……………七六四
	……………七六六
	……………七六八
	……………七七〇
	……………七七二
	……………七七四
	……………七七六
	……………七七八
	……………七八〇
	……………七八二
	……………七八四
	……………七八六
	……………七八八
	……………七九〇
	……………七九二
	……………七九四
	……………七九六
	……………七九八
	……………八〇〇
	……………八〇二
	……………八〇四
	……………八〇六
	……………八〇八
	……………八一〇
	……………八一二
	……………八一四
	……………八一六
	……………八一八
	……………八二〇
	……………八二二
	……………八二四
	……………八二六
	……………八二八
	……………八三〇
	……………八三二
	……………八三四
	……………八三六
	……………八三八
	……………八四〇
	……………八四二
	……………八四四
	……………八四六
	……………八四八
	……………八五〇
	……………八五二
	……………八五四
	……………八五六
	……………八五八
	……………八六〇
	……………八六二
	……………八六四
	……………八六六
	……………八六八
	……………八七〇
	……………八七二
	……………八七四
	……………八七六
	……………八七八
	……………八八〇
	……………八八二
	……………八八四
	……………八八六
	……………八八八
	……………八九〇
	……………八九二
	……………八九四
	……………八九六
	……………八九八
	……………九〇〇
	……………九〇二
	……………九〇四
	……………九〇六
	……………九〇八
	……………九一〇
	……………九一二
	……………九一四
	……………九一六
	……………九一八
	……………九二〇
	……………九二二
	……………九二四
	……………九二六
	……………九二八
	……………九三〇
	……………九三二
	……………九三四
	……………九三六
	……………九三八
	……………九四〇
	……………九四二
	……………九四四
	……………九四六
	……………九四八
	……………九五〇
	……………九五二
	……………九五四
	……………九五六
	……………九五八
	……………九六〇
	……………九六二
	……………九六四
	……………九六六
	……………九六八
	……………九七〇
	……………九七二
	……………九七四
	……………九七六
	……………九七八
	……………九八〇
	……………九八二
	……………九八四
	……………九八六
	……………九八八
	……………九九〇
	……………九九二
	……………九九四
	……………九九六
	……………九九八
	……………一〇〇〇

創業以来の柱石…………… 故専務取締役 大盛進氏を偲ぶ
経理組織の基礎づくり…………… 故監査役 松山久次氏の生涯

第二部 不屈の誠意

藤原長司の人と業績……………

黒羽房子……………一三

履歴……………

二二

合同葬の記録……………

二五

第三部 広撚株式会社四十五年史

第一編 創業から繁栄への三十五年間

一、創業期……………

二九

二、戦時統制期……………

三五

三、戦後復興期……………

二六

四、開放経済下の成長期……………

二九

第二編 激変の四十年代と将来への布石

一、裏地から表地へ……………

二七

二、不良債権との戦い……………

二九

三、子会社設立と多角化への布石……………

三〇

四、輸出の確立と海外事業への試み……………

三三

五、試練期における的確な対応……………

三九

六、企業群経営への指向……………

三六

第三編 現況……………

三

第四編 展望……………

三

あとがき……………

三三

棚に××のファイルがあるはずだが？…ありましたか。今会社の○○君が取りに行くから渡して下さい。お願いします」

松山さんの資料整理術は有名だったが、よくこのような電話をお聞きした。実に仲むつまじいご夫婦だった。とまどき松山さんの原稿を奥さんが清書された書類を拝見もした。私に限らず、お宅へおうかがいした時など、玄関の床に額をつけんばかりにご丁寧なごあいさつを奥さんから受けて、まごついたものだった。

この奥さんも松山さんのあとを追うように、昭和五十一年一月にこの世を去られた。ただお二人のご冥福を心からお祈りするのみです。

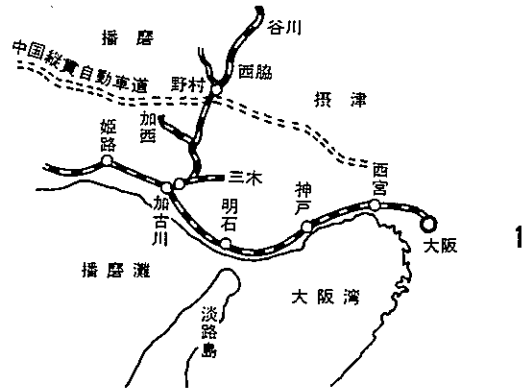
第二部 不屈の誠意

不屈の誠意

— 藤原長司の人と業績 —



黒羽 房子



山陽線の加古川から北へ約三十キロ、肥沃な播州平野がついて、ゆるゆると山地に移り行くあたりが父、藤原長司のふるさとである。兵庫県多可郡重春村野村（現西脇市野村町）は、東に攝津の丘

陵、西に播磨の山地が迫る山あい、ささやかな平地に位置する。この多可郡一帯は、江戸時代にはいわゆる天領であって、血なまぐさい争いごともしなければ、他と競って事を起こす気風にも乏しい、至ってのんびりした土地柄であった。タカ（多可）は高い土地に由来する名だとも、また「多河」をもじって川が豊かだからともいわれる。いずれにせよ明治のころは、その名の示す通り、山と川とに恵まれた静かな山村だった。

明治三十三年四月十日、父牧三郎、母しかの次男として誕生した。幼年時代は、父自身の口から聞いた限りでは、負けん気の強い腕白坊主だったらしい。何歳のころか、近所の子供と連れだって、かなり遠くにある青野ヶ原の練兵場に遊びに行き、行進する兵隊の列を追って、どんどん見知らぬ土地へ行ってしまう、夜

遅く帰って来たり、愛宕山に登って大きい石を皆で突き落とし、下にあった民家のひさしをこわして、一目散に逃げ帰った話など、幼い日の思い出を語る時、父はこよなく楽しそうだった。

近所に住む幼友たち長井武之介氏の話では、溝に魚をとりに行った時、苗代に魚はいっているのを見て、苗を引き抜いて魚をとうと衆議一決、泥ンこになってとり始めたのを運悪く見つかり、目の玉がとび出るほど叱られたことがあったとか。こんないたずらの言い出しっぺはだれだったのだろうか。

父の少年時代の写真を見ると、頭の大きい、やせた子供で、腕つぶしが強かったとは思えない。しかし



小学生のころ。母、姉とともに

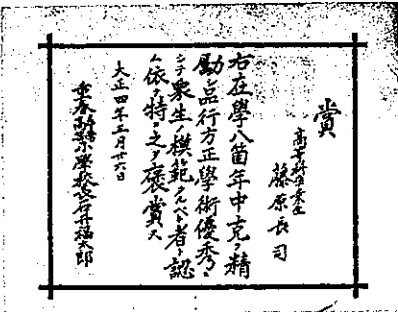
かし鼻っ柱の強さと頭の回転の速さで、常に同年代の子供たちの大将格だった。そのころ多くの農家では、耕作に牛を

飼っており、牛の世話、餌用の草刈りは、小さい時から子供たちの仕事であった。大きい籠を背負い、仲のいい四、五人が連れ立って村の草刈り場へ行くのが日課だったが、作業の中にも子供は遊びを作り出す。刈った草を一個所に集め、木の枝などで小さい輪を作った草の中に埋め込み、これを上から鎌でうまく突き当てた者は、その草を全部もらえるというルールを作った。楽しんだ。カンのいい父は、こういう遊びが得意だった。

ある時、父が輪をかくす番になり、草の中へ差し込んでいた手を引き出す前に、我がちにと友だちの一人が鎌を突っ込んだために、ぐざりと指を切り、そのときのきず痕は生涯消えなかった。

もともと体を動かすことでは、あまり器用とはいえず、草刈りの時に力いっぱい手前に引いた鎌を、勢い余って自分の足に食い込ませたり、道を歩いていて、どうしたはずみか大八車のかじ棒に、イヤというほど額をぶつけ、眉間に深いきずを作るなど、体のあちこちに「ぶきっちよのしるし」が残っていた。むこうズネのつるりとはげた大きなきず痕を見せて、なかば得意そうに「スネにきず持つ身」と冗談をいいながら、けがの

賞状
右は高等科卒業時の優等賞。
下右は小学校六年、同左は高等科二年各終了の時の賞状。
毎学年を終えるごとに、賞状をもらっている。



話を大げさにするのだった。また事あることにぐっと深くなる眉間の縦じわは、晩年まるで父のトレードマークのようになって、時にはこわがられたけれど、これもものんびりした少年の日のかたみだと思ふと、私にはこわさと同時に、ほのぼのとしたおかしさがいつもこみあげて来た。

数えの八歳で重春尋常高等小学校へ入学。一学年三、四十人、全校で高等科も入れて二百七、八十人の学校だったが、高等科を卒えるまでの八年間、いつも首席で通し、村でも評判の模範生だったと、同級生は口をそろえていう。とはいっても、ある級友の話では、小学校の講堂の腰板をはずして、それで鉄砲を作り、戦争ごっこをしながら滝野の滝まで遠征したというのだから、品行方正の模範生説もいささかあやしくなる。この小学校は明治四十五年に建て替えられている(「多可郡誌」大正十二年刊)ので、もしかすると解体寸前の校舎をちゃっかり活用したというあたりが真相かもしれない。

少年時代から大変親思いだったことも、何人かの口から聞かされた。祖父牧三郎は五、六反の田を持つ小農で、農作業のかたわら大工職をしていた。よその棟

上げなどによばれて帰りが遅い日でも、父は決して床につかないで待っていた、と当時を知る近所の老人が今も語り草にしている。

また信心の厚い祖母の影響で、日蓮宗の信仰を幼な心に植えつけられていた。子供の時に祖母から持たされたお守りを、父は終生大切にしていた。ある年の夏、大川へ泳ぎに行つて、そのお守り袋を川べりに置き忘れて帰ってしまった。忘れたのに気がついた時は、もう夜もとつぷり暮れている。あわてて提灯を片手に、田んぼの間を走り抜け、人っ子一人いない川岸の、石の間にあるのを見つけた時、ほっとして本当に嬉しかったと、これは母に語った話である。

このお守りはやややかさ高かったからか、ふだんは仏壇に置いていたが、出張の時は必ず胸のポケットに入れて出かけた。空襲の時も、地震の時も父と共にあり、病気で入院中はバジャマのポケットか、枕元に置いていた。最後の旅立ちの時、いつもそうしたように、母はお棺の中の父のふところへそっと納めた。

さてつい最近、生家の仏壇の中から、父が小学校六年の時に書いた夏休みの日記が出て来た。みの紙を二つに折り、こよりで綴じたもので、すべて墨書きであ

る。さすがに稚い筆蹟ながら、筆使いはなかなか達者なものである。

八月一日 木 晴天

朝草刈りに行った。帰ってから机に向つて教育勅語の書取をした。晝飯を食つて水あびに行った。午後には田に出て草取りをした。夕方牛を出してやった。ああ、この三十日余りの日をどうして暮らそうか。

八月四日 日 晴天

今日も変らぬ草刈りだ。籠を肩にして山へ行つた。十時ごろやつとわが家へ帰つた。帰つたら白井雄様から「少年」という雑誌をもらつていた。ぼくは大

大正元年八月一日 新刊
便良

暑中休暇日記

尋常科第六学年 藤永長司

日記帳表紙

喜びでさつそくそれを読んだ。正午水あびに行つた。午後は机に向かったが、あまり暑いので勉強をやめた。

それから田の草取り。夕は相も変わらぬ牛の世話。

八月十五日 木 晴天

今日は親類へお歳暮（中元のこと）筆者注）に行つたから、学科、仕事いっさい休み。

八月二十六日 月 晴天

太陽が東の山からによりと出て、草や木を照らしていた。余は彼の清書が一枚も出来ていぬから熱心に書いたが、どうしたものかちつともうまく出来ないので、やけで晝までぐずぐずして遊んでしまった。正午飯を食い、水あびに行った。午後五時ごろ墓に参つた。帰るとなんとなく気持のよい月がによりと出て草木を照らしていた。

八月二十九日 木 晴天

明けて今日、草刈りに行った。今日はこの間の雨喜びで一日休みだ。ぼくは午前中は家で復習をしたり、将棋をさしたりしたが、晝飯を食い水をあびに行つた。午後多勢で水あびに行つて写真をうつすのを見に行つた。それから消防組の写真をうつすのを見に行つ

た。日は西の山へとつぷり暮れ果てて、吹く風はなんとなく涼しかった。

ところどころ、現代かな使用に変えて抜き書きしてみた。そのころの生活の一端がうかがえる。うなぎ取り、七夕祭りと、農村の子供の遊びも出て来る。時どき書くのがめんどろになるのか「無事なり」と一行、うんと長く引きのばした文字で、書きなぐつた日もある。日記の終りに先生あての「あと書き」があった。一部を次に引用するが、積極的で率直にものをいう父の面目躍如たるものがある。

先生 あなたは夏休み中どうして暮らされました。山に暮らされましたか。川でお暮らしでしたか。あるいは田にお暮らしでしたか。（中略）私は休業中一度も病気にかかったことなどはありません。先生も新学期になって背いような顔をしておられないであらうと思いますが、いっそう奮励努力して教えて下さい。ぼくも熱心におぼえるつもりです。

余白に先生が朱筆で、ちよつぱり弁解めいた返事を

書いている。「私は本年の夏休みにはうんと勉強せんと思っていまして、家の用事や学校の用事に時間をとられたものですから、思うようにできませんでした。二学期はうんとやる考えだから、しっかり勉強しなさい」と。

あくる大正二年の夏、父が高等科一年の時、家のすぐそばを播州鉄道が通る。「兵庫百年史」昭和四十二年刊）加古川から西脇までのびたこの路線は、シュツポシュツポと文明開化のひびきを静かな山村へ持ち込んだ。これで西脇を中心とする播州織は活況を呈するようになるのだが、父もまた生まれて初めて蒸気機



1 日駅長になり、少年時代にあこがれた制服を着る。昭和47年

関車を見て、ひそかに「車掌になりたい」と少年らしい夢をえがいていたという。高等科一年生（現在の中学一年）がそう考えるのは、今から思うと幼稚な

あこがれのように見えるが、何しろ当時は交通機関といえは荷車か人力車くらいのものであったから、さしずめ宇宙飛行士くらいの新鮮な魅力があったに違いない。村の人がみな、着物で暮らしている時に、制服制帽姿で、大きな車と思うまま制御するように見える人たちは、とびきり先端的で、かつこい職業人に見えるのだろうか。

さて高等科二年を出る時、父は人生で初めての選択の場に立たされた。勉強には自信があったから、できれば中学校へ進学したくてうずうずしていた。担任の先生は「君はようできるんやから、工業学校か、姫路の師範学校へはいったらどうや」とさかんにすすめた。師範学校なら授業料や寮費は免除される。戦前は貧しい家庭の優秀な子弟がこのルートで教育界に進出し、日本の教育の基礎づくりをしたのはよく知られているが、父も教職がきらいではなかった。先生が居るすの時は下級生の授業の手伝いをしたというくらいだったから、学校へ行けるなら、と期待したのは無理もない。しかし祖父はそれも反対した。たとえ学費はいらないくても、小づかいその他は必要だから。

親には絶対服従だった父も、この時は祖父をうらん

だという。だが石にかじりついても学校へ行きたい、と思ったものの、当時は上の学校へ進むのは学年で一人か二人。家庭の経済事情からいって無理だと、けん命に自分に言い聞かせた。

就職と決まれば職捜しである。何しろ村では優等生で親孝行と評判の少年だったから、元村長さんがひと肌脱いでくれた。世話好きで顔の広いその人は、八方手をつくして、やがて三つの就職口を持って来た。日本銀行大阪支店、姫路裁判所、神戸の鈴木商店の三つであった。三つのうちでは日本銀行に一番魅かれた。そこでくわしい話を聞いてもらったところ、小学校出では将来の見込みがないとの返事が来た。「そんならいわい。まだ二つあるぞ」。姫路の裁判所はじめは給仕だが、いずれは書記になれる見込みがあるという。しかも庶民のあこがれる「官員さん」のはしくれである。だがいかめしい裁判所では、何やら息がつまりそうな気がして、もうひとつ気が進まない。とうとう第三候補の鈴木商店に決めざるを得なくなった。

「鈴木商店って、いったい何をしてるんですか」と父が元村長さんに尋ねると、「砂糖とか小麦粉とかを扱っている店や」という。腕力ではあまり自信のない父は

「さあ大変。砂糖や小麦粉の配達など、力仕事をせんならん」と、悲壮な覚悟を決めた。だが学歴で将来の決まってしまう銀行などより、実力がものをいうらしいこと、勉強しようと思えばその可能性もありそうなことなどがうれしかった。

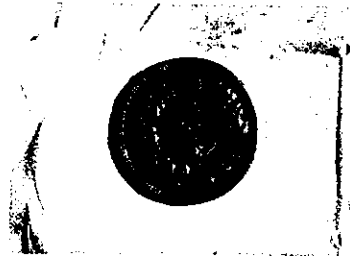
四月にはいって鈴木商店の人事係から「来い」と連絡があり、五月四日、神戸へ向かった。出発の日には縞の着物、角帯、紺足袋、麻裏ぞうりといういでたち。祖母の心づくしの赤飯が出されたのに、これからおもむく見知らぬ土地、この先出会う見知らぬ人、不安ばかりが先に立って、とうてい味わう気にはなれなかったと父は述懐していた。

ひと昔前は、農村を出るのは村で食いつめて、夜逃げ同様に都会へ向う者が多かったが、日露戦争以後は国力の拡大と共に、前途ある青年が都会へ流出するという風潮になっていた。そうしむけたものは、なんといっても「成功」の二字である。「身を立て名をあげ」ることは家の名誉、一門のほまれ、孝の始めとして高く評価される。また村の人々にとっては郷土のほまれと、社会的にもそれを正当化する土壌があった。進学の夢をはばまれ、郷里を出る父が、成功者になろうと

ひそかに思ったのは、きわめて当然のことである。

2

車掌になりたい、とあこがれていた汽車に、父は思おもよらず一人の客として乗り込むことになった。生まれて初めての汽車の旅である。だがはじめは「官員さん」になりたいと願っていたのに、それがかなわず名前を聞いたこともない店へ「奉公」することになったのだから、父の心境としては、とうてい青雲の志を抱いて、などという晴れがましいものではなかった。



家を出る時もらった銀貨。包み紙も当時のまま

家を出る前、仏壇に手を合わせ、「ご先祖様行ってまいります。家族を、そして私をお守り下さい」と一心に念じたものの、気持ちは沈みがちだった。生まれて初めて家を出る心細さに、少年らしい感傷にひたっていたとし

ても無理はない。

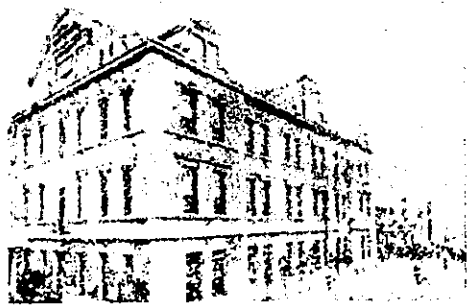
家を出た時から、じつと握りしめていた小さい紙包みを、父は固い座席に腰をおろして、ようやく開いて見る気になった。「お小遣いにな」と、こみあげる気持ちを抑えるように小さな声で、祖母が耳元でささやき、そつと渡してくれたものである。開いてみると二十銭銀貨だった。裕福でない家計から祖母はこの日のためにひそかに用意していたに違いない。現在の貨幣価値に換算するには、米の価格を基準にするしかないが、第一次大戦開戦後の暴落から米騒動まで、相場は乱高下している。中値をとって計算すれば二百七、八十円だが、消費生活面での米のウエイトの違いも考慮する必要がある。この銀貨を、父は終生手放さなかった。どんな時にも手をつけず、祖母からももらったまま、包み紙が黄ばんでも、お守りのように大切にしていた。のちに母と結婚した時、そのいわれを話して、大切に残しておいてくれと、特に頼んだというが、戦災や震災の混乱の中でも、母はそれを命ぜられた通り大切に保管して来た。

今なら加古川まで快速で一時間足らずだが、当時は

ガタゴトと三時間近くもかかった。神戸駅に降りた二人は、身の回り品をぎっしり包んだ風呂敷包みを肩に、まるで大黒様のようなかつこうである。初めての土地で、別れる前にせめて名所を見せてやりたいとの親心からか、祖父は湊川神社に父を連れて行き、近くの商店街で、一人暮らしには欠かせない柳行李を買い求めた。人の良さそうなおかみさんが、話しかけて来た。「どっかへ奉公するの」「鈴木商店です」「そりゃいいところへはいりなされた。鈴木さんなら間違いない。はじめにがんばりなさいね」。勤め先が少しは人に知られる店であったことも、父を安心させたが、それ以上に見知らぬ人が暖く声をかけて励ましたことがうれしく、心にじいんとした。

大きな荷物を持ったまま、二人はメリケン波止場へ行き、海を見ながら昼食をとった。竹の皮に包んだ巻きずしをほおばりながら、父はふと涙ぐみそうになった。横で黙々と食べている祖父に何か言おうとしたが、話しかけると泣けて来そうで、ついに何も言わず、のど元にこみあげるものを、すしといっしょにぐつと飲み込んだ。

鈴木商店の本店は栄町三丁目にあった。当時として



鈴木商店の本店 (辰巳会提供)



当時の社内風景。英文タイプストもいる (同)

は珍しい白亜の洋館で、三階建が周囲を圧して大きく、立派に見えた。小さな卸屋だろうと思っていた父は、目の玉がとび出るほど驚き、屋内に足を踏み入れてまたびっくりした。社員はみな洋服だし、その多くの方が机の上に見たこともない機械をのせて、目まぐるしく操作している。先進国を相手に大きな取引をしているだけあって、英文タイプライターなどの事務機を、

社員が自由に使いこなしていたのである。

あつけにとられている父に、祖父は「しつかりやれよ」と、ひと言いつたきりで、くるりと背を向けてきつさと帰ってしまった。もつとやさしい言葉をかけてくれてもよさそうなものを、と父は内心不服だった。しかし祖父にしてみれば、それがせい一ぱいの気持ちの表現だったのだろう。

一人になって、寮で荷物をほどこしながら、父は初めてホロリと涙をこぼした。朝からこらえていたものが、せきを切ったようにあふれ出た。港が近いから、夜、床につくと船の汽笛がやけにしめっぽくひびいて来る。朝、薄暗いうちに顔を洗っていると、都会のしじまを縫って汽車の汽笛が耳につく。「あれに乗ったらうちへ

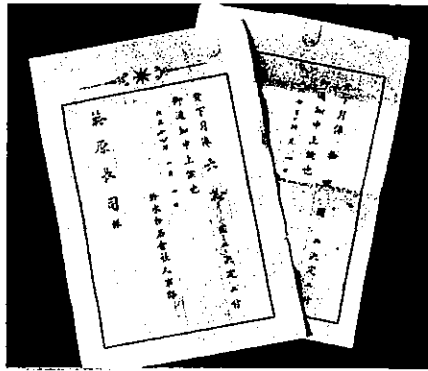


新入社員のところ

帰れる、と思うと涙がじわーっと出てきよってなあ」就職の第一歩で、まずホームシックとの戦いに立ち向かわなければならなかった。

そのころの鈴木商店は、第一次大戦中の景気の波に乗って伸びており、三井・三菱と肩を並べつつある新興勢力であった。いきおい社風も進歩的で、いわゆる「丁稚奉公」の古めかしさは、みじんもなかった。入社の時、紺サージの詰衿の制服と靴を支給され、生まれて初めて洋服に身を包んだ。「制服を着て働きたい」という夢だけは、どうやらかなえられたわけである。夏には薄ねず色の麻服に変った。社会へのスタートが、綿の着物に前だれ姿でなかったことは、早くも仕事への気構えをかなり変えていた。

ほんさん——見習社員のことを当時からこう呼んでいた——といえども、みな優秀な連中がそろっていて、競って働いたから、活気があった。初任給は一円。商業学校出は四円、大学卒十五円だから、今思うとびっくりするような格差だが、これが進学を断念して就職した父にどううつっただろう。「仕事で来い」と、持ち前の負けん気で発奮したことは想像に難くない。それは毎日の仕事ぶりにすぐ現れた。



若手社員時代の辞令。大正14年

ほんさんは忙しい。朝は起きぬけに寮を出て、店でみそ汁とつけ物の朝食をとる。八時半から仕事。一日のうちに多い時は十回以上も、自転車で郵便局に電報をうちに行く。

それと来たら待った無しでとび出す。手紙を出しに一日三回。そして銀行へ金の出し入れにも走る。合い間にお茶くみ、掃除もする。外回りの仕事がいかに大変だったかは、のちに「内勤」になって非常に喜んでい

る手紙が残っていることから想像できる。寮へ帰るのは大い夜の八、九時ごろになった。食事は三食とも店で支給されるから、夜学へ通う者はそこから学校へ直行する。しかし主任さん（現在の広瀬の課長に当たる）が頑張っている限りほんさんは足留めをくらったし、夜になって船に荷物を積み込むこと

もしばしばで、それを手伝って明け方店に帰り、机の上をちよつと片づけて、そこでごろ寝をしたこともあった。当時、同じく小学校高等科卒ではいった仲間に日商岩井株式会社相談役西川政一氏（元日商社長）がいる。（西川氏はのちに進学のため、いったん退社している）

さて万事のみ込みが速くて、やる気満々、筆をとれば少年とは思えぬほどの達筆だった父は、「ようやるヤツや」と先輩たちから目をかけられ、楽しくバリバリ働いた。月給こそ少ないが、日曜日ごとに十銭ずつの小づかい銭をくれたので、ぼつぼつ神戸の繁華街へくり出すようになり、屈託のない日々を送る。

社員の間には勉強熱がみなぎっていた。算盤、英語、漢文、商業簿記などである。すでに社内教育制度みたいなものも整っていたが、町の塾に自費で通う熱心な勉強家もいた。寮の中でもほとんどが旧制中学か商業学校卒以上で、小学校だけの者はめったにいない。周囲の者がみなえらく見え、学歴コンプレックスに悩まされた。「何くそ」とがんばってはみるが、独学では思うように進まない。一時は店をやめて苦学しようかと本気で考えたが、その決心もつきかねた。夜学に通っ

て英語をかじったこともあるが、勤務時間もルーズな時代には、とうてい長続きは無理だった。

しかし同僚のうち、多少の学歴があったため、他の会社へ転じて失敗した者もある。かえって「石にかじりついても鈴木商店を離れまい」と心に誓ったことが、結局のちの仕事の基礎を作ることになったわけだ。生半可な肩書きなんか、かえって邪魔だ」というのが、父の口癖になった。晩年まで、それを口にしたが、あたかも自分に言い聞かせているかのように私には思えた。

仕事の中には荒っぽい力仕事のほかに、封書やよそへの届け物の上書きをしたり、創業者の未亡人鈴木よ



鈴木よね刀自

ね刀自の外出のお供をおおせつかることもあった。命ぜられたぼんさんは、風呂敷包みなどを持ち、数歩きがってついて

歩く。当時の社長は鈴木岩次郎で、その母堂よね刀自は会長のような存在だった。若くして未亡人となったが、夫の死後は「稀代の仕事師」といわれた番頭金子直吉に指揮をゆだね、共に鈴木商店を大きく育てた人である。本宅から時おり事務所に生ける花をいっぱいかかえて現われ、社員のだれかれに声をかけ、社員からは「お家さん」と呼ばれて、若い者にも慕われていた。父も心からお家さんを尊敬しており、戦前のわが家の客間には大きく引き伸ばした鈴木よね、高橋半助（鈴木商店名古屋支店長）両氏の写真が飾ってあって、親類でもないのになぜだろう、と子供心に不思議に思ったものである。

入社した年の暮、名古屋支店に配属される。西区下園町二丁目、狭い通りに面した二階建の事務所だった。この辺は綿布問屋が多く、西隣は服部興合名会社、東隣は宮田合名会社、筋向いには岡田商店があった。服部興合名の綿布倉庫の隣にはオートバイ屋スイフト商会があって、のちに父はここをひいきにして、オートバイを乗り回すようになった。下園町の事務所跡は現在名古屋市立御園小学校となっている。また名古屋支店は大正十三年に百米ほど広小路に近い場所に、倒産し

た砂糖問屋の跡を買い取って改築のうえ移転している。

名古屋に来て初めて父は帳簿をつける仕事について。無論、外回りの仕事のかたわらである。やつと要領ものみ込み、万事好調に運んでいた矢先の大正五年十月、祖父が亡くなった。「チキトクスグカエレ」の電報に驚いて夜行にとび乗り、郷里の家に着いたのが次の日の昼ごろで、すでに祖父の意識はなく、父の到着を待ちかねていたように、その日の夕方を引き取った。

祖母が父の耳元で、涙ながらにささやいた。「お父さんは、お前が就職してから『就職をいやがる長司を無理に就職させてしもうた』と、口癖のようにいい、後悔しな

さってなあ。それで気病（や）みして、だんだん重うな

って、とうとう……」
口ではやさしいことなど一度も言ってくれなかったのに、腹の中ではそれほど自分のことを思っていたくれたのか、と今さらのように祖父を一度ならずうらみがましく思ったことなどが思い出され、父は祖父の手を握りしめて、だれはばからず涙を流したという。
葬儀のあと、名古屋へもどつてから、父の兄、馬吉あてに出した親展の手紙がある。数えの十七歳（現在の高校一年）の少年が書いたとは思えぬ筆蹟で、帰名

御手紙拝見仕り候。皆様には御変りも無く御暮らしの由、小生も実にうれしく御座候。亡父の忌中も追々余日少なく相成り、いつもながら当方は充分のお祭りも出来ねば、貴方にてよろしくお祭り下

家族にあてた手紙。大正5年11月11日付

の途中、神戸や大阪で下車して、次々と知人、先輩を訪ねてあいさつをし、夜の十時ごろ名古屋へ着いたとある。出費がかさんだあと、父の手許に残った現金の報告、祖母へのいたわり、農事に追われる伯父への配慮、親類の仏事などに至るまで、まるで一人前の大人のような思慮深さを見せているのに驚かされる。これに対し、折り返し返事が来たらしく、父もこれに

されたく候。姉上のことについても母上様決して御心配なきよう、気をおだやかに：（以下略）——大正五年十一月十一日付

このころ筆まめに手紙を出したものの、数通が生家に保存されていた。大正六年一月十四日付のはがきは、旧正月前に、台湾製糖のカレンダーを鉄道便で送ったこと、スチンソン嬢の飛行を見物に出かけたこと、正月に社員一同でとった写真ができたので一枚送ることなどが、ペン書きでぎっしり書き込んである。旧正月の年賀状をかねた封書は、かなり具体的に寮の生活を描いているので引用しよう。

旧正の御慶めでたく候。皆様にはお揃いにて無異御越年の御ことと存じ候。陳者年末御取込の折柄、結構なる大々好物御送付にあずかり、今朝まさに到着、落手仕り候。栗柿に至るまで何かとお心尽しありがたく厚く御礼申上候。新正月以来餅々と皆待ちこがれ居候折柄のこととて、なおさらのことさつそくただ今同僚四、五人と火鉢を囲み、母上様はじめ皆々様の甘き御慈悲と甘き砂糖にてなお甘く頂戴仕り候。

旧正の御慶めでたく候。皆様にはお揃いにて無異御越年の御ことと存じ候。陳者年末御取込の折柄、結構なる大々好物御送付にあずかり、今朝まさに到着、落手仕り候。栗柿に至るまで何かとお心尽しありがたく厚く御礼申上候。新正月以来餅々と皆待ちこがれ居候折柄のこととて、なおさらのことさつそくただ今同僚四、五人と火鉢を囲み、母上様はじめ皆々様の甘き御慈悲と甘き砂糖にてなお甘く頂戴仕り候。

正月の品々を感謝する手紙。大正6年

いずれも遠く隔りて来れる者どもとて非常に喜び申候。（中略）朝起き出れば今ごろは皆様御宮参りの時分、昼ごろ外へ出すれば今ごろは皆様おそろいにて御食事か、電燈のつきたるのちは炬達にて雑談の時分と、本日は左様に思い暮し候。（中略）小生近ごろなかなか多忙にて終日机に向い、夜に相成り候えば、風呂に入り少々読書すればはや十時、朝起き出し勉強したくとも、吹きすすむ風の音を聞き候えば起き出る気も致さず候。その間に英語も、また簿記も商算、

算盤と商業必要の項も勉強致し、実際このごろの藤原さんは多用多事に候。ハ、ハ、ハ。この四月にでも相成り候えば一円乃至一円五十銭昇給すること案にて候。ハ、ハ、ハ。このころは終日室内に居ることとて、西風吹くとも寒さ知らず候。昨年今ごろは自転車にてとび回り居候いしに、今ははや、いや一年くらいで内勤と相成り候は神様のおかげに候。（中略）つまらぬことの数々正月の雑談中のおなぐさみに差出候。御笑覧下されたく、いずれそのうち当方よりも何かお返し致すべく候。餅食いて元氣した先生（同僚のこと＝筆者注）の笑声、芝居のこわいらの数々が聞こえる。ハ、ハ、ハ、ハ。

一月二十三日午後十時半

電燈の下にて皆様のことどもを頭に浮かべつつ

藤原御一同様

藤原長司

実に長い手紙である。その半分ほどをあえて引用したのは、せい一ぱいとめてある若者の誇らしき、屈託のないほんさんの生活、そして家族の団らん仲間入りをねがういじらしき等々が、行間から読み取れると思ったからである。前出の手紙によると、給料はすで

に二円五十銭になっている。次いで営業関係に仕事が変わると、手紙にもいっぱしの意見を書くようになった。

（前略）近ごろは九月決算期にて多大忙に候。不本意ながら失念仕り候も各地の大暴風大被害の由、貴地はざしたることもなき由、まず何より。あの長き野村橋を第一に心配致し居候いしが、異変なかりしや。（中略）東京深川は米が五、六十万、砂糖は十万余い濡れたる由、今年は少々米高のよう愚考仕り候。収穫期も近づき候ことゆえ、今年も米の売り方に注意して、収入増加をはからるること肝要にて候。（中略）過日またまた特別賞与として月給の六倍下され候（中略）ごめんどうながらじゅんばんの黒えりのもの、お送り下されたく候。今年はシャツもズボンも万事当方にて調達つかまつるべく候間、右の物一品、なるべく至急御送付下されたく候。（中略）宮の講にて貴地儉約のことは承知致し居り候。お漬物にても送つてよろしければお送り申上ぐべく候間あらかじめ御承知下されたく候。十月十三日夜

藤原様

船入町寄宿舎にて 長司

この手紙も大正六年だが、給料の六倍もの特別賞与をはずんだのは、それほど事業が伸びていたことを表している。すなわち明治のころは砂糖と樟脳などを主として扱っていたのが、次第に鉄鋼、石炭、石油、塩、小麦粉、ビール、タバコ、ゴム、金属、機械、船舶、造船、セルロイド、肥料、棉花、綿糸布、毛類、人絹などへ、順次手をひろげ、「SZK」の商標は世界に知られた。特に第一次大戦中は金子直吉の積極策が功を奏し、大正六年には取引高十五億四余、世界的な大商社にのしあがっている。

さて、名古屋市中で営業の仕事を三年くらい続けたのち、父は半田、亀崎両市（いずれも愛知県）にあった食用油や肥料の製造工場へ、駐在員として武者修業に出ており、一年ほどして名古屋支店にもどっている。大正九年、父は二十一歳、油の乗り切った青年社員であった。この年、戦前の男子が一度は受けねばならなかった徴兵検査で、父は第二乙種となり、兵営暮らしをまぬかれていた。

同年、鈴木商店は資本金を五千万円にした。企業の躍進期に、吸収力の旺盛な若者が、一年のブランクもなしにその伸展の中に身を置き、未来を考えることは、

進取の気象をいやが上にも育て、また夢を大きくするのに資することであろう。鈴木系の関連会社は、当時すでに神戸製鋼、帝国人絹、播磨造船、日本製粉、大日本セルロイドなど六十余社におよび、支配する資本は五億円をこえていた。

またこの年、小林悟録氏（元広瀬専務・現監査役）が大津商業を出て鈴木商店にはいり、同じくほんさんとして、父と共に働くことになった。父は綿糸毛類部に配属され、愛知県の一宮、尾西、知多半島一帯、岐阜市などの得意先へ、自転車で売り込み回っていた。遠方へは人力車を使うこともできた。元来名古屋地区は、東京と大阪にはさまれているだけに、商売については実に抜け目のないところがあるといわれ、殊に一宮の機屋は、商売にかけては大変なスゴ腕という評判で、仲間うちでは「一宮鴉（がらす）」とかげ口をたたかれるほどだった。ド根生があつて、腹の底がわからないというくらいの意味だが、この間の商売のかけ引き、その他もろもろの経験が、のちに福井へ進出する時、大きく役に立ったと父は述懐していた。

大正十一年、人絹の担当となる。鈴木の子会社帝國人絹・米沢工場ではようやく人絹糸の生産が進んでい

た。名古屋支店でも人絹を扱わないか、ともちかけられ、毛を担当していた成瀬佐太郎氏と相談して、米沢から送られたものを毛との交織で使うよう、機屋に呼びかけたりしている。毛織物はそれまで小幅物のセルばかりだったのが、ダブルの織物を手がけ始めた時期で、機屋の方もかなり研究に熱を入れたらしい。父たちも人絹糸をなんとか使いやすい、魅力あるものになくしては、と考えて、幸い広島に帝人の捻糸工場があったので「そこへ材料を送って、捻糸に作らそうやないか」「そや、送れ、送れ」と、二人の発案で、人絹と羊毛の原料を送ったこともある。「大した量やないし、上役はおらん。乱暴なようだけど勝手にやれたとこがありましたね」と成瀬氏は回想する。

そのころ満州安東県出張所（現・中国東北地方）から名古屋支店に転勤して来た南馬の助氏が主任で、柞蚕糸の取扱いが始まる。柞蚕糸は満州でとれた山繭から作られ、支那人商館を通じて買い取って、名古屋で輸入手続きをとり、福井へ送って絹紬に織りあげていた。福井からは機屋が買い付けに来るし、父も福井へ出張して、福井の事情にくわしくなる。ここなら人絹もいけそうだ、というわけで柞蚕糸のお得意先に人

絹糸を売り、着々と顔をひろげて行つた。福井の松下正次商店は主な取引先の一つで、短期間のうちに二度ほど内整理があり、鈴木商店はかなりの被害をうけている。松下氏が書画骨董、刀剣類をたずさえて、高橋支店長のところへ弁明と謝罪に来たことは再三だったという。

満州安東県へは、柞蚕糸の勉強もかねて一カ月ほど長期出張をしている。満州人とかけ引きする言葉を父は丸暗記していて、それをペラペラと早口でまくしたてるのが実にうまかった。それをそっくりおぼえようと、私はノートにメモをしたことがあるが、それをどこかへしまい忘れ、残念でならない。一番最後が「マイマイ・カンカン」で終わる長いせりふを、昔は時おり口にして、私たちを笑わせたものである。

さて名古屋に綿糸布取引所（現繊維取引所）が開設されたのは大正十一年のことである。東京・杉の森、大阪・船場の三品取引所に次いで三番目。名古屋の紡績会社、綿糸・綿布の間屋を会員として運営された。名古屋支店にも綿糸布部ができ、主任佐藤亮次氏のもとで、故松本勝弥氏（のちの樹岡氏、博司氏父君）と父が係となった。

何しろ取引所の仕事は初めてだから、相場の手振りを練習することから始めなくてはならない。商才があつて機転のきく者を、と父が市場代理人(場立ち)に指名され、夜になると会員各社から一人ずつ、選ばれた者が集まつて、かなり長い間訓練を受けた。夕方、そこへ練習に出かける時、同僚から「間違わんようにしつかりやれよ」と冷やかされながらも、父は得意だつた。

九月に取引所の業務を始めると、父は佐藤亮次氏の指揮で商売をするようになる。調子よくいったらしくて、鈴木商店の名古屋には、若い相場観の鋭い人がいると、名を知られたこともあつた。一度は佐藤氏の判断で十万円をこえる大きな失敗があつたと聞いている。またそのころは個人の金をはることも大つぱらにできたので、ちよいちよい小遣い銭かせぎをしていたらしい。それを洋服の新調、芝居小屋通い、お茶屋遊びなどに使つてい、遊び仲間の分もそれでまかなつていたようである。

ともあれ若い時から相場の中に生き、浮き沈みの激しさは肝に銘じていた。ある意味では酷薄ともいえるぎびしさを承知してはいても、あえてそれをするとい

うところが父にはあつた。のちに広燃商會を設立したあとも、成瀬氏に会うたびに「今はこないしているけどなあ、あすは元の木阿弥になるかもしれないのや。わしはそんな運命を持った男や」といつていたという。父に単なる有能な実務家以上の「何か」がかりに備わつて来たと思へば、相場の中に無常をのぞき見たことが、ひとつの契機になつたのではないかと私は思う。

関東大震災の時には、鈴木の本東京支店の救援のため、一番近い名古屋支店から父たちが派遣された。かつおぶしや缶詰を背負つて、汽車で静岡の先まで行き、清水港から船に乗つて横浜へ入港、こわれた防波堤へハシケで横づけし、これも半分こわれたような電車を乗り継ぎ、やっと東京に着いたと父から聞いている。

話は前後するが、大正七年に米騒動が起きる。神戸の本店は焼打ちされ、名古屋でも八月十日夜、民衆が鶴舞公園で抗議の市民大会を開き、二万人も動員するなど、一時は不穏な空気がつたが、たまたま父は工場にいたので、その状況は目撃していない。ただあの米騒動は、鈴木に関していへばえん罪で、仕組まれたわなにかつたのだ、と父はいつもいつていた。私は半信半疑で聞いていたが、小説「鼠」(城山三郎著、四

十一年刊)にその経過がくわしく書かれてあり、なるほどと納得するものがあつた。父はこの本を、入院中に読み返したいといい、金沢の病院へ取り寄せたが、その時はすでに自分で読む気力はなく、読むのを聞くことさえおっくうな様子で、ついにページを繰ることになつた。米騒動への興味もあつたのだろうが、それ以上に金子直吉の鋭い直観と洞察力で、あやまたずに動いた時期と、経営の実権が社内にいわたる近代派の手に移つて行くあたりを、父は自分の事業になぞらえて考えてみたかつたのだろうと私は見ている。

ところで名古屋時代は父の青春期である。血氣盛んな若者が、独身寮にたむろすれば、遊びもしよう、騒ぎもしよう。独身者の済美(さいび)寮は市のメイン



城山三郎著「鼠」

ストリート広小路通りを駅から東に向かつて納屋橋の手前を堀川ぞいに曲り、角の納屋橋、饅頭本店から西へ五、六軒目の左側にあつた。寮の前

は木造の倉庫が立ち並び、名古屋港からのハシケが通つてい、近くの水産市場では毎日早朝のセリ市がにぎわつていた。堀川の下流には東陽倉庫があつて、築港から運ばれた砂糖、肥料、大豆、豆粕などがぎっしりつまつてゐる。すなわち朝起きた時から寝に就くまで、見るもの聞くもの、すべてビジネスという環境なのである。

寮は二十室ほどある大きなしもたやで、屋敷の中央に土間の通路があり、右側の部屋は居室で、二十四五人が住み、奥にお目付役の寮長川上恒二氏が寝起きしていた。勤務が伸びて夜の十時近くになることが珍しくないし、土曜日でも夕方までは仕事だから、十一時の門限を守ることは頭痛の種だつた。そうでなくとも夜行型の父は、門限違反の常習犯である。土曜日の夜は大てい午前一時か二時になる。迷惑をしたのは玄関わきの部屋で寝起きしていた小林氏で、「おい小林君、頼むわ」と起こされて、こつそりとしのび込む手伝いをよくさせられたものだといふ。その罪ほろぼしは、口留め料か、日曜日には広小路のすし屋や支那料理屋、たまには名古屋名物かしわのすき焼き屋などで、父は気前よくおこつた。

日曜・祭日でも、食事は事務所で三食ともとりま
りであったが、ふところゆとりのある時は、好きな
物を食べ歩く。すぐ近くの「宮鍵」といううなぎ屋で、
三十銭の丼を食べるのが、独身者の豪遊のひとつだっ
た。うどんが五銭、終生大好物だった納屋橋饅頭が一
個一銭だった。「給料も安かったけど、遊ぶ費用も安か
ったから、皆でよく出かけてましてね。大正十年に私が
結婚した時、女中を置いて、週に一度はお茶屋遊びが
できましたよ」と、当時の同僚伏見俊助氏は語る。鈴



相模の寒稽古記念。左から三人目後方

木商店のやり方
は、もうけさえ
出れば社員のや
りたいようにさ
せるという傾向
があつて、社用
の宴会でもかな
り自由だったら
しい。だれをど
んな目的で招い
たか、きちんと
書き出してハン

を押すという制度ができたのは大正九年と伏見氏は記
憶している。最も盛大に遊んだのは、岐阜あたりの料
亭だった。ひと晩中太鼓をたたいて建物の周囲を回っ
たりしてどんちゃん騒ぎをしたこともあるという。

スポーツもさかんで、寮の裏手にあつた倉の中に土
俵が築かれ、大阪相模の幕内力士をつとめた一ノ矢関
を師匠として、若い社員が名古屋市主催の相撲大会の
ために、毎夜猛練習をしていた。社内でも「紳士相撲」
と称して力を競っていた。まわしを締めた雄姿(?)が
残っているが、父の口から一度も自慢話を聞いたこと
がないから、おそらく強い方ではなかったであろう。
野球や乗馬クラブもあつたが、父はテニスをほんの少
々やったことがある程度。支店長の家では玉突き、お
茶の会なども開かれたが、父が一番張り切つたのが、
年に一度の芸能大会だった。寄席や歌舞伎が好きで、
名古屋の大須観音裏にあつた芝居小屋や御園座へもよ
く出かけていたから、チャンス到来とばかり張り切つ
た。忘年会の出しものだから、日本髪を結った娘さん
たちが大勢つめかけるのはわかつてる。「いいとこ
を見せようや」と、独身組は大いにハッスル、レコー
ドを買って来て名優の声色、せりふ回しをけん命にま



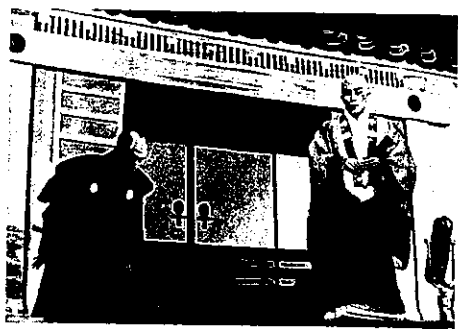
白浪五人男の舞台。左端が父、中央故榊岡氏、右端伏見氏

ねて熱演した。

父は「白浪五人
男」で五人の泥
棒の親玉日本駄
右衛門を演じた
のだから、その
得意や思うべし。
晩年まで芝居は
大好きで、東京
では時間がとれ
ると必ず芝居を
見て楽しんでい
た。しかつめら
しい出し物より、

世話物が好きなのも、父の気性、考えを表していると思
う。後年、福井の放送会館で忘年会が開かれた時、河
内山宗俊を演じたことがあつたが、あの玄関先の場のせ
りふは、昔から好きな一節で、よく風呂の中などで口に
していた。舞台でほんものそっくりのいでたちで大見得
を切った時は、さぞや気分がよかったことだろう。

何を思い立ってか、長唄を神妙に習ったこともある



見せ場にさしかかった河内山宗俊の舞台

らしい。成瀬氏の家
へ先生が出げいに
来るので、そこへ仲
間入りしたのだが、
父の長唄は、調子が
乗って来るとだんだ
ん浪花節に似て来る
という、とても愛嬌
のあるものだったよ
うだ。

ともあれ声色から
ちよつとした手踊り

まで、なかなか芸達者だと、お世辞半分にせよいわれ
た父であつたが、その下地を身につけたのがこの名古屋
時代であり、また事業のありようをじっくり見つめ、
身をもって商売のコツを学び取ったのもここだったとい
えよう。

こうして青春時代を謳歌するうち、そろそろ身を固
めては、という話を持ちあがる。どうやらそのころ、
名古屋にも候補者がいたらしい。その話を郷里へ言っ
てやったものとみえ、わざわざ祖母が名古屋にとんで

来て「嫁はくにかもらわなにかん」と反対し、それだけでは安心できないと思ったのか、成瀬、伏見の両氏に「どうか息子に思いとどまるよう、言って下さい」と頼み込んで帰って行った。二人ともすでに結婚はしていたものの、さてどうしたらいいか名案が浮かばない。

いかに祖母の頼みとはいえ、その縁をむげに白紙に戻していいかどうかも軽々しくはいえない。みなで相談するうち、「そんなら八卦見に見てもらおうやないか」「当るも八卦、当らぬも八卦。そや、行こう」と、二人がこもこも言い出し、せき立てられるようにして、洗心堂という有名な易者の門をたたいた。黙ってすわればなんとやら、の言葉通り、その易者先生が父の顔を見るなり、何も相談事を切り出さないうちに、「あんたの顔には女の相がうつっている。よくない、やめなさい」と、ピシリと言いつつ放った。さすがの父もさつと顔が紅潮し、一言もない。ついて行った二人も驚いた。前もって打ち合わせをしたわけでもないのに、一瞬に解決したので、お礼をはずんで帰って来た。それ以来、その人のことはぶつりあきらめたそうだ。

服装についても、なかなかおしやれで、せい一ぱい

上等を着るといふ風だった。満州へ行った前後、絹紬が手にはいりやすかったためか、絹のワイシャツを縫ってもらって着ていたと父は話していた。帽子から下着に至るまで、洋行帰りの多い鈴木商店で、外国の有名ブランドの品を見たり、話を聞いたりし、給料の中で買える範囲ながら「ええかつこ」をすることも忘れていない。大正十二年の手紙に、伯父にセルを見立てた話が出ていたので、一部を引用しよう。

(前略)此度合名会社を資本金八千万円の株式会社組織変更相なり候。内容なんの变化これなく候。ついでお耳に入れ置き候。(中略)久しき前よりご信書拝受居候セル地二反、本日鉄道便にてお送り申上げ候間御受取下されたく、幾分はでかと買ったのちに心配致し居候。もし万一お気に召さぬなら、小生も今年はずい買いたく存じ居候折柄、この品は小生の分として、さらに別品買求めお送り致し候てもよろしく、否や至急ご返事下されたく候。(中略)母上様もご丈夫に候哉。御身お大事に遊ばされたく候。

三月二十一日

長司

兄上様

大正十二年の組織がえは、合名会社鈴木商店から、株式会社鈴木商店を独立させたもので、二十代の社員

の目には「内容なんの变化無之」とうつたが、事實はかなり大幅だった。さきに述べた通り大正九年までの拡大は目ざましかったが、これは多分に投機的な活動に頼っており、それだけに経営は放漫にならざるを得なかった。一方では若い人たちが「一匹おおかみ」のような形で、腕をふるい得る余地があったものの、他方では経営に一体感を欠くことも避けられず、好調のあとの反動のように、経営が次第に悪化し、切り抜けに四苦八苦という状態が続き、組織をかえて再建を図ろうとこころみたわけである。しかし秋には関東大震災で取引先が大打撃を受け、鈴木商店がその被害をこうむるなど、悪化に拍車がかかり、大正十五年には政府から緊急融資として千六百万円を引き出すことに成功したものの、年末には最大の債権者である台湾銀行が無担保貸付を停止し、翌昭和二年二月、嵐の中で巨木が倒れるように、さしも隆盛を誇った鈴木商店も倒産したのである。

3

昭和二年、名古屋でも明治銀行がつぶれ、村瀬銀行が休業に追い込まれ、その他三、四行の取付騒ぎが起こっていた。早春のある日曜日、支店の幹部が全社員に召集をかけ、内々で整理の準備にはいれと指示している。倒産は四月四日、資本金八千万円に対し、負債総額四億円にのぼった。その二日後に鈴木系の六十五銀行もつぶれ、四月十八日に台湾銀行も休業にはいった。これをきっかけに、全国の銀行はいっせいに恐慌風に見舞われる。一ヶ月までに休業した銀行は三十七行にのぼり、休業寸前に至ったものも、その救きわめて多かった。この金融恐慌の影響で、大銀行の地位はいちじるしく強化され、中小銀行の合同が進み、いわゆる金融界の再編成が行なわれる。

倒産は一鈴木商店だけの問題ではない。神戸製鋼、日本商業、豊年製油、クロード式窒素、太陽曹達、南満洲物産、帝国汽船、日本金属など十四の分身会社、株式半数以上所有の帝国人絹、帝国炭業、帝国染料、大正生命、新日本火災海上など十六社、株式所有半数

以下で支配権を有する旭石油、帝国麦酒、南洋製糖、支那樟腦、日本冶金など七社、その他の関連会社、大日本セルロイド、日本製粉、東洋製糖など七社、計四十四社が昭和二年三月現在の鈴木グループの全容であった。直系会社としては「主家没落」の悲運に泣かされ、あまつさえ引き続く恐慌の嵐の中に投げ出されたわけである。むろん鈴木商店の社員はその日から職を失った。予想されていたこととはいえ、強いショックであったろう。

だが社長鈴木岩次郎は腹のすわった人で、「自分の財産は一銭もいらない」と、取引先の人にはできるだけ迷惑を軽くし、約千五百人の社員にも、安からぬ退職金を支払った。父は手の切れるような紙幣で二千六百元を受け取っている。勤続十三年でまる三年分の給料に相当する額を、しかも日本の経済史に残る大規模な倒産の中で、あえて支給した社長のえらさに、若い日の父は経営者のあり方の一面を学び、深い感銘を受けたのであった。ちなみに小林氏は当時勤続五年八ヵ月で六百元の退職金を、朝鮮野砲二十六連隊で受け取っている。

こうして少数の整理委員を残して失業者の仲間入り

をしたわけだが、将来についてはそれほど悲壮感はなかったようだ。殊に父は独身だったし、それまでの仕事ぶりを見ても組織の中がっちり組み込まれてというよりは、自分の責任である程度やって来たから、個人でもなんとかやっていけるのではないかと、この見通しがなかったわけではない。同僚にも同じ考えの人が多かったようで、深刻さは今考えるのとはやや異っている。就職の口があったのに、今さら勤める気はないとそれを断って、独立した人が多かったからである。むしろ「鈴木にいた」というと、当時は世間も同情し、一種の信用もあり、かえって仕事やりやすかったと伏見氏はいつている。

若手の社員が身のふり方を話し合ったりしていた矢先、帝人の内海静太郎専務から「折り入って話があるからちよつと来い」と父は帝人本社へ呼び出された。さつそくかけつけると、そこに東京支店の人絹糸担当者小橋一水、下関支店関係で京都駐在の千葉順一の両氏も呼ばれていた。内海専務と松島監常務の立会いで、何事が始まるのか、といぶかる若い三人に向かって、内海専務がこう切り出した。「君たちはもうすでに進路を決めているかもしれない。しかし私は君たちの実績を

買っている。どうだろう。この際、広島で生産している人絹糸の販売にぜひ手をかしてくれまいか」と。これよりさき帝人初の本格的工場である岩国工場が完成、一月から一部の操業を始め、一月十七日に最初の糸が生産され、三月二十日に最初の製品の出荷、四月一日からはフル操業と、とんとん拍子に進んでいた。その直後の親会社の破綻で、これまで取引して来た特約店の中にも、商品の差押えなど後難を恐れて、糸を買ってくれない店が出て来た。このままでは近く工場の運転がとまってしまい、さし当って工具の給料も払えぬ仕儀になりかねない。事務系の人五十ポンド入りの人絹箱をかついで売り歩いたこともあるが、とうてい追いつかない。そこで工場に山積している糸を、三人が協力してこれまでの担当地区で売りさばき、その都度現金を本社に持参してはくれまいか、との相談であった。父たち「失業者」にしてみれば、決して悪い話ではない。内心雀躍りして、異口同音に「やりましよう」「やらせて下さい」と即座に協力を誓った。

いかにも急な話だが事は急がなければならない。のんびり会社設立でもあるまいが、とりあえず取引の主体になる店の名前を決めなくては、となった時に、内

海専務が「帝人広島工場の隣に、鈴木の下関支店傘下の『広島燃糸工場』という名の工場があるが、この工場なら今後債権の対象とはなるまいから、この名前がいい。しかし商売をするのに工場ではおかしいから、『広島燃糸商会』と呼んではどうだろう」と提案した。三人とも異議のあろうはずはない。こうして広島燃糸株式会社の前身である広島燃糸商会は、昭和二年四月の宵、街路樹の柳の若葉が街灯の光に映えるころ、神戸市海岸通十番地白亜四階建て鈴木商店本社の一室にあった帝国人絹本社応接室で、めでたく呱呱の声をあげたのである。偶然とはいえ、金融恐慌のまっただ中に旗あげたことに、父は運命的なものを感じ、禍を転じて福とすべく、固く心に誓った。

いかに帝人からのお声がかりとはいえ、独立して取引をするからには当座の資金もあるし、保証金もある。三人に対し鈴木商店横浜支店長だった北村和三郎氏が保証金の十万円を融資してくれることが決まった。あとは身を粉にして働くだけである。

柳の芽ぶいた港町の春の宵、一刻価千金などと、のんびりしたことは言っていられない。久しぶりの神戸の町も眼中になかった。すぐに駅へかけつけ、夜行に

とび乗り、それぞれのホームグラウンドへ勇躍舞い戻った。翌日、木の香も新しい「帝国人造絹糸株式会社特約店広島撫糸商会」の看板をかがけ、本格的な活動を始める。本店は京都に置き、千葉氏がこれを主宰し、関西地区を担当、小橋氏は東京を根拠地に両毛・米沢地区、父は名古屋に腰をすえて岐阜・一宮・浜松地区を担当することになった。鈴木は社員時代の得意先へ今度は「大鈴木」のバックなしに、これまでに築きあげた「自分の信用」をひっさげて売り込みに回るわけである。

たまたま当時は人絹糸が時代の脚光をあび始めていた。事業は予想外に伸び、やがて帝人本社でも驚くほどの業績があがるようになる。荷渡しが終り、集金が三万、五万とまとまると、現金を古新聞に包み、夜汽車に乗って金包みをしっかりと尻の下に敷き、翌朝神戸本社へ持参した。本社からはただちにその金を広島工場にリレーする。振替にすると銀行に押えられるおそれがあるというので、広島まで現金を持って行ったこともたびたびあった。全く大車輪の活躍で、夜を日に継いでの仕事が五ヵ月ほども続いた。利益の中から三人はそれぞれの給料を「つかみ取り」した。最年長

の千葉氏は二百円、小橋氏と父は百五十円ずつを取った。業績は着実にあがり、不況の嵐が吹きまくる中で、父もやがて二百円の給料を取るようになる。昭和四年七月、小林氏が招かれて広島に入った時は初任給六十五円だったという。

参考までにいうと、昭和初年、大学出のサラリーマンの初任給が三井系の諸会社で、帝大、商大出が五十円、手当て込みで八十円、慶応・神戸高商が四十五円、その他の私大・高商が四十円という時代だから、二十代なかばの青年にしたら破格の高所得である。そのうち帝人本社で「一度クビになったやつらが、うまいことやっている」と中傷がとぶようになった。父たちにしてみれば帝人の急場を乗り切る一助に、せい一ぱい働き、煙突の煙を絶やさずにすんだのは、自分たちの活動がその一端を担ったから、という自負があっただけにどうしてもくれない。結局、昭和四年に三人は各分離して独立の形をとった。

火事場騒ぎのような一時期が過ぎ、やっと先行きの見通しが立ったところで、縁談が郷里から持ち込まれた。忙しいから日曜日に帰省し、見合のダブル・ヘッダーをやるうと考えたのは、いかにも能率本位の父ら

しい。その第一ラウンドが母との見合いであった。十月も末の日曜日の昼前、父は自転車で母の実家へ単身乗り込んで来た。加西郡多加野村小印南は野村から自転車で一時間の道のりである。野村よりもっとひなびた山村で、都会仕込みのビジネスマンは、ちよつと目立つ存在だった。母は見合のスナップ写真を見せられた時、

どうも気が進まない家族にもらしていた。だが目の前に現われた人を見ると、写真よりはかなりマシだし、話しぶりを聞いてみると、「ちよつとここの人にはない、しっかりしたものがあろうだし、何やら見込みがありそう」感じがして、印象は悪くなかったそうだ。仲人や叔父が客間に出て、話をしているところへお茶を持って出た母に、父は「女学校はどこにあるんですか」などと、こだわりなく話しかけ、もの慣れた調子で皆と話を合わせ、出されたすしを遠慮せずに平らげ、あか抜けしたあいさつを残してまた自転車で帰って行った。

見るともなしに後ろ姿を追っていると、母の実家の縁側からま向かいに、田んぼ一つへだてた家へ父はすつと自転車を取りつけ、何やら話しに行った様子。縁談はこの家のおじいさんが持ってきたのだが、あいさ

つにでも寄ったのかしら、と母が見ていると、間もなくそのおじいさんが、家をとび出し、とつとこちらへ走って来る。息を切らせながら「今の人がなあ、もし来てくれ、いうたら来てくれるやろうか」とこないに聞いてなさるんやけど、どうやる」といかにも急な話である。

母の生母は近くの素封家からとつき、母一人を産んで早くに亡くなっている。母の父は小学校の校長、継母は針仕事で上手で、近所の娘たちに頼まれると教える、といったもの固い家庭である。兵庫県立姫路高等女学校三年の時、祖父が丹波篠山の任地で病歿、物質的にはなんの苦労もなかったが、母の祖母は実の両親を亡くした孫娘をふびんがり「私の目が明るいうちに片づいておくれ」と口癖のようにいつていた。今度の縁談でも、例によって「私の生きているうちに」と涙を流して頼んだりしているし、祖母もすでに八十一歳、もうそろそろきめなくては、と決心し、その場で「もううてもらえるなら行きます」と、返事をした。そのころの高等女学校出はまだ数が少なく、田舎では大した教育を受けた人、と見られている。父は小学校高等科卒だが、成績は悪くないし、話しぶりからみても、

一生ついて行けそうだと母はとっさに考えたという。家に財産がないことも、かえって気楽でいい、と思ったそう。

第一回の見合いでOKが出れば、父は次なる「第二ラウンド」へ回らずにすむ。どうもこちらの方がよさそうだと判断した父は、強引に返事を求めたのであった。その翌日、仲人を通じて「あす名古屋へもどるんやが、いっしょに行きませんか」と誘いが来た。野村の祖母も同行するから、いっしょに行つて新世帯の道具や、結納の品々を母と相談して買った方が無駄がなくていい、と父は考えたらしい。なんとまあ気の早い人だろうと母はなかばあきれ、「いくらお約束しても、結婚するまではいっしょに行くわけにはいきません」とことわった。

後日、父の方から結納の品が届いた。黒留袖、丸帯、紅白の下着、羽織などの反物、その他どれも名古屋の中村屋デパートで父が見立てたもので、かなりの上等であることは、ひと目でわかった。母は自分の手ですべて縫い上げ、婚礼衣裳をととのえた。これらの品々は戦災をまぬかれたのに、戦後、片町（現在の本社所在地）の事務所の屋根裏に保管しておいたため、地震



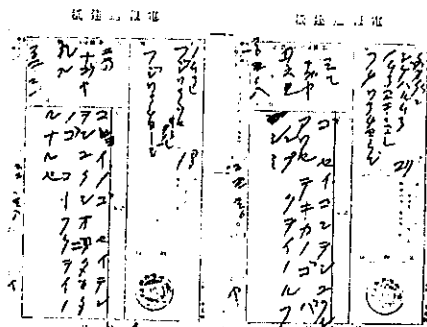
新婚時代

手伝い、最初から片腕的な存在だったが、惜しくも終戦直後、芦屋市で病歿された。

名古屋市葵町の新居は新婚の夫婦にはもったいないくらいの広さだった。新世帯の台所用具や食器類をひと通りそろえたところで、新春に鈴木商店以来の友人を招いて、披露かたがたの酒盛りである。鴨緑江節、ノエ節を交互にうたいながらのどんちゃん騒ぎ。謹厳な教育者の家庭で育った母はキモをつぶした。逃げて帰りたい気持ちにもなつたらしい。

この家には父の仕事を手伝う楠田一二氏が同居し、朝は父と二人で大津町東陽ビル二階の一室にある広島燃糸商会の事務所に出勤した。翌昭和三年四月佐藤常

の直後に発生した火災ですべて灰になってしまった。結婚は見合から二カ月足らずあとの昭和二年十二月十八日。数えて父は二十八歳、母は二十一歳だった。花嫁の一行は近くの町まで人力車で行き、そこから自動車に乗り換えた。野村の父の生家では夜の十時ごろから明け方まで宴会が続く。片田舎での婚礼にしては珍しく、祝電が十一通来た。質の悪い分厚い「電報送達紙」は、古ぼけて変色しているが、文字ははっきり読める。「ユキオレササニムラスズ メケフノヨイヒニ



結婚式に届いた祝電。伏見、成瀬両氏から

ウレシイカド
デ カツヤハル
カニオイワイモ
ウス」とあるのは、鈴木商店時代の同僚榎岡氏からのものだ。榎岡氏は倒産後は一時関西ペイントに入社したが、父に乞われて広燃の仕事で

七氏が加わり、仕事がふえるにつれ、人絹も経理もわかる人を、というので、鈴木商店時代からその仕事ぶりを信頼していた小林氏をわざわざ実家に訪ねて、父は協力を頼んでいる。小林氏は昭和四年七月から、つまり兄隆が生まれる一カ月前から、父と苦楽を共にして来たわけである。

新しい事業が軌道に乗ったとはいえ、一般のサラリーマンのようにはいかない。朝八時半ごろ家を出て、夜八時ごろ帰る日が週に一、二回、そのほかは十一時、十二時と遅い日が続き、こんなものか、と母は内心がつかりしたという。それでも父は父なりに、家庭のことに関心を寄せていたとみえ、新婚の中に迎えたお正月の思い出を、私への手紙の中にくわしく書いていた。これは私が結婚した最初のお正月、年賀状がわりに巻紙に長ながと書いてくれたものの一節である。

（前略）家庭を持って初めての正月のこととて、一抹の感慨にひたれたことと存じますが、それについて私共も三十年前、名古屋において暮の十二月二十日に世帯を持ち、まず正月用意として大枚三十五円を投じてお屠蘇用セット、塗物お重四つ、三つ重

杯、お銚子一、受皿四枚、
 楮入れ一つを買い、広小路の
 夜店で福寿草の鉢植を求め、
 南天と葉ぼたんの生花を入れて迎えた
 正月の記憶が、きのうのように
 感ぜられます。わびしければわびしいほど、
 またはるかな将来の日の楽しい思い出となりましよう。
 やはり正月は、長い人生の一里塚というだけに、
 我が家の風習を作りあげて下さい（後略）

家のことなど構っていない、という風に見える父が、こんなにこと細かく結婚当初のお正月を記憶していたことから考えると、黙っていても細心に生活を



オートバイを乗り回したころ

観察し心に留めていた人だったという気がする。この時買ったお屠蘇用セツトはなお大切に使用されており、もう半世紀近く、わ

が家の正月の話の種になっている。決してこれ見よがしの豪華さはないが、しっかりと黒塗りの、小松模様の一そろいは、母にいわせると「清水の舞台からとびおりるようなつもりで買った」ものであり、今となつてはひとしお愛着の深い品であろう。

買物といえばオートバイを買って乗り回したのもこのころである。伏見氏がAJSという当時珍しいサイドカーを持ち、成瀬氏は洋行帰りの人から譲り受けたインディアンを持っていた。乗馬靴のような革の長靴をはき、ぶんぶんと歩いていったそうだから、今のカミナリ族のご先祖のようだが、実は仕事にも抜け目なく利用してお得意回りに人力車はまどろっこしい、と見本を積んで静岡あたりまでとばすこともあった。ほかの二人に

しても倒産後は棉花と毛のプローカーに転じたから、機動力があればプラスは大きかったことだろう。祖母を名古屋の新居へよんだ時は、サイドカーを借りて祖母を乗せ、見物に連れて歩き親孝行をしたそう。たぶんゆっくり走ったのだから、人目を引く最新型のサイドカーにちよこんと乗ったおばあちゃんとその息子、想像しただけでもほほえましい。

これに限らず父にはやや「新しもの好き」のところがあって、結婚した時、すでにラジオもカメラも蓄音機も持っていた。レコードもかなりあったので、母が喜んであけてみたら、なんと落語と浪花節ばかりで、げんなりしたそう。好きでもあったのだが、演芸会や宴席で演ずるためのネタをかねたものだった。ラジオは大正十四年に初放送だから、ずいぶん早々と手に入れたことになる。当時はまだ鉱石ラジオで雑音の多いものだったが、できたといち早く買う。よくいえば最先端を知ろうという好奇心が強かったのだろう。

ところで当時絹織物の大産地だった北陸地方でも、繊維革命の波がうねり始めていた。大正八年ごろから福井の絹織物の輸出が激減し、国内向けの生産をしよ



大雪の日、本丸の軒下で。
 現社屋入口付近

うにも、品質からいって他産地とは太刀打ちできない。なんとか羽二重からの転換が必要になって、絹紬、次いで綿織物、さらに富士絹へとあらゆる手を打ったあげく、人絹に目が向けられた。しかし絹織物の伝統を誇る福井では、大正年間から人絹の研究は進んでいたものの、しよせん絹のまがい物としてスタートした「マ子」ではないかと軽視され、それを織り、販売するとは何事か、という反発も一方では強かった。だが細いデニールの糸を織る技術を持つ福井こそは、未来の大産地になると父は目をつけた。幸い鈴木商店時代に再三福井へ出張して、土地勘はあるし、柞蚕糸の取引を通して顔なじみになった機屋もある。条件はそ

っている。帝人からのすすめもあった。

昭和四年の暮ごろから中辻嘉三郎氏に頼んで事務所
に適当な家を探していた。たまたま現在本社屋のある
土地に、元羽二重商の事務所で木造二階建の大きな家
があり、当時の金で二万円、やや分に過ぎた建物だっ
たが思い切って買い取った。「何が無くても『本丸』だ
けは」という気持ちと、「大鈴木で十年余、メシを食っ
て来た男だ」という気概がそこにはあった。福井へ引
越すについて、母へは一方的な事後報告で「この商
売では福井の方が本場やから引越すことに決めたぞ」
と、否も応もない。母にしてみれば裏日本に行く不安
も一方にはあったものの、これで名古屋でおなじみの
お茶屋とも縁が切れるだろう、と淡い期待もあったの
だが、それはたちまち「なんの、なんの」という結果
に終る。初誕生前の兄をかかえ、母はすでに私をおな
かに宿していたが、すぐに引越しの支度にとりかかった。
ひと足先に福井へ乗り込んだのは父と故榎岡氏の二
人。小林氏は名古屋の残務整理を終え五月に来福した。
最初からの店員羽場昇氏（第二次大戦以降行方不明）、
開店の日に応援にかけつけた千葉氏も含め、福井広
商会は他県人ばかり、いわば「よそ者連合」といった

こうして福井での出発は好調だったものの、経済界
は不況のただ中であって、綿紡は三〇%の操短、人絹
さえもわずかながら第一次操短の洗礼を受けていた。
しかしメーカーの直販はまだなく、人絹糸商として専
門の業者も数が少なかったのは幸運だったし、広商
会は帝人からじかに買えるだけに有利だった。帝人は
福井広商に対し、特別に有利な条件を与えている。白
井栄次郎氏（元帝人常務）のノートに帝人のリベート率
同支払額が克明に記されているが、昭和五年上期の広
商会の引取数量は約三四七万ポンドで他を引き離し
て大きく、引取金額に対する支払いリベート額の比率
も五・一%、金額にして百ポンド当り七・四八円と破
格の好遇を受けている。次位の大長商店が約七八万ポ
ンド、四・一%、金額で五・九二円であり、六位の江
商が約二八万ポンド、二・五%、二・三円と比べると
さらに違いがきわ立って来る。広商の基礎づくりの時
代に、帝人のバックがいかに大きく貢献したかがうか
がい知られる。

累進的なりべート制度をとったのは、むろんメーカ
ーに販売促進のねらいがあつたことだった。初期に
は取引所がないために、人絹糸を多量に買った糸商は、

陣容である。唯一人の土地っ子大盛進氏は、四月に新
卒で採用になり、中辻商店でほんさん業の特訓を受け、
開店当日には顔をそろえた。

さて昭和五年四月十五日にいよいよ開店。店頭には
帝人岩国工場から届いたばかりの一二〇デニール、一
五〇デニールの人絹箱をうず高く積みあげ、意表をつ
くアイデア作戦で客を迎えた。つまりご祝儀あきない
としてすでに福井で盛んに行なわれていたオッパ取引
により一店一口、売買ご自由お相手様次第という奇抜
な方法で、市中の糸商やブローカーをあっと驚かせた。
これは一種の餅まきである。当時標準品だった帝人岩
国一二〇デニールCが対象で、まだ生産量もわずかった
が、懸念された売買の片玉もなく、売五三口、買三口、
差引一万七千ポンドの売越でめでたく初日のあきない
を終った。夕方には店を早じまいして、同業者を足羽
山五嶽楼へ招き、仲間入りの披露の宴を開いた。

地元では、関西弁の青二才が町のまん中に店を構え、
はでなあきないをしたのを、快く思わない人もおそら
くいたであろう。福井は残念ながら閉鎖的な土地柄だ。
だが人絹の勃興期で需要が日増しに伸びている限り、
こだわってはいられない。

商品の倉敷料をはじめ糸価の変動にともなう危険をも
負担しなければならなかった。それらの危険をいくら
かでもメーカーがカバーすることにより、売上げを伸
ばそうとしたわけである。しかしこれも変動が激しく、
昭和五年下期には、当時の恐慌による収益の悪化により、
リベート金額は大幅に減り、支払い先も制限され、わ
ずかに広商、蝶理、大長商店のみになっている。

相場の動きは急であっても、実需は着実に伸びてい
たから、売り込みの苦労はさほど大きくなかったとい
ってよい。それでも榎岡氏と父は、時間があると機屋
回りをして、お得意を開拓し、つながりを深め、機業
の現場からの声を聞き取ろうと地道な努力をしている。
雪の日に長靴をはいて、田んぼの中の機屋を訪ねるこ
とも珍しくなかった。土地になじみの薄い父を信頼し
て、最初から安定した形で取引が続けられたのは林兵蔵
（林機業社長長昇進氏岳父）、斎藤繁松（県織物構改工組
理事長、斎藤織物社長勇氏父君）の両氏で、お二人と
も故人となられて当時の様子をうかがうすべもない。

いうまでもなく人絹業界は他と比べて浮沈が激しい。
開業当時は、福井中心に七、八十軒の業者があつたが、
小資本で大きいあきないをする傾向が見られ、月に一、

二軒は分散があったという。広燃も半年後には資本金を使い果たしていた。福井へ進出する時に準備した資金は五万円、うち二万円は家を買ひ、残る三万円は開店の準備やら何やらで、いつとはなしに消えていた。父は遂方に暮れた。金を借りようにも、土地にまだなじみが薄く、融資を受けるあては全くない。このままではあえなく倒産のうき目を見る。思い余って中辻氏の仲介で十二銀行（現北陸銀行）に借金を申し込んだ。当然のことながら、銀行は「家屋敷を担保に入れなければ一銭も貸せません」という。父も負けてはいない。「おれは本丸を借金のカタにして戦うほど落ちぶれてはおりません。この藤原長司が担保です。どうです、本丸より何より大切なおれという男と引きかえに、二万円貸してもらえませんか」

この時はほかで都合がつき、借りずにすんだのだが、おそろしく図々しい若僧がやって来たぞ、という印象を相手に残した。ハッタリのとさえいえる開店日のあきない、世間との肩そびやかしたようなつき合い、殊に銀行を相手にして一步もひくものかという気構えなど、それは父の「地」というより、せい一ぱい背伸びして、あらん限りの力をふるおうとした若い経営者の

武者ぶるいなのであった。

開店の年の暮、父は大病をわずらった。十二月に腸チフスで赤十字病院に入院、高熱が続き、一カ月近く生死の間をさまよっている。母は一歳四カ月の兄と生後三カ月の私をかかえ、看護婦二人を雇ひ、母の妹の応援を頼んで、昼夜をわかつたぬ看病を続けた。隔離病棟の外に病室を一つ借り、赤ん坊二人をそこへ連れて来てもらって授乳する。満二十三歳の母が考えつく限りの手を打ち、自分は病気の平癒を願って魚、肉、卵を一切断つて仏にすがりもした。以後一年間、父がな



左端が伯父馬吉、右端は兄隆。昭和8年

おったのちも肉断ちを続けたため、看病の過労も重なって長く健康を害した。父の病状がはかばかしくないある日、婦人雑誌で九州に生神様がいて、この人に祈ってもらうと願いがかなうという記事を見つけた。自分は行けないから野村の伯父に手紙を書いて九州まで行ってもらおうよう頼み、伯父も歳末の忙しい時に、さっそく出かけて「一月一日には熱が下がる」とのお告げを電報で打って来た。母とても半信半疑ではあったが、びたり一月一日の朝、熱が下がり始め、その後は日増しに回復したという。父と伯父の助け合いは、その後もたびたびあり、父はたった一人の兄をとっても大切にしていた。さきに引用した父の古い手紙や日記類を大切に保存しておいてくれたのは、この伯父である。

4

満州事変（昭和六年）が始まってからは、人絹相場は一段と動きが荒っぽくなった。同じころ再度の金輸出禁止令にともなう円安で、輸出は大きく伸びた。インド、インドネシア、シンガポール、ホンコンさてはオーストラリア方面へ順調に売れる。暑い地方では冷

んやりした感触の平織りが最も歓迎されるのだから、むずかしい技術もいらさない。輸出の伸び方はまさに世界市場を席捲するほどの勢いだっただし、一方国内需要も急速に伸び、昭和七年にはいわゆる人絹黄金時代を迎えた。広燃の福井進出が新しい繊維の急成長と軌を一にしたことは、幸運でなくてなんであつたらう。

メーカーから糸を買って来さえすれば売れ残ることではなく、他方仲間取引（オッパ）も盛んで、おもしろいようにはけた。オッパは福井弁でいう「おっ放し」から来た呼び名で、福井で始まった取引方法である。形としては月末に現物をタライ回しするが、実質的には差金取引を目的とした売方勝手渡しりのやり方で、プロカーを通じ糸商の間で行なわれる。広燃へのプロカーの出入りも日増しに多くなり、二、三十人はいたという。

プロカーが入り口に自転車を持ち捨て、下駄をけとばすように脱ぎ、目の色変えてとび込んで来て、そろばん片手に気ぜわしく玉をはじき「大将、どうです」と食いつくようにいう。食事の部屋にもとび込まれることがあり、何か事が起きると、店の十坪ほどの板の間が、わあんと殺気立って来た。発足後まもなくの大



毛矢町の家の庭で。後方に見えるのは弓の的。昭和16年

わずかに子供たちを風呂へ入れて遊ぶのが、風呂好の父にとっては唯一の気晴らしで、ほかにまぎらわせる方法がない。住居が事務所と同じ建物であることも、気分転換を妨げていた。昭和六年、父は「気が休まらんから、住居を別にしよう」と言い出して、毛矢町（現在の住居のすぐそば）の借家に引き移った。父母と兄と私の四人に女中、小人数になって母の負担はかなり軽くなっている。新しい家は黒堀に門構えの落ち着いた木造平屋で、当時片町の小池金物店主が隠居所に建てたものを、特に借り受けた。大きい土蔵造りの座敷があり、ここは夏涼しく、冬は暖かった。裏庭に

きな取引の一つに中島吾市氏とのそれがあつた。中島氏の買いに對し、父は売り向かった。当時は人絹の勃興期だから、買えばもうかると中島氏は読んだらしい。父は帝人との密接な関係で工場から出荷される数量も知ることができるので、自信を持って売りあげせる。百二、三十圓のが百八十圓になつてもまだ糸が出る。さすがの中島氏も困り果て、ここで父は五万圓ほどの利益をあげ、市中の話題になつた。月末に現物の受渡しをするため品物が必要になると、帝人は急ぎ客車便で送り込むなど、一方ならぬ便宜をはかつている。

昭和六年六月、千葉氏と父は、群馬県桐生市で、両毛地区の機屋へ売り込みをはかる小橋氏の応援に出かけ、機屋を招待した宴会に出席した。そのころ三人は糸をこつそりと買いまくり、オッパの手持ちがたくさんあつた。帝人からそんなに買つて大丈夫か、といわれたほどだつた。当時六十圓足らずだつたが、父は「いづれ九十五圓になる。必らずなる。ならなければ私が坊主になる」と満座の中で言い放つた。宴会のあと、皆で日光見物をし、福井へ帰るや否や、じりじりと相場は上がり続け、ついにその値段になつた。桐生の宴会に出ていた人たちは、「あの若いのが言つた通りにな

つた。大したやつだ」と、当分の間その話でもち切りだつたと、当時の小橋氏と共に働いていた永野暁氏（隆一氏父）は語っている。

その後織物のオッパ取引が始まると、仲盛会（会長竹林仁氏）に属するブローカーが入入りを始めた。その一人、有馬広吉氏は「仕事をさせてもらう立場がそろしいような、大きい取引がありましたな」と、當時をふり返るだけでも、ぞくぞくとするといわんばかりの調子で語る。そのひとつ、二千疋の取引を丸紅と広撫の間で成立させた。丸紅買、広撫売。五百が単位だつたから二千は大きく、それが三カ月にわたる取引で六千疋になる。「実にいい度胸。大した人でしたね」

失敗はむろんあつたが、損をしたそれ以上に取り返せばいい、というのが口癖で、負けん気の強い父は、人前で気落ちしたところを決して見せなかつた。眉間の縦じわをぎゅつと寄せて、外ではせい一ぱい意地を張り通した。しかし家庭ではそうはいかない。調子が悪い時、母ははれ物にさわるように気を使わなければならなかつた。弱身を見せたり、ぐちをこぼしたりするところが全くないだけに、母にとっては始末の悪い人だつたのである。

は狭いながらも竹藪があつて、ガランと広い事務所をまん中に抱き込んだ片町の家と違つて、はるかにくつろげるたたずまいであつた。仕事の緊張をときほぐすには、決してせいたくではなかつたろう。帰宅後は左内町にあつた矢場へ弓の稽古に出かけ、庭に的をこしらえて、朝夕弓を引いていた。

書画骨董のたぐいに興味を持ち始めたのもこの前後であつた。どんないきさつがあつたかはさだかでないが、片町時代に、父は森川道具店に一夕、ふらりと姿を見せ、あれこれと世間話の末に、堂本印象の「宝船」を買い求めている。森川氏にしてみれば、見ず知らずの関西なまりの男が、はたして何者かいぶかるのは当然で、翌日、注文の品を届けに片町の店を訪ね、十二畳半の和風の応接間に、その軸を掛けて帰つたという。

これはなかなか「目の高い買い物」で、後日帝人の社員が出張で福井へ来た時「ぜひとも譲ってくれ。買値の二倍出すからわけてほしい」と懇望されたのに、父は「自分としては身分不相応な買い物をしたと思つていますが、これは私の記念の品だから」といつて、固く断つたそうである。何の記念だったのか、仕事

が軌道に乗り始めたことへのひそかな心祝いだったのか、わからないが、この軸はわが家の縁起物となり、例年お正月には床の間を飾っている。

父は絵に特別の趣味を持ち合わせていたわけではないが、その買いつぶりは、ひと口でいうと自分が好きな絵なら買う、といったタイプだった。この線がいいとか、この形がいいとか、しろうとなりの講釈をしたが、それがいつぱしの射っており、森川氏も「なかなかカンのいいお方やと思いました」と、若かった父を語っている。のちに骨董品にも手をひろげたが、品物をじっと見ていて、それをわきへ置いて一、二時間世間話をし、帰りぎわに「よし、ほなこれをもらおう」とさっさと決めていた。「あっさりした、きれいな商い」だったという。

昭和七年、福井人絹取引所が開設された。これより先、オッパ取引が極端にふえて、昭和五年春には一日の転売取引高が、一カ月の実需のなんと三十倍ということもあり、しかも恐慌のさ中にお構いなしの取引とあって、弊害が目立ち始めたため、業界としてもその設立には熱心であった。人絹では世界でも初めての取引所で、父も含めて地元の業者は実現の促進に協力し



戦前の福井人絹取引所立会風景

ている。

最初の標準銘柄は帝人岩国一二〇Cに決まった。これは生産が安定し、品質もよく、その時点での人絹界の代表銘柄ということになる。したがって標準銘柄に指定されるためには、いろいろと裏工作が行なわれたのちに旭化成の糸が選ばれたことがあり、この時父は「ぬかった！」といってひどく口惜しがったそうである。

初立会の日、父が手振りするのを当時小橋氏の率いる東京広燃にいた伊藤秀一氏が見ていた。藤原さんはなかなかの芸人だから、手つきがあざやかでね、地元の人たちの間で断然水ぎわ立っていましたよ。実にカッコいいんです」と当時を回想した。取引所での仕事にかけては、父は名古屋の綿取時代にすっかり要領をのみ込んでいる。福井ではむろん先生格である。最初のころは榊岡氏と二人で手振りに行った。気つぶのいい取引と迫力のある手振り。蝶ネクタイをしてこの二人が取引所に現れると、まだ和服姿の多かった中で、いやが上にも目立ったと有馬氏はいつている。勿論父は清算やオッパ取引だけに目を向けていたわけではなかった。等外品の糸を、なんとか使える方法

はないか、と機屋に工夫させるような地味な仕事もしている。人絹糸の等外品は、昭和の初め二、三％は出ていたらしい。毛羽糸、切れ糸、綾乱れ糸、少々硬い糸などは生産量がふえるにつれて絶対量を増し、これの利用方法が大きな問題になって来た。織るのにも世話のやける糸は、東京や大阪ではあまり売れない。燃糸加工をしてリリヤーンや飾り糸、組紐などに回すだけでなく、大量に使う方法を見つけないで、コスト面にも大きくひびいて来る。最初のうちはこの等外品を、普通品の三、四割引で父は買い取った。帝人では値段はいくらでも、売ればいいという調子だったから、そこに妙味があると目をつけたらしい。

まだ帝人本社が大阪の江商ビルに間借りしていたころだから昭和五、六年のこと。父は「こんなものが織れましたよ。見て下さい」といって、白と紺の先染めの生地を二反かかえて来て、当時販売課にいた白井氏に見せたことがある。「ヨロイ織り」とでもいうか、糸が交互に押えられるように織りあがっていて、毛羽立ちを防いでいる。「りっぱに普通品として通るでしょう」と、父は満足げに話した。これが格安で売った等外品の糸を活用した生地かと、当時帝人社内でも評判

になった。

これを織らせるため、父は大野地区の研究熱心な機屋を選んで試織させている。家内工業的な仕事なので量産はきかないが、製品はりっぱな第点。糸を普通品より一割ほど安くして機屋に回すと、大いに歓迎される。以後等外品の糸を動かすだけで、黙っていても会社の経費ぐらいいはここから出たそうだ。試織については当時の福井工業試験場あたりの指導があったのではないかと思われるが、機屋の方々もみな亡くなられたので、これは想像の域を出ない。のちにその方法がひろく知られ、他社の等外品の糸でひともうけた人もあったという。

実需面での仕事は、残念ながら比率はきわめて低く、帝人でも、広燃に糸を送ってもオッパに回る方が多くて、機屋に渡る分が少な過ぎることに注意する向きもあり、もつと機屋に力を入れようということになる。昭和七年竹内豊造氏（元広燃常務）が入り、機屋回りに加わった。人絹糸の価格は毎日激しく変動するので、ゲイヤの糸を売ることが多かった。

ところが糸を買う機屋からは、広燃は売るだけ売って、ちつとも織物を買ってくれない、と相次いで苦情

が出るようになる。竹内氏がそれを父に伝えると「そんならお前やれ」と即座に命じて、織物部を設けている。買上げた織物の売込先はほとんど三共商会（神戸・現三共生興）で、父と懇意だった三木瀧蔵氏が「広燃が織物を扱うならみな買うた」といって一手に引き受け、これを輸出に回していた。昭和十年ごろのことである。

織物部が発足して間もなく、清算の手張りて失敗する者が相次ぎ、しまいにする人がいなくなつて竹内氏に番が回つて来た。織物の方があるから、と竹内氏がいうと、父は「うちは単なる織物屋とは違う。もし手振りに行けんのなら織物なんかやめてしまえ」といったそうだ。この一言にもうかがえるように、形こそ違え、商売の体質はまさに鈴木商店流であつたと思う。思わずで大を成した金子直吉のやり方を、父は無意識のうちに範としていた。本来細心で着実な性分の父が、ひとたび商売となるとやや異質ともいえる投機性を見せるのは興味深い。

福井における人絹糸消費量を見ると、大正十五年の四・四％（全国比）に対し昭和五年六・二・三％、七年六四・二％と飛躍的に伸びている。八年五一・八％、

九年四六・四％と漸減しているのは、人絹糸の生産量

がふえると同時に、石川・両毛地区の増加が見られたからだ。広燃は石川県など他地区への進出に積極的ではなかった。なぜ新たな需要開拓に乗り出さなかったのか、そこに商売上の一つの方針、つまり他の地盤を食い荒さないよう自粛したとの見方があり、父の人柄から来たものと好意的にいう人もいるが、当時の広燃の陣容で見る限り、まだそこまで力が及ばなかったと見る方が妥当ではなからうか。

昭和七、八年には最初の広島燃糸商会の仲間、千葉小橋両氏が相次いで事業につまづき、脱落した。当時は広燃は匿名組合みたいなもので、外部的には三者別々かどうか、はっきりしていなかった。したがって両氏の破綻で、福井の広燃にも責任があるかのように見られたのも無理はない。父としても身を張って苦楽を共にした仲間だから、むげにつつ放せない。当時の金で千葉氏には二十五万円を贈り、あとは独立すると告げている。また東京の小橋氏も思惑の失敗で倒れ、ついに残るは父一人。しかし北村和三郎氏から三人連名の最初の借金、二人が残した帝人への負債がある。父はそれをすべて一身に引き受け、払い終えるまでに十余年、

終戦のあとまでかかっている。

二人の蹉跌によつて広燃の名前は、ついに父一人のものになった。小橋氏からはのちに五十万円の資金を無心されたが、半分だけを贈り、あとの援助はことわっている。しかし両氏共に気まずい別れ方をしたわけではなかった。千葉氏が第二次大戦後、中国大陸から引揚げて不遇だった時、父は広燃でささやかながら職を提供し、生活が成り立つよう配慮しているし、長男桂一郎氏は一時広燃に在籍した。小橋氏にしても、私が戦後の混乱期に東京の大学に進学する際、保証人を引き受けて下さったうえ、何くれとお世話をしていただき、私も再三お宅へうかがうなど、しばらくおつき合ひさせていただいたほどである。仕事抜きで父と小橋氏はきわめて淡々とした交わりを戦後復活し、小橋氏が亡くなるまでそれは続いた。

さて仲間の負債までしよい込んだことは、広燃の資金繰りをきわめて窮屈にしたが、その反面、帝人からは同情の声もあり、かえって信用を得る結果になった。端的にいうとその後特別の便宜をはかってもらう場合がしばしば出て来る。たとえば資金的に苦しくなると、やむを得ず手形を書かずに放っておくことさえあつた。以



羽場昇氏の応召の際、店員と記念撮影。前列右より妙子と父、後列右から三人目は母。
のぼりの文字は父の自筆

前なら帝人が取立手形を書いたのに、その時には請求書が回って来て広瀬が手形を書いた。期日はあって無きが如しで、勝手にのぼしても、肝心の帝人が了解している以上、銀行も強制的にいえるものではない。また取立手形の支払が遅れても、大目に見られてかなり猶予してもらえることもあった。「あいつにみな、払わせているんじゃないか」。最高幹部も心得ていて、請求がましいことはなく、この寛容さは非常にありがたかったと、小林氏はいっている。

借金の返済といえばこんな話がある。北村和三郎氏からは現金のほか、社債を借りてそれを担保に入れ、融資を受けていた分もあったらしい。各期ごとに社債の利札が回って来ると、それを現金にして北村氏の手元に届けるのだが、当時は電送が普及していない。そこで父は利札が北村氏の手元に届くまでの期間に相当する金利を日歩計算ではじき、現金をその分足して送っていたという。貸す者の身になって返すということ、は、いづくして実行はなかなかむずかしい。ともすれば知らぬ顔をして甘えてしまいがちなことだが、父にはこうしたもの固い一面があった。

そのころには店員も十数人になり、早くも地場の代

表的人絹糸商の一角に食い込んでいる。店の経営方針は父一流の手堅さはあったが、鈴木商店時代の経験になぞっているような部分が見られる。たとえば帳簿のつけ方は自分にも経験があるだけに要領を知りぬいていた。見ただけで算盤をパチパチ置いて、たちどころにどれだけでもうかっているかがわかる。常に「今日つけて、今日の状態がわかるように帳面をつけよ」といい「先物までつけて、決算期まで待たなくてもわかるように」といっていた。鈴木式の何かがあったようだと当時の人はいう。ぼんさんの服装にもそれがあって、福井ではまだ畳の部屋にすわり机を置く店が多かったが、広瀬は腰掛けと机を板の間に並べ、応接間にはじゅうたんを敷きソファを置いた、ハイカラな調度。したがってぼんさんには紺サージの冬服、ねずみ霜降りの夏服を着せた。当時ぼんさんが洋服だったのは蝶理、岩井など県外商社の出張所員だけで、他は半てんのお仕着せだった。また何事によらずモタモタするのが大きらいで、殊に電話の応待には無駄をなくせ、とかなりやかましかった。「もしもし」というと、そばで聞いていて「もしも」でいい。二度目の「し」はいらん」といった具合である。これまたテキパキした鈴木流らしかった。

た。威令行なわれていたとみえ、時おり店へ遊びに行くと、広瀬のだれもが「もオしもオ」と威勢よく応待するのを子供のころ耳にしたものである。

父は下積みの苦勞をして来ただけに、店員を大切にすることが強かった。一人当りの食費は他の店よりは常に高かったそうだし、若い人の質問にも懇切に答えている。千葉光正氏（順一氏弟）が入社して間もなく「天然繊維でもない人絹に、なぜ相場が立つのですか」と尋ねたことがあった。化学製品だから天候に左右されるわけでもないのに、という問いである。父はそれに答える前に、千葉氏にさっそく取引所の場合を命じ、直接の勉強をさせた。そして相場が人氣に左右されることを身をもって体験させたのち「売りによし、買いによし、相場は常にあり、算盤は定規なり、人氣は時の花なり」という言葉を教えたという。

仕事の手がすくと、若い店員を集めて雑談をすることがあった。気が向くとうとうとしゃべり、いつか独演会になってしまう。いささか教訓仕立ての話は鼻につくこともあるが、巧みな話術でかなり聞かせるものがあった。「本を読め。夜寝る時は枕元に必ず本を置いてな。まず読む習慣をつけないかん。わしは学校へは

行かなかったが、榊岡君と夜、よく勉強したもんや」「君らだれにでも対等にしゃべれるような人間にならな
いかんぞ。えろうなつても、下の人に対しおごる心を
出したらいかん」等々。

そんな時常に「体験によって自分をみがくこと、経
験によって賢くなり、勇気を養うこと」を繰り返した
そうである。上級学校へ進めなかった父が、身に力を
蓄えるには体験から学ぶしかなかったし、感じ易く氣
の弱い一面を持ちながら、何度も修羅場をくぐり抜け
たのちに、世間からは「度胸がある」といわれるだけ
のものを自然につちかったことを、自分自身が最もよ
く知っているからであった。

開店から支那事変までは、オッパ取引の見込み違い
は多少あったにせよ、危機らしいものはなかったとい
えよう。昭和十一年には人絹糸の消費量は生糸のそれ
の二、三倍になった。やつと生糸の消費量をしのぐよ
うになったのは昭和三年のことだから、わずかの期間
に急速に伸びたわけである。その波に乗り、広瀬のす
べり出しはきわめて好調だった。

この年の秋、張学良が西安にとじ込められて大騒ぎ
になった時、父はたまたま糸の買付で大阪に出ていた。

突然もちあがった事件で、もう商売どころではない。
京都で出会った永野氏を誘って「馬でも見て来よう」と
鳴尾の競馬場へ行き、秋空の下で駿馬の疾走する姿を
飽きずに眺めていたことがあった。これは戦争によっ
てひき起こされる嵐の前の静けさにもたとえられる。
父にとっては氣を張り詰めて商売相手と切り結ぶ中に
も、まだぼつかりとゆとりのとれる時期だった。後年
の馬好きは、この時の印象が深く心に焼きついたこと
に始まるのかもしれない。

5

支那事変の勃発で人絹は暴落する。その前年、エチ
オピア戦争でポンド九十円から二百円まで急上昇し、
町のどんな衆、料亭のおかみ、風呂屋の三助までが定
期相場に手を出し、一時はみなもうけたが、戦争終了
と共に暴落して手痛い目にあつたばかりである。その
きずも癒えぬうちにまた開戦。輸出の大市場であつた
中国にもう売れないとあれば、暴落は当然の成り行き
だった。

ようやく仕事が軌道に乗り始めた矢先のことで、戦

局のひろがりには父は前途を案じたに違いない。鈴木商

店は第一次大戦中に大いに伸びたが、広瀬はレッキと
した平和産業である。急テンポの戦時財政の展開につ
れ、重工業中心の姿勢が次々に打ち出される。物価は
いっせいに上がり始め、殊に繊維、食品工業は原材料
の割当はむろんのこと、金融、労務面でもカセがはめ
られ、ふえる需要には追いつかず、必然的にヤミ取引
が行なわれるようになる。開戦の年の暮には、早くも
スフの強制混紡が行なわれ、翌十三年には羊毛や綿の
消費禁止、そしてオールスフ時代がやって来る。人絹
はいわゆる「代用品」の代表選手で、国内需要はふえ
こそすれ、減りはしなかった。この年、人絹とスフを
合わせて、日本の生産量は世界一を誇っている。

こんな状況下で昭和十四年二月まで、取引所は開か
れていた。父はもともと「売り」でとるのが得意だっ
た。「考えてもみい。単価が半値にさがれば同じ金
で倍買える。二倍にあがれば半分しか買えん。つまり
『上げ』でとった金の値打ちは半分。『下げ』でとれば反
対に倍や。売りでもうけんことには財産家にはなれん」
と。相場を張るには下げでとるのをよしとするのが父
の信条だった。その行き方が経済の成行と相いれない

ものがあつたのは、致し方なかった。

開戦後すぐ応召した小林氏が昭和十四年二月にいつ
たん復員して来た時、十二銀行（現北陸銀行）への借
金がなんと人絹織物担保で十万円、ほかに当座借越の
契約で五十万円の借金があつた。株券は十万円ほどあ
つたものの、資本金二、三万円の企業によくも貸した
と思えるほどの金額である。驚いて尋ねる小林氏に、
父はこともなげに「おれの信用やがな」と答えた。ひ
と口に信用といつても、ただ金が借りられるわけでは
ない。そこは実績と説得力だ。後年父は、弁の立つ人
といわれたが、若い時は人前で話すことが苦手で、
顔を赤らめ、口ごもりながら話したものだと言っ
ていた。この時も恐らく一世一代の覚悟で、支店長と
かけ合ったのだろう。「人生意気に感ず」式の、一見無
謀とも思えるような取引が、この時代にはあつた。

ともあれ小林氏はせつせと返す算段を始めた。「いく
らインフレでも、放つといたら大変や思ひまして、本
当いとうと大將には悪いけど、銀行に協力したんですわ」。
統制下でどうやりくりがついたものか、この借金は二、
三年で返し終っている。このころから一貫して父は借
金をふやす係、小林氏はそれを返す係の名コンビだっ

た。銀行もそれを心得ていて、父には直接返済の催促も担保の催促もしない。父もそれらの件では、小林氏を「この男はウソをいへん男やから、これのいうことを聞いてくれ」といって知らぬ顔をしてまかせた。

「借金は財産なり」とは父の口癖だった。金利感覚は非常に鋭く、現金を寝かせることは我慢がならない。金は絶えず回転していなければならなかった。こと不動産に關してはきわめて消極的だったが、それは金を寝かせることに本能的なためらいを感じたからであるう。

昭和十四年、大阪支店を開設することになり、故榊岡氏が支店長として赴任した。そのころ北陸の産地から大都市に支店を出すのは、破天荒なことだった。数人を新しく採用し、糸のほかに油や機械なども扱ったが、統制の枠をはめられた時代のせいもあり、実需面を開拓するまでには至らずに終っている。

人絹が本格的な減産にはいったのは翌十五年である。原料パルプはもとより、石炭、電力、労力などの不足が直接ひびいて来た。生産規制の強化により、役所から化纖協会に割当数量が示され、それを各メーカーが生産し、機屋に織らせ、これを一括して買い上げるシ

ステムが作られた。今という賃織りのはしりである。当初メーカーは大規模の機屋と契約して糸を流していたが、それらの大工場は次々と軍需工場に転換して行き、否応なしに中小規模の機屋と契約せざるを得なくなった。しかもその細かい実態は地元でなければわからない。福井の分は広瀬が相談にあずかり、機屋の選定に始まり、織物のチェック、受渡しまでの仕事に、あたかも帝人の出先機関のように協力している。

福井の帝人出張所に来ていた庄司健之助氏は、父の指示で非常にスムーズに仕事ができ、ありがたかったといっている。間もなく庄司氏が召集を受けて福井を発つ時、父はいつも広瀬の若い人にしていたように賤別を贈って激励した。「あんなに気前よくしてくれたのは酒田の本間様（秋田県の大地主）」と広瀬の大將だけでした」と庄司氏は今もそれをいう。

若い働き手は次々と召集されたが、十代のぼんさんはまだ四、五人いた。父はその人々を自分がかつて育てられたように育てようと考えたらしい。昭和十五年に入った土蔵昇氏に「お前は勉強せい」と命じ、足羽小学校に夜間開かれた私立の旧制中学校に入れてい

る。今でいう勤労青少年の育成機関が、こんな形で置

かれ、ここで五年学べば福井高等工業学校への受験資格も与えられるという制度だった。学資も制服もすべて父が出し、仕事を終えると午後六時から十時まで、勉強に通う。成績表は保護者である父の手に直送されるから、サボるわけにはいかない。日曜日には先輩の日直を引き受け、ガランとした店で勉強に追われたという。父はそんな姿にかつての自分を見、激励していたが、それも長くは続かなかった。二十歳前の若者にも次々と徴用令状が来て、軍需工場へかり出されていったからである。

そのころ父は毎年の暮れ、家財や資産を自分の手で調べ、歳末の感想と共に、こく明に記帳している。昭



家事の記録

和十五年の分を次に引用してみよう。

（歳末略記）多事多端ノ紀元二千六百年モ将ニ往カントス、本年ハ支那事變第四周年ニ当リ、外ハ波乱ノ飛沫ハ今ヤ洋ノ東西ヲ混乱ノ一色ニ塗り潰シ、暗雲ハ天上ヲ覆イ、内ハ国内体制ノ変革ニ上下各層ヲ震ワセ、物資ハ欠乏シ、殊ニ主生活素タル米、炭、砂糖等ニ於テ未曾有ノ苦杯ヲ喫シ、政治ニ經濟ニ実ニ暗澹タル月日ノ連続ナリ、政府ノ統後対策ハ、新体制ノ発足ヨリ大政翼賛会トナリ、上意下達、下意上達ノ機關トシテ常会ノ設置、經濟新体制、曰ク隣保組織、曰ク公益優先、曰ク何々々等、変革ニ改廢ニ、施策ニ対策ニ、殆ンド狂奔ノ態、国民モ又寧日ナシ、物情騒然タル様ハ社会不安トナリ、未ダ先ノ見通シツカザルママ、騒然裸ニ昭和十五年ハ往カントス

さて太平洋戦争の勃発は、国の生産力を根こそぎ重化学工業にふり向けることになり、人絹界は火の消えたような状態になる。開戦の日、父は「とうとうやったか」と、新聞をくい入るように読んでいた。も早あ

力は、当時の大部分の人が抱いていた。

同じく父自身の記録から、開戦直後の歳末雑感を拾ってみよう。簡潔ながら当時の商売の動向が察せられる。これに見る通り伯父の長男俊晴の入営は、父にとっても気がかりなことで、仕事の合い間を縫って、能勢の妙見寺にわざわざ詣で、無事を祈っている。

昨年末三女出生家族六名トナル、皆健康ニ恵マレ病人無シ。

商売ハ前半良好ノ成績、後半ハ英米ノ凍結、日米交渉ノ停頓、統制ノ強化ニ業績上ラズ、サレド十二月開戦ト共ニ大捷人氣良化ト共ニ理想人氣ニ氣ヲ持直シ越年セリ。

株価ノ回復目覚シ。

十二月末俊晴入営ノ為帰郷、十二月二十日俊晴ノ武運長久祈念ノタメ能勢へ参詣ス。

織物だけではこれからやって行けない、と父は考え始める。開戦と前後して宝永木工への経営参加、油砥石の製造、砂鉄の日東鉱業、および亜炭の高千穂鉱山への投資、などに次々と着手している。いずれも織物

の仲間から持ち込まれた話ばかりであった。

日東鉱業は富山の富山染色株式会社とのつながりから出た話である。そもそも染工場との取引は、公定価格の枠の中で、いかにもうけるかというところから始まった。丸公には白生地、プリント加工した生地と、別々の価格が設定された。白生地を売るだけではマージンが薄い。プリントをして一段階とばして売れば、もうけがとれる。そんな事情で染工場との取引が密接になって来たわけである。富山染色は伊藤萬とのつながりが濃く、富山の不二越も加わって、伊藤萬、不二越、広瀬の三者で始めては、ということになった。父は「有力な人たちがやるんやから、なんとかやるやろ。もしうまく行ったら、お前の退職金のつもりや」と竹内氏にいつて、当時の金で五百円くらい出資し、竹内氏が八戸の事務所に出向した。鉱山の技師その他のスタッフは不二越から来た。しかしやっと採鉱のメドがついた時、終戦を迎え、事業は打ち切られた。

油砥石は鯖江の機屋納村力弥氏との共同事業だった。油砥石は精密機械を研磨するのに欠かせないもので、戦前はアメリカから輸入していた。これを海軍の要請で作ることになった。納村氏は金属回収に協力して、

早くに織機を供出してしまい、することがなくなつて毎日のように広瀬に顔を出していた。「大将、何かすることないかね」「納村さん、わしといっしょにあの工場でお砥石を作ってみんか。あんたには高い月給を払うよ」「まかせろ。大将にほれてるんやから、万事よろしくやって下さい」

() 礪研天然油砥石

礪研天然製砥工業所製品

油砥石の製品にはられたラベル。実物大

父が涉外、営業などを一切分担し、納村氏は建物と設備一切を受けもった。働きの手は青紙のがれに工場の仕事を捜していた菓子屋の主人十数人をかき集めた。原料石は幸い富山県小矢部川上流にある石がテストにパスして製品化にこぎつけた。とはいえ初めての仕事だから機械を改良し、やり方をかえ、さんざん苦勞して呉の第一航空廠に納めることができた。やっと採算が合うようになった時終戦で、使い途のない石と製品ばかりが残された。海軍への納

品代金十万円は軍需補償の打切りでオジャンになった。

宝永木工は織物ブローカーの橋渡しで最も早くに着手、十六年二月から父が会長、牧田正義社長、永野氏が専務で発足している。これは海軍機用の片道タンクで、行きの分だけガソリンを入れて飛び、用がなくなれば落としてしまうものである。骨組をブナの木で組立て、その上を竹で編んだものでおおい、外側を厚い日本紙ではって、目的地まではどうにかもたせるといふ、おそろしげなものだった。これも終戦の翌年三月に解散している。およそ「実業」らしいものに縁の薄かった父が、この時期にいろいろ経験しているのは皮肉なことといわねばならない。

この間にも社員は次々と入営、応召でちりぢりになり、終戦まで内地にいたのは父と竹内氏の二人だけだった。昭和十九年三月、野村志計雄氏（広瀬専務）が一時除隊して入社、軍隊式マナーがおもしろいといつて、父はしばしば家へ帰ってそのマネをして私たちを笑わせた。野村氏は軍関係の仕事で、父のお供をして富山の海軍事務所へ出かけて行き、往復の車中で父と話し合う機会が多かったという。父は「話上手はまず

聞き上手から」などと、お得意の教訓をたれたり、身の上を聞き出したり、けわしい世相の中で、のんびりしたひとときであった。富山の町ではソフトをあみだにかぶって口笛を吹きながら、先に立ってひょうひょうと歩く。蝶ネクタイに銀ブチ眼鏡、おしゃれな父と軍の仕事がどうも結びつかず、ともかく幅の広い人だな、と野村氏は思ったという。一方父にしてみれば、細ぼそながらも安定した工場の仕事は、勝手こそ違え、やせる思いの人絹と比べて、気楽なものがあつたのではなからうか。

本業の方は五次にわたる企業整備で、統廃合が進められていた。糸の方は扱い高も大きいので、広燃商会のまま残ることが認められたが、織物の方はそこまで行かず、県の徳恵で他の業者と共に統合体を作り、大同織物商事株式会社が設立された。この時福井では織物商が十一の統合体に集約されてしまった。仕事といえは一定量の織物を一定マージンで扱うのだから、妙味もないかわり、損をすることもない。構成員は今という中高年齢層の集団で、給料だけはそこそこに払うことはできたが、これもやがて扱い量が減り、昭和十九年になると福井県織物配給統制株式会社に一本化した。ここ

は全く魅力がないと判断した父は、入ることを見合わせている。このため戦後大きな事件となつたいわゆる「織配事件」にも、広燃は一切無関係であった。織物の方は別として、糸は従来の実績があつたので、依然として他社よりは多量に扱っていた。これが同業者のやつかみを買ったのか、「広燃がヤミをしている」との投書が、警察に舞い込み、織物の責任者として竹内氏が大阪の警察に呼び出されたことがあつた。大口の事件は福井の警察を素通りして、大阪に移される。調べに對して持参した帳簿を見せ、申開きが立って無事帰されているが、ヤミの横行につれ、疑心暗鬼のつるいやな時代であつた。

気晴らしのできないそのころ、父はいつか馬にこり始めた。馬を飼うことは、軍馬の子備軍を育てることでもあり、国策にそつたスポーツとして、大つぱらに楽しめるものであつた。乗馬の仲間には舟木長兵衛、山形義孝、納村力弥、野村三郎、畑岡彰氏らで、父がリーダーになつてしばしば遠乗りをしている。山形氏は同じ片町に軒を並べる天ぶら屋の店主。同じころに開店したよしみで、父はこの店をひいきにしていた。ある時、山形屋で、おかみさんが「主人はかけごとが好き

で」と父にこぼした時「そんなら馬を買ってあげなさい。馬に乗ると道楽は必ずやむさかい」と即座に父はすすめ、山形氏はさっそく北海道へ買いに行つて仲間入りした。野村、畑岡両氏は騎兵あがりだが、父たちは全くのしろうと。根が負けずぎらいだから、生来の朝寝坊が大発奮して、毎朝乗馬のけいこに通つた。「馬がよけりや、上手下手の見さかいがつかんどの」と、人には憎まれ口をたたきながら、初心者仲間をふやそうと納村氏にも父からすすめている。「どや、馬一匹飼わんか。世話するぞ」「飼うのはいいけど大将、尻馬に乗ることがわかりますか。尻馬は手綱がないのを、ようおぼえてなさいや」「わかつとる」。米一俵



戦争中に乗っていた芦毛の愛馬、ハナトップ号

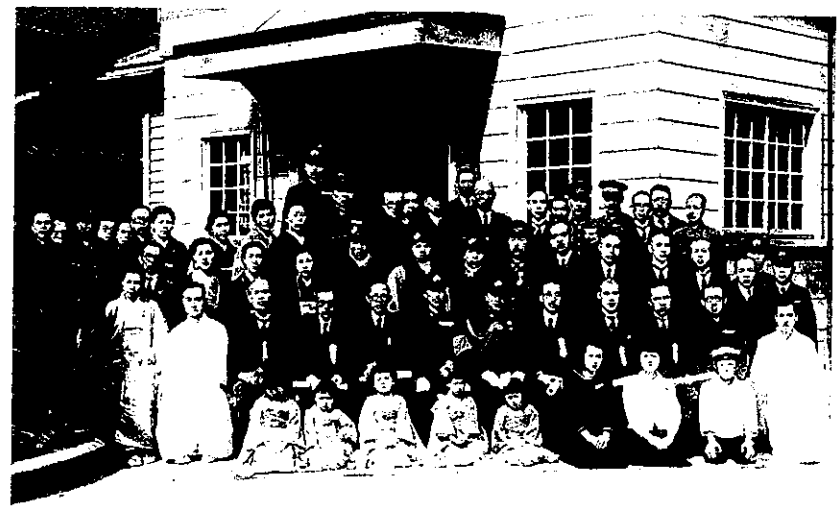
が八円の時代に馬糧は六十円で、高い道楽だった。どこへ行くにも父は先頭に立ち、見通しのいい田舎道へ出ると、「かけ足イ」と片手を高くあげて号令をかけ、とつとこ駆け出すような稚氣満々たるところを見せた。細い街道すじでトラックとすれ違う時、一行の馬が暴れないよう、横道にそれるとか、立ち止まって待つとか「尻馬に乗せた」連中への氣くばりは細やかだった。遠乗りのあとさき、馬で家へ寄つて、私たちにさわらせたり、兄を乗せたりしている。衣料品も乏しいころで、母はややこしい形の乗馬ズボンを手作りし、それをスタイリストの父が文句もいわずはいたところを見ると、恐らく出来がよかったのだろう。

馬もごきげん斜めの時がある。後足を急に折つたために、ずるずると馬のお尻の方へずり落ちたとか、ふり落とされそうになつて冷汗かいたとか、珍なる話はいろいろあつた。父はそんな時、厩舎の人に「もつといい馬に買い替えや」と乱暴なことをいったが、その実ひと癖ある馬がきらいではなく「それを乗りこなすのがおもしろいんや」と、楽しそうに言っていた。

これより先、町内会や隣組が強化され、町内の世話役を頼まれることもふえた。昭和十九年、住み込店員

も次々と出征し無用心になったため、私たち一家は、ふたたび片町の家に移り住んだ。毛矢町で昭和十三年十五年に次女妙子、三女和子が生まれ、片町に移った年の秋、次男勲が生まれた。それからほどなく大阪支店長の榎岡氏が発病、翌年六月、十分な療養をしてもらおうと、丸岡町の友影病院に入院のお世話をし、その後は仕事の合い間に食糧を届けかたがた、何度も足を運んでいる。一方町内会長も引き受け、配給や近所のもめ事の仲裁やらを小まめに世話をした。結構うるさ方が多かったようで、応接間での常会が終ると、父はよくそれらの人たちの口マネをして、おもしろおかしく町内の様子を私たちに話した。物の分配をめぐって、カッカとなりがちな時に、ある種のゆとりを持って対処していたと思う。

頭を丸刈りにしたのはこのころだった。ちよびひげをはやし、国民服を着、革の長靴をはいて「国策スタイル」に変身したのは、当時としては平均的な市民の姿であった。六呂師ヶ原で中年の男性を集めて点呼が行なわれるようになると、奉公袋を持ち、ゲートルに戦闘帽で出かけて行った。帰って来ると「敬礼はこうやる」と、まじめくさってやって見せたり、「将校がい



二機目の飛行機献納式後の記念撮影。腰かけている列の右から三人目、坊主頭が父。後列左から七人目が母、最前列左から三人目妙子

ばりよってな」、「妙なおっさんがいよるんや」などと、またもやワサビのきいたユーモアで、家族を笑わせた。商人の目で固苦しい「兵隊ごっこ」を見ると、からかいたくてたまらなくなることがいくつもあつたのだ。飛行機を二度にわたって寄付したり、心情的には大東亜共栄圏の考え方にひかれてはいたようだが、商人特有の気骨を失ってはいなかったと思う。

兵役には第二乙種であつたため一度も赤紙を受けず、第二次大戦末期、兵役延長により満四十歳まで延長された時もすでに四十歳を過ぎていたため、いっさい関係はなかった。

仕事もない時、所在ないままによく碁を打っていた。ブローカーの荒川茂氏がもっぱらお相手で、よく飽きもせず、と見ている方があきれくらいだつた。そのくせ夜になると、仕事もないのに店に出て、灯火管制で薄暗くした広い板の間を行きつもどりつしながら、考えごとをしていたのをこの時期によく見かけた。ただごとならぬ戦局の成行に、考えあぐねる日々が続いていたのだらうと私は想像する。

昭和二十年七月十九日、福井の大空襲で市の九五％は灰になった。私たち一家は降りそそぐ焼夷弾に追い

立てられるようにして足羽川へ向かって逃げ、九十九橋の下で熱風に吹きあおられながら一夜を明かした。火の粉がとんで来て、熱さに我慢できなくなると、父は川の水を私たちの頭の上からザアザアかけてくれた。翌朝、焼け残った北野の厩舎で一服した私たちは、まっ黒の焼け出された姿で、森田町稲多に疎開のため買つてあつた家にたどり着いた。その夜、運び込んだあつた少々の疎開荷物をほどき、どんすのお客用夜具や大仰なカットグラスなどを持ち出して、ぜいたくと窮迫が入りまじつた珍妙な生活を始めたのだ。ひとまず落ち着くと父は焼け跡に通い、ポツンと残った大金庫を伝言板代わりにし、生死を気遣って尋ねて来る人たちとの連絡をとり始めた。

6

終戦の日に父が何をしていたか、残念ながら全くわからない。ともあれ四十五歳の働き盛りだったのは、幸運というべきであつた。出直すエネルギーはある。戦時中の指導者はやがて追放になり、客観的に見れば父たちの世代が腕をふるえる時代になったわけだが、あの

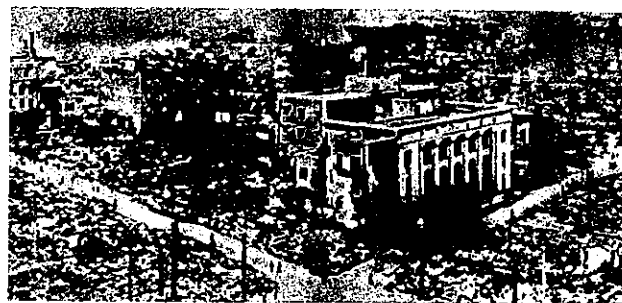
混乱期にそこまで考えるゆとりは恐らくなかったろう。戦災のあと、学徒動員で工場へ通わされた兄と私を除き、母と姉妹は当分の間兵庫県へ疎開した方がよからうということ、皆で兵庫県へ向かった。結局上の妹は終戦後も、森田の生活が落ち着くまで兵庫県の母の実家で半年ほど過ごすことになる。

焼け跡にはほどなく二間に三間の仮小屋が建った。そこを目当てに復員者が集まって来た。八月大盛、十月野村、十一月小林氏らが次々と元氣な顔を見せ、父を喜ばせた。戦死した店員は藤原俊晴（伯父の長男）、酒井忠雄（一覚氏の兄）ら二名だった。

復員者を迎えて父がいったことは、人によって違う。ある時は気分が高揚し、ある時は消沈した。猫の目のように変わる国内状況に、だれもが困惑していた時代である。父は野村氏に「占領下ではどう情勢が変わるか分からない。今日の懸命に努力することや。これしかない。将来のことを考える前にすぐ働け、すぐ走れ、働き、走りながら将来のことを考えよう」と、熱っぽく語ったという。一方土蔵氏が顔を出したのは、翌年二月だが「わしもすることが何もあらへん。商売やるいうても、品物もないし、お前やミ屋でもやれ。わし

はこんなこともうやめて、北海道へ行つて、牧場でも経営しようかと思ってるんや」と。このころ父は、片腕としていた樹岡氏に先立たれ、かなり気落ちしていたのであろう。

妙ないい方かもしれないが、食糧難があったことは、



空襲で焼野原になった福岡市中心街。中央が福岡銀行本店。左隅が人絹会館

ある意味では救いであつた。こればかりは、考えても始まらないから、かけずり回ることになる。私の記憶では父の生涯で、最も家庭に近く生きたのが、この時期だつたと思う。全くあの食糧難のおかげで、自分と家族の胃袋をみたすために、なりふり構うひまはなかった。同じ焼け出さ

れ組の永野氏一家が、森田の家の離室二間に四ヵ月ほど住んでいた。両家とも五人の子持ち。永野氏と父は毎日のように自転車に乗って、米や野菜や魚を求めて、心当りの機屋や農家を訪ね歩いた。自転車もオンボロだから、石ころの田舎道をかけずり回ればすぐにパンクする。「君の自転車、安物とみえて、よう破れるな」と、炎天下でやけくその冗談をいいながら、自転車を何里も引いて歩いたこともあった。

ある時、福岡市内の砂糖屋で、当時貴重品並みだった白砂糖をヤミでたんまり分けてもらうことになり、大喜びで大八車に積み、その上にそだ（たきぎにする木の枝）をかぶせてカムフラージュし、森田まで運ぶことになった。二人でうつ向いて荷物を持ちあげようとすると、頭の上へ何やらタラタラッと落ちて来た。

「ありや、雨か」と思わず空を見上げると、お互いのおでこに黒い水が垂れている。リュックサックにしよう油を入れたのが、うつむいた拍子にもれて来たとかわかって胸をなでおろし、溜息まじりにしょっぱい笑いを交わした。文字通り「妻子を養うために」毎日何しかの食べ物を見つけて来る素朴ないとなみが、一家のあるじの大切な仕事だったのである。

手のつけようのない混乱の中で、戦争末期から親しく行き来していた中川木工所社長故柳沢金作氏が急性肺炎で寝込み、永野氏一家の住む離室とは別の一面にあつた板の間つき三畳の離室で療養することになり、ここへ柳沢氏の主治医吉田清松氏が毎日往診した。柳沢氏の避難先では、遠すぎて医師が通い切れないからという窮余の一策だった。一軒の家に三世帯の生活、それも不自由な疎開先での話である。この最中に弟が重症の消化不良症になり、一週間ほど危篤状態が続いたことがある。幸い吉田医師は福岡市で聞こえた小児科の名医で、適切な手当てを受けて一命を取りとめたことは、家族みんなの大きい喜びであつた。父は「情は人のためならずというけど、ほんとやな」としみじみいった。

柳沢氏と永野氏らがそれぞれの家へ落ち着いたあと、二間続きの離室に、復員した小林、大盛、野村氏らが泊り込み、毎朝父と四人で自転車で福井へ出勤した。みなカーキ色の復員兵姿のままゲートルをきりりと巻き、雑のうを肩からかけ、柳行李の弁当箱を腰にぶらさげた。私たちはこれを「自転車部隊」とよんでかかった。



お正月に家族そろって。昭和24年

りに墨の残ったパンダのような父の顔がなつかしく思
い出される。ないないづくしの時代だったのに、今で
も母は「森田のお正月は楽しかったねえ」という。

二十年の秋には竹内氏を通じて落ちリンゴ、ひもこ
んぶ、干いわし、するめ、身欠にしんなど一風変わった食料品が次々と送られて来て、森田の家の縁側に、
時おりどさつと積み上げられた。統制外の品物を動か
して、胃袋をみたし、できれば少しでもかせいで給料
の足し前に、との算段だった。むろん落ちリンゴの箱
の下の方には普通のリンゴがちゃんとひそんでいたし、
ひもこんぶさえ当時は店に出せばひっぱりだこだった。
こんぶは二十年暮、京都へどんと送り込み、正月用に
乾物屋の店頭をにぎわした。これを扱った松尾氏の話
では一貫目十円のが一月足らずで三十五円になり、小
売店では七、八十円で売れたという。広惣もまともな
給料を払い切れないので、売りさばく者が自分の判断
で、もうけを上乗せしていいことになっていた。
帝人でも社員の越冬資金や食糧資金に現金が必要で
喫茶店や映画館で日ゼニをかせいだ時代である。石炭
もバルブも公定価格では買えない。またヤミをしなけ
れば現金は作れない。糸は織機一台につき月五十ポンド
の割当だから、機屋はのどから手が出るほど糸を欲しが
っている。広惣はもっぱら帝人の糸をこっそり回して
もらい、ヤミで売って、現金を帝人本社に持ち込む係

だった。小林氏が現金を五十、百万単位でポストンバ
ッグやリュックサックに詰め、水筒には日本酒を入れ
て、福井、大阪間を何度も往復した。それらの采配は
むろん父が振った。そのころ帝人三原工場の人絹系横
流しの一件がばれそうになって、帝人関係者をあわて
させたこともあるが、これも戦後の混乱期を象徴する
出来事として、当時を知る人たちの間で語り草になっ
ている。
敗戦後初のお正月は家族にとって印象が深い。父は
否応なしに家庭的にならざるを得ず、お客様もすべて
家族ぐるみの歓待で、こよなく楽しかった。トラン
プや百人一首で、毎日時の経つのを忘れて遊んだ。子
供相手のゲームでも、父は決して手加減せず、トラ
ンプの「二十一」というゲームの時は賭けた碁石を容赦
なく取り立てた。何かを賭けると不思議に父は強くて、
いつも全員の碁石を自分のものにしてしまい、「さあ、
貸したるぞ」とごきげんだった。しかし現金のやりと
りは決してさせなかった。罰として墨をぬる時も、
父は思い切りよくベタツとやり、鼻の穴まで墨汁がは
いるほど人の顔にぬりつけて、大笑いしたものである。
戦い終って皆が洗面所で順番に顔を洗った時、目の周

その後も品物さえあれば、という商売は続く。進駐
軍のセーター、軍の手旗信号旗の布、下駄の鼻緒、車
輪、折たたみ弁当箱、化粧品、水あめ、オキシフル、
傘、スフの洋服生地等々、手あたり次第である。一た
ん広惣をやめて京都に店を持った竹内氏からは、掛軸
まで送られて来た。戦後のいわゆるたけのこ生活で、
当時京都では道具類の売立がしばしばあったが、父は
特に掛軸を注文していた。「なんでもいいから値の高い
物を買え、といわれたので、わからんなりに買って送
ると、福井ではなんぼでも買手がつくんですわ。料理
屋が部屋を整えるのに、少々高うても買いますしな。興
味のある人はなんぼ高うても買いますしな」。ガチャ万景
気といわれたのはずっとあとのことだが、そのころで
も繊維でばろいもうけをした人がいないわけではな
かった。

三月の新円切替の時は、幸か不幸か父には借金がか
なりあったから、預金と相殺になり、むしろ助かって
いる。また運よく早めに店の建築契約をして、内金を
払ってあったので、これまたあまりひびいていない。
小額紙幣は封鎖の対象外だったので、五十銭札で二十
五万円ほど用意したという。カバン一ぱいの紙幣を私

は生まれて初めて見た。今でもテレビのギャング映画などで、紙幣の詰ったスーツケースを見ると、新円切替の時を思い出す。ともあれ情報を早くにキャッチして、できるだけ手を打たなければ遅れをとる。変動期に育った父には、その点抜け目はなかった。

切替の直後、こんなことがあった。桐生の伊藤氏から、ある日せつば詰った声で長距離電話がかかって来た。「女房が急いで手術をしなければならんのですが、現金を三千円至急お借りできませんか」と。聞けば手術代のうち、半分を現金、半分を封鎖預金で支払うよう請求され、思いあまって父に頼んで来たのだった。毎日限られた現金しか手にはいらないから、当時の現金の貴重さは今からはとても想像のつかないほどだった。それだけの金額を即座に融通してくれる人は、まずいない。あすにも入用な金だから、と聞いて、父は即刻現金を桐生へ届けたという。「女房の生命の恩人です」と、伊藤氏はいう。

さてこの間に本業の方も、そろそろ始まっている。戦後の蓋あけは焼け残り品の整理からだった。終戦と同時に正式ルートにあった軍需物資がそれぞれのメーカーにひとまず移管され、焼残物は独自の判断で処分

できることになった。煙でいぶされて、外側は多少色変りしていても、中は無傷のものがかなりあったから、人絹倉庫等にあった品物の処分を受け、精練加工して染色し、織物問屋へ回すことでかなりかせげた。この仕事を手がけたのが増田卯三郎氏らである。焼残物の整理は二十三年ごろまで続いたから、かなりの量にのぼったわけである。昭和二十二年には大同織物株式会社が戦後新たに再発足したので、設立後は織物関係はここで扱っている。

隠退蔵物資の横流れ品もあった。配給品としてストックされているものが、ちよくちよく流れて来るのは、担当者があの手この手でこまかしているからである。織物配給公団の担当者が甘い汁を吸うチャンスもあったわけだが、広燃は役員を出していないため、おこぼれにあずかることもなく、したがって二十二年のヤミ摘発で、いわゆる「織配事件」が起きた時も、全く無キズですんでいる。

焼残物にせよ、横流れ品にせよ、戦争中のストックだが、戦後の生産は終戦の時ではほぼ壊滅状態にあり、日産能力は昭和十二年の二四％、しかも残存能力のうち修理や補修なしに稼働できた分は、さらにその二

〇％という心細い有様だった。それでも昭和二十一年中には新しい糸が少しずつ出回り始めている。

福井の大地震は昭和二十三年六月二十八日の夕方に起った。片町の事務所にいた人たちは、幸いみな無事だったが、地震の直後に裏のマッチ倉庫から出た火で、たちまち事務所は灰になった。これは戦災直後のバラツクを建て直したもので、小さいながらも本建築。完成後、間なしの罹災であった。

奥には応接間として和室を設け、疎開荷物の中から掛軸や香炉などを選んで床の間を飾り、せい

地震で灰燼に帰した福井市



一ぱいのしつらえがしてあった。事務所の天井裏には、森田の家が手ぜまになったために、書画

骨董がいくらかと、私たちの和服、帯地などを運び込んであり、「当時の金でかれ七百万円がなくなった」と父は口惜しそうだった。何しろ猛烈なインフレ時代だったから、父はせつせと換物を進め、それらの品物も疎開先の森田よりは福井の方が安全だろうと、事務所に置いていたのである。また帳簿類もすべて持ち出すひまもなく、焼けてしまった。大阪へ出張中の大盛氏のメモだけが、唯一の頼りになって、かろうじて商売が続行されるといった有様だった。金庫の扉がまだ営業時間中なので開けてあったため、中も丸焼けになって、百万円ほどあった現金も、そのまま灰になった。

森田の家も、べしやんこになったが、家族はみな運よく助かった。火事も消え、ゆり返しもようやくおさまったころ、父と永野氏は「森田はどうなってるやろ」と、ずたずたに破壊された道を、自転車を引きずり、時にはかついで、帰路についた。家族はみな無事で、とりあえず九頭竜川の堤防下に、よしずで三角屋根根のにわか造りの小屋をもうけ、ひとまず夜露をしのいだ。そのころは京都地震説がまことしやかにささやかれ、父は「いつでも京都へ応援に行けるようにしとけ」といつていたほどだった。あべこべに京都から救済物資

を積んだトラックが福井へ着いた時、父は「よう来てくれた」と涙をうかべて感謝しながら「人に迷惑をかけたことのない者が、なんでこんな目に遭うんや」と、非常に腹立たしげにいったという。「世間に迷惑をかけたことがないのに」とは、時おり口にした言葉で、死にいたる病の床にいた時も「人に恨まれるようなことをしたおぼえがないのに、なぜ……」ともらすことがあった。子供の時に信心深い祖母に教えられた素朴な因果応報の考え方が、いつも発想の根底にあったと思う。そこから発する倫理観が、父のあらゆる行動、発言を見えないところで支配していたようである。

夏の陽射しに照りつけられながら、父は気を取り直して焼け跡整理に立ちあがった。古材を手に入れて三坪ほどのバラックを建て、中にむしろを敷いてにわか造りの事務所ができた。応援にかけつけた帝人の岩谷臺一郎氏と庄司氏には「あの二人がいろいろと気を使ってくれるのや」と、心から感謝していた。

いかに夏とはいえ、幼い者をかかえてあまり野宿も続けられないので、ほどなく大盛氏方に家中がしばらく厄介になった。その家とても無傷ではなく、斜めに傾いた家をジャッキで引き起こしたというぶっそうな



震災後の焼け跡整理。本社所在地。右端が父

の生家、野村の伯父の家へ一時身を寄せることになる。この時野村にいる母あてに、父の書いた手紙が残っている。

拝啓 残暑ことのほかきびしい折柄、皆々変りはありませんか。私は毎日忙しく暮して居ります。お盆のお墓参りができなかったことは申しわけないが、悪しからずお許し願うようおっしゃって下さい。家の方は店だけで、まだ電気もつかぬ有様で、依然大盛の家にあります。いつまでも居るわけにもゆかぬので、近いうちに店の方へ越そうと思っております。住居の建築も考えてはいるのだが、前にいつていた通り子供の学校の関係やら何かを考えると、こころ

ものだったが、畳の上に十人近い人数がひとまず住めた。そして復興のメドがつくまでの間、父を除く家族全員がふたたび父

三年は福井も元のようにならず、いつそのこと阪神が京都へでも移住することも考えられる。ただしこの場合、私だけは仕事の関係上福井で別居生活を余儀なくされるし、どうしたものかと考え余っています。とにかく家を捜してもらうようには頼んでいます。この点大供（長男長女のこと＝筆者注）どもの意見も聞いてみて下さい。こちらの生活はやはり不自由です。当分こんなことが続くでしょう。房チャンはこちらから上京するのかね。小さい者も元気ですか。暑いから病気せぬように気をつけなさい。隆はそちらから学校へ行くのでしょうか。野村のおじちゃんに、帝人の株払込みしたか、聞いておいて下さい。きのうの夕立でちよっと楽になりました。ではこれで、みんなによろしく。

八月二十一日

藤原 長司

敏子どの

地震のあと、水害にも見舞われたショックで、京阪神に住みたいと、父は一時かなり本気で考えたこともある。だが当面の仕事に追われて、それも立ち消えになる。夏も終るころ、京都から大工を呼び、片町に二



地震のあとに再建した本社屋。この裏手に住居が建った

階家の本建築にかかった。福井の駅におり立つと、駅前からすぐに広瀬が見えるといわれたほど、断然スピーディーな復興ぶりだった。まだ屋根のトタンに塗るコールタールがなかったため、銀色の屋根が秋空に輝き、遠目には「片町」にB29が一機いるように見える」と人々はいったという。

完成を待たず寮へ戻った私に、当時の福井の様子を伝える手紙が来ているので、引用してみよう。

床の中から雨の音を聞きながら、今日、日曜の起床

は午前八時だ。昨晚、自称大下サン、竹久サン、宮田サンの総出で、「二十の扉」當時流行していたラジオ番組（筆者注）の長講があつて、寝たのが十二時でした。住居の建築も漸く昨日整地、これから大工さんの仕事も始まり、今月中にぜひ建てたいと念願しています。近所隣でも毎日のように秋晴の下、景気のよい槌の音をひびかせて、家の建築が続けられている。路行く人も誰も彼も、復興建設に忙しい様相をしているし、福井は今全く復興の街だ。そして一日一日街の様相も変わって行く。しかしながら反対に人のふところはまだん秋風と共にさびしくなっていくことも否めない。秋と踵を接して寒い冬の訪れるころ、福井人否オール罹災者は、身も心も寒々とした冬を味あわねばなるまい。今お手紙拝受、授業料の値上げ、経済界の現状またやむなき事象と是認する。しかしこれからの長い遊学期間中の諸費用を概算しても恐ろしい数字になるね。精々他のむだを排することに心をなするほかなし。

試験の節のミスは神戸（兄の遊学先（筆者注））から来た。失敗は成功の基。どの道人間は毎日毎日ミスばかりやっているのだ。ミスの連続だ。ミスだと

気のついた時が進歩であり、前進だ。何ら傷心介意の要なし。

この七日は亡父の三十三回忌に当るので野村に行く。（私だけ）ついでにチビ助（妙子、和子が疎開していた（筆者注））の顔も見えてやるために。和子が熱を出して寝ているとのことだ。別に心配はいらぬとのことだが。秋の長雨が屋根のトタンに音をたてて降っている。こちらはまだときどき震子の御見舞を受けている。地震、雷、火事、オヤジ、地震は一番好ましからぬ存在だ。今も二階で店に持って来て焼いたお前の着物、帯やら私たちの衣類の数々のことを話していたのだが、今から考えると欲しい物ばかりだが、あの時は唯々助かった喜びだけ、ただそれだけと、次は森田にいる者の安否だけが全心を支配して、物（これらのはいった支那カバン）を取り出す気持ちなんか、全くなかったといっていたところだ。あの瞬間のことを思い出してもゾツとする。物を失った今日の失望は考えなくとも比較にならない。休み（秋休みのこと（筆者注））になったら帰って来い。その時分には松茸も出盛るし、精々ごちそうしましょう。では健康に留意して下さい。久しぶりに雨の日曜日、

二階の窓ぎわで筆をとりました。十月三日午后

房子殿

長司

疎開先の妹たちへ、父がたずさえて行ったおみやげは塗りの箸だったという。

ラジオのクイズ番組ぐらしいが楽しみもない時に、焼失を免かれた森川道具店で美術品を眺めるのは、こよなきいいのひとときだった。福井はふたたび瓦礫の町に化した。当時は書画、骨董の出物がたくさんあった。インフレによるたけのこ生活、そして財産税の支払いのために、道具類を手放す人も多かったからである。父はかつてなかったほど、足しげく森川氏方を訪ねている。時には朝晩二回も顔を出す日があった。夕方には歩道のわきに据えられた風呂で、ひと汗流させてもらい、湯上がりに、そのころでは馳走のそばがきといり大豆をおいしそうに食べ、ひとしきり四方山の話をして帰ったという。

金沢や大聖寺で開かれる売立てに、わざわざ出かけたことも再三あった。「これとこれを」と、同行の森川氏に指示し、値ごろにも注文をつけたが、父の選び方はいっぱしの「目きき」であつたとは、森川氏の話で

ある。

ところで人絹の統制撤廃後も、二十四、五年ごろまでは日本中、生地不足が続き、どんなに薄い生地でも洋服の裏地やカバンの内張りなどにとぶように売れた。むろん小さい浮沈はあった。ある時京都でかなりのひっかかりが出た時、父は「そんなことはしょうがない。わびることはない。取り戻せ、取り戻せ」と、少しも意に介さなかったという。その時の驚きを、生涯胆に銘じていると語った人もいる。京都の店へは父がよく出向いたが、父が行くと「あ、また何か聞かしてもらえ」といって人がよく集まった。格別の情報通ではなかったけれど、わずかの本を読んで、いつも豊富な話題を持ち合わせ、それを父一流の味つけで話すのが人を魅きつけたらしい。福井へ帰る時、父はいつも赤切符、同行の同業の人が青切符だったのを見て、再建への気構えがこんなところにも表れていたと、見送りに行った松尾浩史氏はその印象を語ってくれた。

このころ代議士福田一氏との出会いがあった。大野の宇野治郎兵衛氏の紹介で、ある日福田氏は片町の事務所に父を訪ねて来た。地震で焼ける前の、二間ほどのカウンターで仕切られた板の間で、古ばけた机を前



選挙事務所のようになっていた本社内。
奥にいるのが父

開票の時、ぐんぐん伸びる票数にいても立ってもいられず、やがて当選と決まった時の痛快さは父がしばしば茶飲み話で繰り返したほどであった。選挙事務所へかけつけるため、電車で大野三番の駅におけると、六、七千人の人が駅前にぎっしり集まっていて、まるで当選した人を迎えるように、駅から事務所まで、わっしょい、わっしょいと胸あげて連れて行った。大騒ぎの間に靴が片方脱げ落ちたのも気がつか

う政党は言語道断だ。そんなことで新生日本の政治ができますか」と、父は一世一代の大見得を切った。「体がふるえよるんで、両手で演壇のはしをしっかりにぎりしめて、ふるえを止めてなあ」と、初の演説の様子を面はゆそうにあとで話してくれた。最初のうちは候補者の「引き立て役」としてはうってつけの、ぎこちない演説であつたらしい。



初当選を祝しての記念撮影。前列
左より二人目父、福田一氏、母

にして父は用心深くこの初対面の人を迎えた。「どういふわけで選挙に出るんですか」「私は戦争中、同盟通信の南方総局長として、南方へ行っていたのですが、民間人は金もうけだけ、軍人は現地人にいばるだけ。とても大東亜共栄圏などという理想を口にする柄じゃない。まず日本人の精神教育をやり直さなくては考えたわけです。そこで政界にうって出よう」と「それにしてもすぐにあがれる調子ではないと思うが、もし落選したらどうしますか」「何度落ちても出ます」「ふーむ」。いかにも君は変つとるなあ、という調子で父はまじまじと福田氏を眺め、ほんの少し、気持ちを動かされたようだった。父が一途な後援者になるまでには、その

後何度も福田氏が足を運び、熱をこめて自分の考えを父に話す機会が必要だった。

さて初の協力は五十万円の運動資金を作ることだった。父はすべてを一人で出すよりは、仲間をふやした方が万事によろしかろうと考えて、増田、江守氏ら四人に呼びかけ、少しずつ寄付を仰いでいる。二十三年暮の選挙が初の応援であった。この時自由党の公認争いで、漆成金といわれる人を公認にし、福田氏は洩れた。それが父にはカチンと来た。「バカな。二度も公認しておいて、今度は公認しないとは何事だ。金を出すからおりろとは人をなめるにもほどがある。よし、むこうが一千万円使うなら、わしも一千万円使う」と福田氏にハッパをかけ、遮二無二あと追しをする形になったのである。それから周囲の者がハラハラするほど、選挙運動にのめり込んで行った。「選挙がすむまでは店をしめる。みなは機屋へ行って福田を応援するよう働きかけてくれ」と、みずから先頭に立ったため、社員はむろんのこと、出入りのブローカーも総動員で、商売そっちのけになってしまった。生まれて初めて応援演説の演壇にも立った。「福田は精神がよろしい。ぜひ政界に送りたい。金がないから公認ができないとい

なかった。その興奮の中で福田氏に「福田さん、今の気持ちを一忘れたいか」と、何度も繰り返して言ったという。父にしてもその感動は、忘れようとしても忘れることはできなかったのである。

さて福田氏が東京へ戻る段になって、金が一円も残っていない。「よっしゃ。わしが東京へ連れてってやる」といって切符を二枚買い、はなむけに十万円を贈り「これからはモーニングもいるでしょう」と、身だしなみにはうるさい父らしい言葉を吐いた。東京では、まるで自分が付添いのような顔をして、当時商工大臣の大屋晋三氏を訪ね「わしが一生懸命がんばって当選させた男です。ひとつかわいがって下さい」と引き合わせた。のちに大屋氏は「あの男が通産大臣になった時は驚いたねえ。ひょうたんから駒という話があるけど、君、あれはそれ以上だよ」と、父と二人、愉快に笑ったということだ。

選挙運動で父は有形無形の援助をしているが、この時商売そっちのけでやって、むしろ助かった面もあったのである。「あの時、選挙運動をやったおかげで五六百万も多かった勘定になるんですよ」「どういふわけで」と福田氏。「当時糸が暴落しましたからね。うちは

そのあとで買ったから損をせずになりました。おもしろいモンですね」

何度か父は福田氏に向かって「わしは先生と縁を切りますよ」といつている。油断はさせまいとの心使いだ。この次こそ自前でやんなさいよ、先生」「わかつてます。やりますとも」。こんなやりとりをしながら、選挙になると父はじつとしてはいなかった。

7

戦後の混乱期を切り抜け、本来の業務にようやくもどったころ、広瀬は二度の危機を経験している。ありてい言えば父の思惑の失敗であった。昭和二十六、七年ごろは、朝鮮動乱ブームの反動で、新三品の暴落があり、投機筋がかなりの痛手をこうむり、大小の倒産が発生した。福井でも老舗西野商店が倒産している。この時父は、屋台骨がゆらぐほどの欠損を招いたのである。

一回目の危機は昭和二十六年、オッパ取引の失敗だった。カラ売りをしたあと、じりじりと相場は上げ始めた。父も焦った。少しでも取り戻そうと、買いに回

ったのが運悪く天井だった。両方で失敗して四、五千万円の欠損になった。周囲はなんとかしてやめさせようとするが「お前らにわかるか」と鋭い一喝がとんで来る。折をみていさめようとすると「わかつてる。いふな」と先制攻撃がかかる。父の指示で動いていた大盛氏には「お前、ウイスキーでもチビチビやりながら行け」と叱咤するという調子で、日ごろの冷静さにはない一面を見せている。私も記憶にあるが、当時まだ事務所の裏に住居があり、夏休みで帰省した私が、ピアノの音をたてると、すぐに人がとんで来て、やめてくれという。小さい音でなら、と思つてそつと弾き出すと、今度は父がひどくこわい顔をしてやって来て「やめんか」と、突き刺すような調子でいった。その様子がただならぬ気配を感じたものだった。

愛蔵の道具類をかなり手放したのもこのころである。「今、ちよつと金がいるのでな」とだけもらして、森川氏に引き取りを頼み、それ以外にはぐちめいたことは一切言わず、いつものように屈託のない世間話で終った。一品だけを自分でぶらさげて、ひょう然と出かけて行った日もある。

あれこれ手を打ったあげく、どうにもならない事態

に追い込まれた時、父はいつになく思いつめたような表情で母に言った。「今、血のシオンペンが出るような思いをしてるんや。どうもやって行けそうにないから、いっぺん帝人をお願いに行くわ」と。一人でいたら自殺もしかねない様子なので、母が「どうでも」とついでに行った。出張で母が同道したのは、あとにもさきにも、この時だけである。母もわからないなりに懸命だった。「帝人さんが広瀬をつぶすはずがない。あんたは昔から帝人のためや、と一生懸命にして来なされたやありませんか。私もついて行つてお願いします。大阪までいっしょに行きましょう」

京都の出張所で一泊し、翌朝帝人へ行くことになった。「もしも聞いてもらえなんだら、帰りに死んでしまふぞ」と、ポツリと母にいった。そういわれて放つておけるものではない。「私も行かせて下さい。私からもお願いしますから」「あはいえ。お前は行かんでもええ」「絶対に短気は起こさんといて下さいね。きつと聞いて下さると思うから」と、母は祈るような気持ちで送り出した。

その日の夕方、無事な顔を見るまで母は案じ続けた。疲れて、気抜けしたような様子で帰った父の顔色は悪

くなかった。「手形を延ばしてやろうといわれた。さ、これから四條通りでも歩こか。眼鏡をひとつ買わう」。二人きりの散歩は久しぶりであった。父は少し度の進んだ老眼に合わせて眼鏡を新調した。「ああ、よう見えるなあ」と、心からひと息ついた人の声であった。「お前もどうや」とすすめられて、つい母も初めて眼鏡を買う気になった。まだ老眼というほどではなかったが、あれこれ合わせて見ると、なるほどこの方が世の中、明るく見える。「あの時おつき合いで買ったおかげで、私は年よりもずっと早く老眼鏡をかけるようになってしまった」と母は笑う。四條通りの街の灯が、この夜はひとときわ明るく父の目に映じたことであろう。

昼間はおそらく息詰まるようなやりとりがあつたに違いない。そういう時父は、一語一語、自分の考えを確かめるかのように、実にゆっくりと話したそうである。応待に出た帝人の係の人が「そんなご無理をいわれても」と口ごもりかけた時、父は言葉をかぶせるように、無理かもしれないと思うから、こうしてお願ひに来てくれるのだすといひ「もし聞いてもらえないなら、この部屋窓からとび下りるつもりです」と、きっぱり言い放った。それでは上司と相談してと腰を浮かしかける

のへ「相談に行かれるのならもうだめだ。も早これまですすね」と妙にしんとした言い方になったので相手の人がぎくつとまったと、のちに父は話している。結局この時は三千万円の手形を何度も書きかえてもらい、半年以上のばしでもらっている。

世間ではこの危機を乗り切ることができたのは、福田氏の斡旋で融資を受けたから、と見ている向きもあるようだが、これは二人の深いつながりから勝手に世間が作り上げた話で、その事実はないし、福田氏もきっぱり否定している。「一商社のために、一代議士がそんなことできるはずがありませんよ。そういうことのために、藤原さんが福田を応援したと思われたらお気の毒です」

昭和三十一年の危機は清算の思惑の失敗で相手方は大阪の仲買店野村商事。例によって弱気で売ったところ、当時で四千万円の欠損になった。この時も手形を落とせないで、帝人に援助をお願いしている。帝人の帳簿によると三十一年四月末に取引保証金三千万円を取り崩し、同時に銀行借入の債務保証を引き受けてもらっている。また同九月に取引保証金二千万円を取り崩しており、これらによって危機を切り抜けている。

なお取引保証金は三十三年下期に元通り積立てている。さすがにこの時は帝人側も「無茶をしたらあかん」と釘をさした。

広燃の内部でも、重役の総意で社長にこの際自重してもらわなくては、と進言しており、以後、会社の屋台骨にひびくような取引はぶつとりとやめている。万一のことがあつては従業員だけでなく、その家族も含めて大勢が路頭に迷うのだから、と父は晩年よく口にしたが、その時のことが骨身に沁みていたに違いない。しかしやめたあと、さも口惜しそうに父のいった言葉がおもしろい。「お前らがもう手仕舞つてくれというから仕方なしに始末したが、あの時も一カ月ががんばっていたら、どれくらいもうけになったのに、惜しいことをしたなあ」と。

二回とも危機をうまく切り抜けたが、世間ではやつかみ半分に「広燃は何をしても帝人さんがついているおかげでボロを出さずにすんでる」とかげ口たたく人もあった。まさに当時はその通りなのであった。

「血のシヨンベンが出るような思い」とは昔から相場を張る人のよく口にする言葉で、父もまたよくいつていた。せつばつまった苦しみを味わうことが、商売人

として成長する一つの節になると考えていたようで、若い人たちにも「お前らもそういう思いをせんと、一人前にはならんぞ」とたびたび話している。

さて実需面での仕事では、昭和二十六年ごろ賃織りについて一つの提案をしている。当時絹業界も金融がひっ迫して、メーカーも金繰りに困り、機屋もつぶれていた。ここで父は賃織りの提案をしている。もともと賃織りの形態・目的などは時代に応じて曲折があり、別に目新しい発案というわけではない。しかしこの時は、行詰まり打開のねらいがあった。すなわち、ひとまず機屋へ糸を売ることにしてメーカーには現金を支払う。これで資金繰りをつけ、織りあがった段階でメーカーが買い上げる。その代金を手形にすれば、現物がはいるまで手形が落ちないから、自然に納期も守られる、という方法である。糸ははける、金繰りはつく、納期は守られる、というわけで、この提案は採用された。産地の事情を知り、双方によかれと考える父の意見には、大いに聞くべきものがあつたと白井氏はいつている。

帝人の特約店としての仕事と、相場でとることの二本建て仕事をしただけに、帝人に対しても糸の取

次のほかに、先行売れなくなるだろうとの見通しがあれば、定期の先物で売っておかなければ、と提言したり、生産量の何割かを福井の定期市場で売りつなぐようすすめたり、かなり有効な示唆を、産地の側から行なっている。

もともと工場の仕事にくわしい人ではなかったが、商人なりの目で、機屋の指導もし、めんどろをよくみていたらしい。「広燃の傘下には、率直にいつておかしな機屋がありましたよ。藤原さんはそれを実に公平にめんどろをみていました」と驚田勇氏（帝人製機相談役）はこんな話をしている。午後になると大小の機屋が相場を聞きがてら会社が集まり、よく父の話に耳を傾けている。技術面ではもう一息と思われる機屋にも、ある限界まではじつと見ているが、時にはズバリ苦言を呈して、うまくカジ取りをしていた。批判をする時は実に遠慮なしにビシビシ言ったが、冷ややかさはなかった。

ある時、旭化成系統の勝山・山岸機業場が倒産の危機にあり、父へ窮状を訴えて来たことがある。事情をよく聞いて「よし、わしが会社に話をつけてやろう」といつて、わざわざ当時の常務に会い、支援を頼んで

いる。頼まれると筋の通る限り親身になって話に乗り、損得ぬきで奔走するところがあった。

こうして二十七年から三十年は順調に行き、三十年には五割配当、五ヵ月分のボーナスを出して評判になった。出せる時は思い切りよく出せ、それが声価をあげ、信用を増す一助にもなると父は考えていた。

地震のあとと税務・会計に明るい故松山久次氏（元広燃常務）を迎え、帳簿組織、内部規定などを整え、企業としての基盤作りも着々と進めている。それまではあまりやかましくいわなくても自覚があればいい、といったやり方だったが、規模がふくらむとそれではおさまらない。組織なども整備され、対外的なイメージをあげる効果はあった。だがあまりにがっちり管理体制を整えてしまうと、かえって父の目には窮屈に見えたり、あるいはつまみがないようにうつったのか、「あんまり含みがなさ過ぎていいかん」とこぼすこともあった。

組織づくりが進んだこともまた、これまでの一匹狼的な個人プレーから、チームプレーへと否応なしに目を向けさせる。やがて広燃の方向転換を父も考えるようになった。つまり相場でかせぐ商社活動から、地道

な実需面の強化が次の課題だと見通してはいた。いかにも「慣れない仕事」ではあったが、たまたまレーヨンからポリエステル、アセテート等への素材の転換が、父の発想の切替をうながしたことは、幸運だったといえるであろう。

私生活では罹災、別居、引っ越しなど変動の多かった二十年代の終りに、父はもう一つの深刻な経験をしている。昭和二十九年五月にたった一人の兄弟である野村の伯父を失ったのである。伯父の身体が不調と知ると、父は福井へよんで専門の医師に診断を受けさせ、時には民間療法的なもので効くという評判のものは、何でもためし、雪深い田舎の医院にわざわざ入院治療を受けさせたこともある。病状が悪化したあと、大阪の病院に移し、福田代議士の友人である内科の名医沖中重雄博士に、東京から往診を乞うたが、この時はすでに手遅れであった。あらゆる手を尽くし、一時は仕事もほとんど放棄して伯父の看護に当たった父の落胆は見るにしのびないほどであった。ふだんはぶつきらぼうな兄弟なのに、その情愛の細やかさは私には驚きであった。この時、野村から小林氏に宛てた手紙がある。

拝啓 二十四日午後、最悪の事態を予想して急拠退院、寝台車にて帰宅、爾来四日危篤の状態にて、全く死生の岐路を彷徨して居ります。従来が行きがかりもあり、肉親の情見捨て難く進退極まる心地して居ます。今は最善を尽くして天命を待つのみです。店の事万事よろしく頼む。少しでも小康を得ば大阪まで出て連絡します。実（伯父の次男「筆者注」と田中（当時運転手「筆者注」）を取って全く申訳なく思っている。いま暫くお許し願いたし。何分万事よろしく頼みます。

二十八日午後

藤原生

小林悟録様

追伸 大盛、松山の両君にも君よりよろしく。

伯父の葬儀のあと、私は京都から鉛筆の走り書きの手紙を受け取った。簡単な文面だが、伯父を失って、いよいよ自分ひとりという寂寥感にじみ出ている。

この間中はせっかくの休暇（ゴールデンウィーク「筆者注」）をあんな不幸なことのために暗い思いで過ごさせたことは、まことに気の毒に思っています。

でも御会葬して頂いて故人もまた遺族の者たちも大変喜んでいいることと思う。私からも御礼を申し上げます。初七日をすませ、自動車で帰途ここ（京都ミヤコホテル「筆者注」）により、一泊して傷心の身を休めました。四面山に包まれ、新緑したたる自然美に心のチリを洗われる思いです。今から出発、帰福します。とりあえず御礼かたがた。 長司

父が涙をこぼしたのを、伯父の死の床で、私は生まれて初めて見た。

8

舞台が大きく変って、いよいよ本格的な合成繊維の伸長期にはいると、産元商社も系列工場の育成、とりわけ特徴のある機業場や加工工場をもった形でなければやって行けないとの見通しがなされるようになった。広燃サイジング（のち社名変更して広燃繊維工業）を設立したのも、こうした考え方からである。何しろその直前、昭和三十年には連続二期にわたって五割配当をやったのけ、業績は隆々たるものがあった。空前の

利益を足がかりに、次の段階への跳躍もできたわけで、このあたりの経過はあえて幸運といってさしつかえなからう。

広燃本社の方も企業体としての陣容を整えるにつれ、いろいろな部門で着実に利益をあげるようになって行った。だがまだこんな話もあった。大阪支店で業績のあがらなかった時、大阪へ出張した父が、齒がゆそうにいったそうだ。「実需があるのに、よう伸ばせんのか。そんなら竹内君、そこに黒板があるやないか」と。つまり伸び悩んでいる分は、相場でとればいいと言いたかったのである。この意気込みを、父は終生持ち続けていた。リスクがあるからこそもうけがある。企業として安全度の高い道をとることは、望ましいとはいえず、時にギリギリの真剣勝負で、息をつめるようにして事に向かう気構えを身上とした父にとっては、ぬるま湯のように感じられる時もあった。

この時期、目に見えて大きな変化ではないが、のちに尾を引く一つの選択があった。すなわち賃織りの受け入れ方である。さきに述べたように、朝鮮動乱後の金詰まりへの対応策として、父は賃織りを提言しているが、三十年代初めには、今度はメーカー側から合成

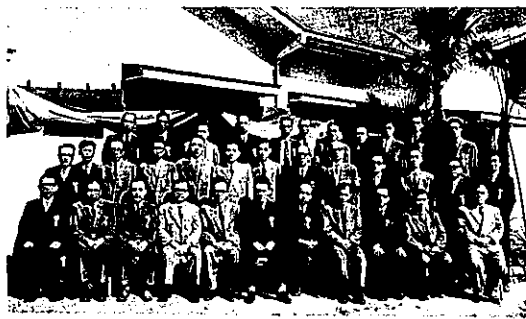
繊維への移行という事態にも備えるため、この際人絹も含めて、一気に賃織りをふやそうと言い出した。その時父は、せっかく長い間面倒をみて育てて来た機屋を、すんなりとメーカーに提供する形になるのは商権の放棄ではないか、との見方をとった。「産元から機屋をとったら何が残るか」というのが、父の持論であった。賃織管理幹旋業になりさがっては、うまみが少ない。すでにお隣の石川県では、メーカーの要請を入れて、その方向へ切り替えつつあり、その形勢下で父の言いはやや分が悪いのは事実だった。みずからのリスクで糸を受け渡ししてこそその商売ではないか、というのに対して、メーカー側には「広燃は自分で機屋をがつちりかかえ込んでいて、がめつい、頑固だ」との批判もあったらしい。父の考え方からすると、決まりきったやりとりを漫然とくり返すような安易さを、何よりもさけたかったのである。さらにいえば素朴な自由主義経済の信奉者として、大企業の無制限な進出に対して、父なりの警戒心を抱いていたのではあるまいか。今となつてはその間の経緯を知るよしもないが、ともかくメーカーの傘の下にはいるという道を選ばなかったことが、その後産元商社として成長し得た大きな理

由の一つであり、恩義のある帝人に対して、ガンとして賃織り体制強化に屈しなかったのは、父の見通しのよさをもの語るものといえよう。

「世の流れにさからって棹さすのも生き方かも知らんが、流れにそって、それにうまく乗ってみるのもおもしろい。『待てば海路の日和あり』やな」というのが日ごろの父の考え方であり、おおむね流れに逆らわない人生であったが、時にこころ一番という時に、自説をまげない意志の強さは人一倍で、この時にも決して妥協をしない強い一面が、チャリとのぞいていた。

広燃サイジングを設立したのは、初期のアセテート糸をもっと織りやすくして渡してほしいとの機屋からの要請と、帝人のすすめがあったからだ。産元商社として新しい繊維を手がけるにはそういう部門を持たなければ、というわけで三十二年の設立である。その三年後に燃糸工場を建てたのも、テトロン原糸が機機にはいいが編機には使えないということからだった。ともあれ資金は動かすものであり、寝かせるものではない、と考え続けて来た父としてはこれらのことは、否応なしに発想の転換を迫るものであった。

ポリエステル製の賃織りが本格的に始まるのは昭和三十



広燃繊維工業本社工場落成式後の記念撮影。
前列左から五人目

十四年秋である。

この時帝人から驚田氏らが福井を訪れ、広燃傘下の機屋を集めて賃織りの話合いが行なわれた。これまでの経験では、ややもするとメーカーは、最初は調子がいいけれどもあとで量を減らしたり、工賃を値切ったりする

と評判は芳しくない。それをよく心得ている父は「メーカーの方はちよつと席をはずして下さいませんか」と、あとを引き取り、皆の話をまとめた。しばらくあつて驚田氏らを招き入れ「これまでのように、発注量の切下げ、工賃の値切りをしないと約束できるかと、皆は聞いていますか……」と、ことをわけて機屋の立場を代弁した。「ごもっとも」と、

その条件をメーカーが受入れて、めでたく仕事が始まったこともあった。

三十年代なかば以降は東洋紡、旭化成などの取引がふえている。父は最初からの帝人との密接なつながりを考え、これをかなり苦にした時期があった。しかしこうなったについてはせつかく完成したテトロン仮撚工場に、帝人から糸の供給が間に合わないことや、帝人における現場での対応が昔とは違って来た、等のやむを得ない事情も重なったのだが、それらを知っていてもなおかつ、義理が悪いとの思いは拭い切れなかった。当時父は大屋社長をはじめ重役の方々と、そんな話をしばしば交わしている。帝人側のだれもが、時代の推移をあげて「うちの担当者の考え方も昔と違う」「帝人オンリーで行く方がむしろ危険だ」とさえいう人もいたが、父はあとまで気にしていたようだ。誠意をもって納得の得られるよう話し合う一方では、次の世代になった時を念頭に置いて、冷静に算盤をはじいてはいたと思う。

帝人への義理固さを示す話に、鈴木商店のOBグループ「辰巳会」への寄付の一件がある。この会では父は若手の方で「あの会に出ると、わしらは一番若僧や」



辰巳会中部支部の集まりで。前列左から3人目

といつもごきげんだった。辰巳会の高齡者番付では、横綱は九十代、三役、幕内、行司、年寄りがずらりと七十人並んで、幕じりがなんと七十九歳、父はまだ幕じりにも名前が出ず、会合に出るだけで「まだまだ働ける、勇気がわく」とよく言っていた。青年期を共にした学校の同窓会というものを持たない父にとって、辰巳会はそれに代わるものであった。その会でメンバーの石碑を建てる話が持ち上がった時、父は「お手伝いはしますが、帝人さん以上には出しても出しませんから」といい、何をする時もその態度は変えなかった。かつて父は帝人では個人株主の筆頭だったことがあつた。戦後の度重なる増資、不況時代の株式配当などで、いつのまにかふえたものだが、その間に株価があがり、

利食いしても買い戻しができると思われるチャンスは何度かあった。資産の運用をまかせられていた小林氏が、そのつど売却をすすめても「わしの財産は帝人のおかげでできたんだから、帝人の株価がなんぼになっても売る気にはならん」と、はつきりいつている。

さて、父は父なりに広燃の産元的あり方を考えていた。福井に住むA型ウーリーの研究者を育てようとしたこともあった。この技術は将来、必らず業界に貢献すると考えたらしく、毎月研究費の一助にと、いくばくかを渡していたのである。一時、この人を帝人の研究所にも紹介し、何か成果が出たら、ぜひ地元の福井へ還元するように配慮してほしい、と帝人側にも念を押していたという。やや意外に思われることだが、できそうなことは積極的にこころみていた。

工場の建設、技術への着眼など、新しい芽ばえは次々と見られるが、どちらかといえば合繊への進出に、広燃は出遅れている。しかし父は「うちは二番バスでいいんや。一番バスには乗りませんのや」と常々言っていた。それはあながち負け惜しみではなかった。相場場で再三「冒險」をしていたとはいえ、父はもともと保守的で用心深いところがある。ひとたび設備投資を

すれば、たやすくは転換がきかない。資金を注ぎ込むには、先行きをよく見定めないと危険、とも思っただろうし、かりに多少出遅れても、持ち前の商才で追いあげ、そのハンデを十分につくなえるという自負の念もあつてのことではなからうか。相場中心から実需へと鮮やかな転進を見せながらも、なおそこにある種のためらいがあつたのではないかとともよみとれる。工業利潤より、商業利潤をとることが、やはり父の体質にはふさわしいものだった。

いうまでもなく実需の商売でも相場観のひらめきは役に立つ。すぐれた商人的センスで父は依然、第一線の指導をしていた。たとえば不景気になると見越したら、いち早く在庫を減らして抵抗力をつけるようにする。下がりそうな時はカラ売りをしておいて、原料、工賃が安くなった時点で仕入れをするなど、対応の仕方はさすがに敏速で、判断は的確であつた。ある日の会議でこんなたとえ話を持ち出したことがある。「みな考えてみい。大雨が降ると九頭竜川の川上から、大きな材木が流れて来るわな。それを岸辺からトビ口でひっかけてあげればいいんや」。不況でみなアツプアツプしている時に、投げ物を買って売りつなぐことを比

喩的にいったのである。終戦後、森田に疎開していた時、何をしようにも商品がなく、腕をこまねいて九頭竜川の堤防の上から、黙々と濁流を眺めた日々があったことを、チラリと思い浮かべていたことだろう。それらの判断は多方面の情報をつかみ、整理して得た独自の先見性から出て来るものだった。

対外的な仕事ができるにつれて、広い分野の情報もはいりやすくなったが、たえず人の話を注意深く聞くことを父は心がけていたように思う。「どうや、近ごろは」「景気悪いですわ」「そんなこといわれてもわかつとる。もっと違うことをいえ」といった調子の何げないやりとりの中にも、父はアンテナをどん欲に働かせていた。商用でしばしば上京した父といっしょに銀座を歩くと「歩いてる人の人種が変わった」「このへんは女の人の姿が多くなったなあ」と、さまざまに感想をいい、それを聞くと、生活の変化の波頭を、父が敏感にとらえているのを、私はいつも教えられた。その波頭の下には、必ず大きいうねりがある。いつも何か父には「見えて」「いた」という気がする。鮮度の落ちた人の話よりも、まず自分の感覚でとらえたナマの情報を、何よりも大切にしたい人だった。

さて、すでにふれたように、過去に何度か大きい利益を得たのは、常に「売り」であった。広瀬はもとと帝人の特約店として発足したため、糸を売ることが使命でもあったし、また糸を市場から買い戻さなくても、メーカーから買えるという有利さがあって、ますます「売り」一方になった。それが父のトレードマークのようになり、相場がさがるときにもうけをとる人といわれ、やがては「不況に強い広瀬」という伝説をうむようにもなったのである。それはさておき、資本の力にものをいわせて買い占めるのと違って、売り屋は人に迷惑をかけることが少ない。しかもその判断が単なるカンではなくて、需給のバランスや消費の動向をにらんだうえでの売りであって、手持ち商品の値下がりやカバーするため、相場機関を利用せざるを得ない一面を持っていたわけで、その意味では父は純然たる相場師ではない。相場でのバランス・シートが、長い目で見て黒字であったのも、それが偶然に「当たった」のではなく、実態に裏づけられた綿密な見通しで「当たった」からであった。実需への転換が思ったよりスムーズであったのも、この一面をうまく生かして、対応して行ったからである。

ところで昭和二十年代の終りごろから、業界の世話役をはじめ、福井県、市の公職、町会やPTAに至るまで、大小さまざまな役職が持ち込まれるようになった。しかし本業を離れた分野での発言では、常に「私は福井の人間ではないから」と、一歩さがってものをいうところがあった。もちあげられてもなかなか腰をあげなかったが、それでもすすめられるままに、福井県原糸織物商同業会会長、福井商工会議所会頭、福井人絹取引所副理事長（のちに理事長）など、要職を引き受けている。

いったん引き受けると、てきぱきとした指導性と行動力を発揮することが、再三あった。昭和三十八年、石川県の金織株式会社倒産の際、債権者は石川、福井両県にまたがり、放っておけば地元の石川県優先になりかねなかった。父は原糸織物商同業会の会長として、石川県の商工会議所会頭に会いに行き、福井県業者の債権は福井に処分をまかせてほしいと、ねばり強く交渉した。この結果、父の申し出が通り、福井の分は福井に整理をまかされたので、七割程度をとることができた。このようなことはかつて例のないことで、父の手腕をもの語る一つのエピソードである。

社内でも能率を重んじたように、社外での仕事でも、父一流のやり方で、周囲を啞然とさせることがいろいろあった。たとえば同業会の会議日、それぞれ自分の仕事を持っていく人が集まって来るのだから、手ぎわよく処理することを父はモットーとした。このため会議はいつも十二時から始まり、食事をしながら議事を進め、一時までには必らずケリをつけていた。議題がいくつあっても、昼休み中に会議を終らせてしまい、ガラガラした小田原評定は大きらいだった。それほど忙しくもあったし、また結論が早くひらめく人でもあった。自分では早く答えが出ているから、時間の無駄はさけたいと考える父を、時には独裁的と見た人もあろうし、その過程で抵抗を感じた人もいたに違いない。会議で不勉強をさらけ出すような質問をすると、すぐにびしやりと反撃する癖があった。定見を持っている人には耳を傾けるが、時間つぶしの発言は、てんで相手にしないところがあり、それが「とっつきにくい人」「こわい人」という評判を生む一因にもなった。しばしば強引ですらあったが、人の気持ちをおく汲みあげる点でも、人後に落ちなかった。協会の役員会で話がもめた時など、解散して皆が帰ったあと、父

はフラリと事務局へ顔を出し、専務理事の細川喜代治氏に「腹が立つやろけど、気にするな」と、わざわざ声をかける細かい気配りも忘れてはいない。そういうやり方は時に「ナニワブシ」と評される。私にはあまりにも「通俗」と思えたことが再三ある。だが父はこういった。「言わんでもわかってる、と思うのは独りよがりなんや。やっぱり言わんとわからんもんや。人間というものは、そんなもんやで」。私たちが帰省する時「たとえようかんの一本でもぶら下げて帰ると、うれいもんや」とも父はいった。ものが欲しいのではない。わざわざ買い求め、ぶら下げて来てくれたことがうれしいのだと。手ぶらで帰省したわけではないから、内心ほっとすると同時に、そんないい方に若い時はなんとなく抵抗を感じたものだが、父は自分の流儀で、ある意味では至って通俗的に、別の言い方をすればきわめて人間味豊かに、人につき合ってきたのであった。

「親を大切に」ということも、私たちにしばしば言った。子供の身になるとそれは「ぬけぬけ」という感じになる。だが父は自分の思ったところを、けれん味なく、そのままに言っているに過ぎない。そして父の

過去を知ると、確かにそれを実践していることがわかる。祖母は父の成功を見ずに昭和八年に亡くなったが、父はいつも祖母を大切にし、喜ばせようと考えていた。のちに父はその気持ちで周囲の人にも向けた。同業のおつき合ひの中で、親を持つ人には「親御さんを大切にしないさいよ」といい、何度かその親御さんに会ったことがあると、何かの折に「君のお母さんへ」といって、小さい菓子折を差出したり、ことづけをしたり、健康を気遣ったりしている。

次第につき合ひがひろがり、かつだれはばかりとろなく自分のペースでものをいい、また聞いてもらえるようになった時、父は持ち前の毒舌を前にも増してふるうようになった。商工会議所で老舗の旦那衆とつき合ひがふえたころ、こんなことをよく言った。「福井の人はのれんにあぐらをかき過ぎている。その証拠には『創業何年』を誇りにして、先祖から受け継いだものを、ただ守っているだけの店が目につきますよ。工夫すればもつと進歩も発展もある。わたしは事業の工夫だけで、ここまで来たんですから」。

こんな憎まれ口もきいた。「昔から福井の人は服従性が強いといわれるが、そのくせ腹の中では何を考え

ているかわからんところがあるし、さらにいえば功利的。だからそれが商売にはプラスになって来るのかもしれんが」。すけすけ言うが、カラツとしているので、あと味は悪くなかった、と周囲の人はいう。だが家族の者は、父が他人にむかつてさも気持ちよさそうに辛らつな批評をする時、きらわれなければいいが、とハラハラしたし、母などは特にそれを気にしていた。

きわどいところで相手を傷つけず、刀を引く手ぎわはうまいものだったが、心易い人であればあるほど、ユーモアにくるみながらもその言い方は辛らつになった。「お説教」のうまい父に、いつか仲間うちの身の上相談がよく持ち込まれるようになった。桐生の伊藤氏は、織物業を営むかたわら、昭和二十六年から市会議員、そして県議員と、十二年間地方政治家として活躍していた。しかしそのために商売が留守になるのを、帝人を通じて知り、心配した父は再三いさめ役になっている。伊藤氏も選挙に出る時は大い父に相談していたが、父のいうことはいつも同じで「わしはあんなものは大きらいだ。議員だといって、いばつたて駄目だよ」。歯に衣着せず、すけすけと父はいった。また伊藤夫人に長距離電話をかけて「藤原がこういってた、

と伝えて下さい」と、からめ手から翻意をうながしたこともある。

伊藤氏の本業が危機に瀕した時、父は帝人との間に立って、みずから保証人となり、借金を年賦で返すよう話をつけて、助け舟の役割を果たしている。「昔の鈴木商店の仲間やと思って帝人に行っても、今はもう皆違ふんや」。再三再四の父の苦言をいれて、伊藤氏もすっぱりと政治と縁を切った。「だれも親身になって苦言を呈してくれないが、藤原さんは非常にきびしく、かつ暖かった」と、伊藤氏は頼りがいのあった相談者としての父をしのんでいる。

9

三十年代をふり返ると、後半は日本経済の高度成長の波に乗って広然も快調の成長を続けたがその最後の年に、父としてひとつの決断をしている。つまりこれまでの中小企業的な経営のあり方を、さらに組織運営に向けてため、社内の体制を整えること、業績のあがらない部門を今後、社内でどう位置づけて行くか、方向を決めること、そして後継者問題について答えを出

すこと。大きくいえばこの三点に絞られよう。業績の悪い部門——つまり大阪支店の慢性的赤字、同じく東京支店の問題には、さつそくにも手をつけなくてはならない。社業を兄にバトン・タッチする前に、思い切った。一番厄介な泥沼の中に入れてみよう、と父は考えた。もとより失敗すれば履歴に傷がつくおそれはあるが、さりとてこの任に耐えないのなら、将来をまかせるに足りない。職業人としては当然の試練である。同業の先輩として考えればそう割り切れるが、一方父親として考えるとむずかしい課題をいきなり与えて、果してやりおせるか、と迷い、親子の情に流されそうになる。その間を行きつ戻りつ、いつになく決断が鈍り、きのう言ったことを、きょうは引つ込めたりすることがあった。しかし三十九年十二月、支店次長という資格で兄を大阪へ派遣したのである。

大阪の経営がようやく黒字に転じたころ、四十三年下期には東京の雲行きがややしくなり、四十四年一月には兄を大阪在勤のまま、東京支店長補佐に任じ、ふたたび火消しの役を与えている。当時東京では、日夜倒産、整理に追われ、数億円の損害をこうむった。そのころ福井へ報告がてら相談に帰って来る兄と、こん

なやりとりがあった。

重なる倒産シリーズのとどめを刺すような重大なケースをどう判断するかで意見が分かれた時に、「いいものはいいい、悪いものは悪い。この際一気に整理しましょう」と兄。「いや、片方は整理しても、もう片方はくさいものにフタをしてしまえ」「しかし社長(父)は、いつも悪いところは切開して、ウミを出せ、といったのに、これは矛盾するじゃないですか」「いや、それにも増して大切なのは対外信用や。こう次々と倒産にひっかかったとなると、広瀬への金融がとまるやないか。もつと大局で判断せなかんぞ」。時には自分の力以上に仕事をして来た父にとっては、対外信用こそ生命にかえても大切にしなければならぬものだったのである。

こうして内部は次第に兄を中心にしたスタッフにまかせ、業界のこと、他業種も含む経済界のこと、地域のことに次第に乗り出して行った。頼まれればいやとはいえぬ性分で、外部の仕事のウエイトは高くなる一方だった。多少の波はあったにせよ、合議の非常な伸びによって、社業は危なげなかった。

昭和四十二年五月、森川産業の倒産の時は金融引締、

ポンド切下げなど環境も悪く、市中は混乱状態に陥った。機を逸せず同業会の緊急全員会議を召集して、全員に流言蜚語をつつしむよう戒め、不和雷同することのないよう、きびしく注意をうながした。それと前後して金融機関にも働きかけ、業者の不安を助長することのないよう、くれぐれも協力を求めている。この素早い采配に、まもなく業界は落着きを取り戻し、「藤原さんならではの措置だ」と仲間うちから高く評価された。

こうした時、父は冷静な常識人であった。特に目新しいことをいうわけではないが、それが不思議と鎮静剤的な効果をあげたのである。不自然な、あるいは大向ううけをねらったようないい方ではないから、聞く人にわかりやすく、説得力があった。もともと父は実務家である。理想をかかげ、理論をぶつようなところはなく、着実な現実主義をとった。しかし自分の算盤一点ばりではなく、全体のことをつとめて念頭に置こうと努力していた。いつの間にか業界の長老に押しあげられたとの自覚が、ますますその傾向を強めた。そして自分の経験を生かし、それにそって周囲を眺め、取引先等とのつながり、社会環境、その他をよくよく考えたうえで決断を下していた。時には自然に答えが

導き出されるまで、じつくり待つこともあった。「藤原さんに聞いてみよう」という同業者からの信頼感、父の思慮深さに一目おいたからだといわれる。

帝人との関係でも、同じことがいえたらしい。ある元幹部は「いろんなお話を受けて、それはおかしいじやありませんか、と申し上げることは、まずなかったですね。たぐいまれなコモンセンスの持ち主、偉大な常識人です」と評した。

福井とはいわず、北陸、関西、あるいは全国の業界の会議などで、次第にその発言が尊重されるようになったのは、見方が偏らず、聞くに値するものを備えていたからだといえよう。

社会に出てから六十余年、仕事を通し、または仕事を離れた場での人とのつき合い方には父の人柄が表れている。多くの人たちが、実にいろいろな見方をして「上の人には鼻っ柱の強いところを見せるが、下の人にはやさしかった」「人柄が堅実で、地味で、慎重」「きわめて大胆な人」「とことんまで人を信用する人」「包容力のある人」など、さまざまである。私がじかにうかがった方々の藤原評であるから、父に対する追慕と

私への配慮を含むものと見て、割引いて受取らなくてはならないとしても、そういう一面があったと、あえて記させていたきたい。

ここで事業家としての父の特質をいうならば、人の使い方がうまくいったという点を、私はあげておきたい。いわゆる適材適所主義は、広然の人事を中心に、個人生活での身内の者の処遇に至るまで、余すところなく表れている。事業の面でいうならば、事務管理部門、営業部門など、それは非常にはつきり出ている。しかも一人の人間を「使う」のではなく、自分の手でその人を「育て」ようとする姿勢が、いつも基底にあった。不遇の時、得意の時、それぞれに応じて語られた慰めや戒めは、実にたくみに人の心をとらえた。私たち家族が人生の曲り角に立たされた時、話してくれた言葉にも、父独特の味わいがあった。ある時父は、人の使い方について、兄にこんな話をしている。

「人間には欠点もあるかわり、長所もある。悪いところだけ見て暮らしたら、人間すべてダメや。人は使えんぞ」と。清濁あわせ飲むという風で、悪い面は百も承知で知らぬ顔、あえていい面にだけ目を向けてつき合おうとする太っ腹なところがあった。少し古い話に

なるが、私が女子大に入学した年、友だちのことについて書いた手紙に答えて、次のようなたよりを寄せている。

（前略）自由に好ましき友を求め、好ましからぬ友をも排することなく、広く交遊して、各々その善悪、長短を取捨認識する雅量と理智を磨かねばならぬ。いたずらに感情にのみ走り、憎悪、嫌忌することは、知らず知らず自己を孤立の境地に追い込み、視野はせばまり、情操おのずから枯れて、誠に人間仙人となる稀なしとせず。よろしく大悟し、大賢たるため愚の修養を積むべし。（後略）

いささか大時代な感じのする文面だが、父の友人観がよく表れていると思う。

かつて、役員の某氏が、父に向かって同僚のやり方を非難して訴えたことがあった。父は黙って聞いていて「これとそっくり同じことを、亡くなった某君が、君について言ったことがあるぞ」と答えただけだったという。仕事にはやる時、無意識で人の領分をおかすこともあろうし、あるいは故意にやらないとも限らな

い。すべてを心得て、人の力をなるべく矯めるまいとつとめていたのである。むろん包容力があるといつても限度はある。「やっていいことと悪いことがあるぞ」と、声を荒らげて叱責したこともあったし、管理職が部下を掌握し切れないような点については、容赦なく責任を追及している。

順調に来ていたこの時期に、父にとっては思いがけないつまづきがあった。それは長年信頼し、苦楽を共にした古参の役員を、やむを得ない事情があったとはいえ、次々と戦列から退かせたことである。人心収攬の術にたけた人、一風変ったセンスを持ち、世間をひろく渡る如才なさを身につけた人は、会社としても貴重な存在であつたはずである。父はそれらの人を評価し、期待感を抱いていた。その人たちを次々と失ったことは、晩年の父にある種の挫折感と、限らない寂しさを与えたことは否めない。利害を抜きに、なんとかしてかばおうと考えた時期もあつたらしい。もうい「情の人」としての一面を、役員会の席でもちらりとのぞかせることもあった。

「古い人が次々といなくなって淋しい。しかし世の中が変わったんや。叩き大工が成功して、建築会社にな

った。棟梁が社長になった。そうなった時、長くいっしよにやって来た大工が、組織になじまないとあれば、組織を離れて行くのもやむを得んのやろうなあ。自然発生的に世帯の大きくなった広然が、組織づくりに遅れをとったために、人にもキズがつき、会社にも損を与え、大切な友人関係も失われて行つたのではないか。その責任の一半は、組織運営の決断を遅らせた自分にもあると、父は自分を責めていた。退陣を迫った人たちにも「罪は罪なり、功は功なり」というように、彼が広然に残した営業展開がある。その功労にはむくいなければ」と退職金などは非常に優遇したという。やめたのちも、父は「今何をしているのだろうか、健康は、経済状態は」と、時おり周囲の人を通じてその消息を知ろうとしていた。

兄を専務にすえたのち、兄の主張に対し父がごとごとく反対した時期がある。兄が腹を立てて、私にも不満をもらしたことがあったし、父も不満とも批判ともつかぬことを私にほめかしたこともあった。しかし結果的に見ると、それは多角的に物事を見る態度を身につけさせようと考えての反対意見であり、どんな事でも功罪の微妙なバランスの上に物事はあるのだという

ことを、父は教えたかったのだらうと思う。それがすんなり伝わらぬもどかしさを、感じていたのではあるまいか。その後社長を退いてからは、父はすべてを兄の判断にゆだね、世間にありがちな「二頭政治」にならないよう、細心の注意を払い、自分は一歩さがって相談に乗る役目に徹したのであった。

会長としての領分を踏み出さないためにも、社外での活躍の場がひろがるのは、いいことかもしれない。一つの仕事を引き受けるとその関連で次から次へと遠心力がついて来る。硬軟とりまぜ、おもしろい肩書もいくつかついた。忙し過ぎるから、多少仕事を整理したら、と母をはじめ家族がいくらすすめても、父はさまざまな分野に首をつっ込み、たとえもめ事の仲裁役であれ、人の中にいることが楽しくてならない様子で、決してそれらを切り捨てようとはしなかった。かつていろいろな趣味に手を出しながら、とことんまでのめり込んだものはなく、ほどほどに楽しんだ父だったが、ひよっとすると父の最大の趣味は、人間が袖すり合わせ、生ぐさいやりとりもまじるつながりの中に、余人のうかがい知れない醍醐味を発見することだったかもしれない、と今になって思う。

一度、父を福井の市長にかつぎ出そうと、かなり具體的に話が進められた時がある。山形氏が料飲組合の組合長をしていた時、組合の総意でその意見をまとめ、山形氏が父に出馬を要請に來たことがあった。「そして、藤原さんが「なんでわしが皆の小使いをせんなんのや。よけいなことはせんといてくれ」と叱られてのう」と、不調に終わった週末を山形氏は話している。その時は、ほかからも強いすすめがあった。父には出る気はあまりなかったが、その話を何かの折に福田氏に相談している。福田氏は即座におやめなさいといった。「もしおやりになるなら、参議院しかない」と。小林氏にも父は聞いている。「私ももう年齢ですから、四年間も留守番役はつとまりまへん」と、小林氏はやりわり反対した。

人間の欲望のうち、名譽欲は最後のものである。ちらりと気が動いたことがなかったとはいえない。しかし父を思い止まらせたのは、自分はあくまで商人だという気概と、もう一つは「学歴がない」というためらいだった。口では小学校高専科卒ということ、決して卑下してはいなかったが、在野の人間としてはともかく、公の場で人の上に立ち、他から疎んぜられない

ためには、日本ではまだまだ学歴がものをいうことを、父は肌で感じていたのである。「学歴は無用だとはいわないが、学歴があるだけで出世につながるとか、学歴で人を評価するようなことには、非常に反感を感じるね。学歴無用論なんて、大上段に構えた批判はようせんが、学歴がすべてやないと思うなあ」——世間に対しては、この程度のさりげない表現で、学歴主義を批判していたが、心の奥底では、それがもっと別の形でよどんでいたと思う。

いわゆる大学卒のエリートたちと、一步もひけを取らずにつき合えた人であったのに、率直に私たちに語った父のアクセントは学歴なのであった。それを聞いた時、私が意外に思ったのは、人の心の読み方がまだ浅かったせいだが、しかし晩年にはそれもさほど気にしなくなったことに、私は父の大きさを感じてうれしかったものである。

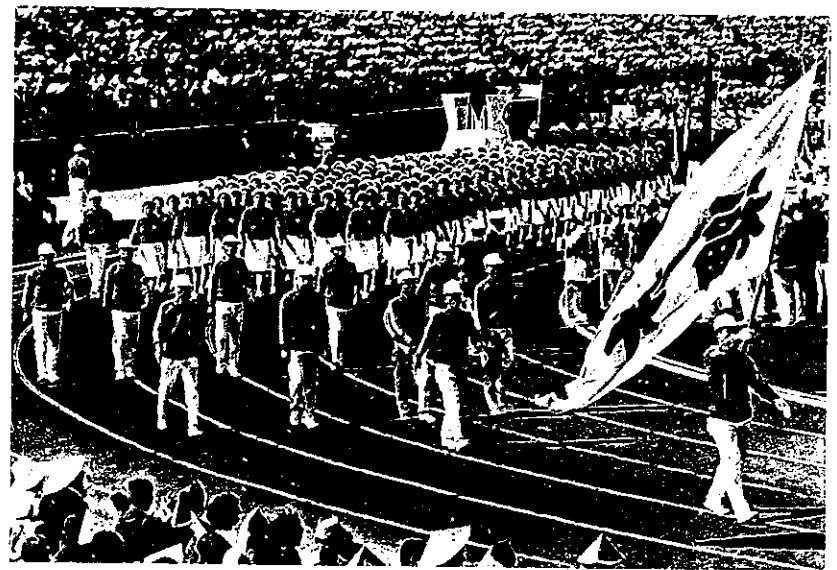
しかしなまじな学歴より「実学」の重みをつくづくと知ったのは、四十六年のニクソン・ショックの時であった。アメリカがドル防衛策を打ち出した時、私はたまたま夏休みで帰省していて、その日の夕刻、父がいくつかのマスコミに求められるままに、自宅の電話

でそれに関する意見を話すのを、横で終始聞いていた。むろんどうなるのか、だれにも的確にはわからないが、IMF体制以来の評価の基準がくずれたのだから、新しい価値観をもって、柔軟に対応しなければ、という意味のことを軽い興奮をまじえて明快に話していた。為替問題にも、そつちの方はしろうとだから、いいながら、輸出への影響と福井の業界の見通しまで、自分なりの意見を述べた。

あとで説明を聞くと、実にわかりやすく説明してくれたが、物事の本質をきちんと把握する力は確かにすぐれていた。広燃の人たちに聞くと、その時の説明が大学卒の秀才たちが書いたり話したりしたのより、ずっとわかりやすく、それだけ父の方が実態を理解していた、と評していたが、それは私の体験からいっても事実であった。複雑な為替の仕組みなどがしつかり頭に入っていたのは、ほんさん時代から、鈴木商店で国際電報のとび交う中で暮らして來たからであらうし、その知識は本から吸収したものよりも、事実の裏づけがあり、ずっと生き生きしていた。

四十年代には体育協会関係の仕事がふえている。昭和三十九年に福井国体の開催が決まり、それと同時に

福井馬術連盟が設立され、父は初代会長に就任した。馬は好きだから、息抜きに馬を見に行ったり、軽く乗り回したりしているうちは、かつこうなレクリエーションだった。ところが選手強化、施設の整備、その他の準備が始まると、体協に実行力のある人を、と父におはちが回って来た。今さら体協の副会長でもあるまい、と親しい人々は就任に反対したそうである。しかし国体の行事を立派に遂行しなくては、県としての体面にもかかわることだ、と島田博道体協会長の女房役を引き受けた。まず率先して寄付をし、周囲にも応分の寄付をと呼びかけている。選手を激励するため、仕事の合い間を縫ってグラウンドへ姿を見せ、若い人たちは腹も減るだろうから、と練習を見て歩く人に、その心使いをするよう、細かい指示も与えたそうである。開会式には赤いユニフォームを着て、選手団の団長として入場行進の先頭に立った。以前に川原でころんだから、片足がやや不自由で疲れやすく、約七百メートルの距離とはいえ、大観衆を前にした晴れがましいトラックやフィールドを、緊張して歩くのは、ちょっとした重労働なのだが、父はその時に備えて、ひそかにトレーニングをして、無事に大役を果たした。



福井県選手団の先頭に、堂々と行進する団長の父

福井国体のあと、体協の役員が父に無断で会長にかつぎ出したことがある。総会の席で推薦すれば、黙って引き受けてくれるだろうと軽く考えたらしいのだが、これが父の坎にさわった。明日が体協の総会だという日にその話をもつれ、「ちょっと待て」といって勤務時間もとくに過ぎた体協の事務所へ、父はカンカンに怒ってやって来た。

腹立ちの激しさは、応接セットのテーブルの上にあったクリームソーダのスプーンに、激して話す父の手がふれて、コップがひっくり返るほどであった。「わたしは島田さん（会長）の女房役じゃないか。おやじがやる時に、女房になんの相談もなく勝手にやめていいのか。一言話があつて然るべきやないか。いきなり、会長に選ばれましたからどうぞ」ではあんまりひど過ぎる。これは君らの仕組んだ策略ではないか」と、一歩もゆずらない。これまで福井国体でなごやかに協力して来た人とは打って変った、ものすごい権幕だったそう。父が金輪際引き受けないとすれば、明日に控えた総会は、すべてを最初から練り直さなければならぬ。会場はすでに予約してあるし、役員にはとくに通知ずみで、遠方からはもう人が来て泊っている。切

端詰まって担当者の林武明氏は思わず涙をこぼした。あらかじめ話を持って行けば、引き受けてもらえないかもしれないから、いっそ黙っていて、総会で全員一致で推戴したことにすればすんなり行くのではないかと関係者が考えたのが、すっかり裏目に出してしまった。その夜、九時ごろまで押し問答を続けて、物わかれのまま席を蹴った父に、夜間、電話でさまざまなおわびととりなしがあった。市長の説得工作もあったが、ついに話がこじれたまま総会が始まり、会長は辞任、後任は未決定のまま、選考委員会におまかせいだきたいとの異例の形で散会した。それからが大変だった。あらためて選考委員会から正式に話が伝えられたが、十日たち、二十日たつても返事がない。ついに広瀬の入り口に「社長に会わせてもらいうまでは、ここを動かんのや」と、担当者がすわり込む一幕もあつて、やっと面会がかない、話したところが「考えてみる」とのそつけない返事。一カ月近い説得で、ついに父も折れて、正式に会長に就任したが、以来、会合で飲む機会があるたびに、父は笑いながら、林氏のひびをポンとたたき「わたしは、あんたの涙に負けてしもたんやぞ」と冷やかしていた。

選考委員会の人たちとひざ詰談判をしていた時、父は「女房がなんでもかんでも引き受けたらあかん、というのでなあ」と、ことわりの口実に母のことを引き合いに出した。のちに体協の人たちは「どうも奥さんがきついらしい」と、かげでささやいたそうだが、これは父一流のおとぼけで、母が何をいおうと、それによって自分のやり方を変えるという人ではなかった。母に対しては徹頭徹尾ワンマン的なところがあり、見方を変えればそれは、母に対しては安心して切つて気ままに振る舞っていたのである。「ともかくあの一件で、われわれはびっくりしましてね。人間として踏むべきすじ道をとらなかつたことで、嚴重に戒められたのだと思います。藤原さんの気骨をまざまざと見せつけられました。スポーツ一辺倒で、確かに人間関係をあまり考えませんでしたから」と林氏は語る。

地域における仕事として晩年の父が目指していたものは、問屋団地の建設と、福井人絹取引所の方向を決めることであつた。取引所問題はついに自分の手で終戦処理することはできなかったが、時勢のおもむくところ、閉鎖やむなしとの意見であつた。四十九年一月、前年から商い不振をかこち続けた末に、月末の当

ぎり納会で取組高はついにゼロ、その後は商いもなく開店休業の状態が続いた。人絹織物が輸出の花形としてもはやされた戦後の一時期、全国の人絹糸相場をリードする地位にあつた人絹取引所は繊維の町福井のシンボルでもあつた。ところが四十八年春からの相次ぐ規制で、火の消えかけたところへ、石油危機がとどめを刺した。十一月ごろから定期相場が急騰し始め、新規商いや価格の自粛をせざるを得なかつた。この間市中の現物は高値を追い続け、定期相場との価格差が広がり過ぎたため、保険つなぎの売買も減る一方で、市場機能はすっかりマヒしてしまつたわけである。

この実質的な閉鎖により、さまざまな思惑が関係者の間には働いた。やめるのは簡単だが、従業員はむろんのこと、商品売買で暮らしたててきた商品取引所会員にとつては、まさに死活問題である。しかも地場筋と、他府県からの進出組との間には必ずしも利害が一致しない。他方ではこれまで取引所を通じて人絹糸を手当していた機屋も困っている。旭化成、クラレ、ユニチカ等の系列販売体制にはいつていない機屋は、糸を手に入れるのに市中に流れ出たものを拾うか、取引所を利用していたわけで、取引所の閉鎖はこれまた頭が痛

い。

理事長をつとめていた父は、これらの実態を知りつくしていた。「その機能が完全に失われたかどうか、存廃の決め手になる」と常にいい、結論を示すのを公けには控えていたが、初立会の日から四十年余、途中で戦争による一時閉鎖があつたとはいえ、取引所に広燃の運命をかけた時もあつただけに、時の流れというもの、しみじみとかみしめていたことであろう。

しかしこんな事態でも、もう十年若い父だったら、あるいは決断を急いでいたかもしれない。業界の二、三人が認めるように「亡くなる二年くらい前（四十八年ごろ）からやや消極的になつた」のは、年齢のせい、あるいはしがらみのような利害関係が、いつそう決断をためらわせたものであろうか。「歯切れが悪うなつたと、人は思うかもしれないけど、人に憎まれんようにせんならんと、このごろ考えるようになった」。その真意がはたしてどこにあつたのか、聞いておきたかつたが、今となつてはそれも叶わない。

福井市の郊外にひろがる問屋センターは、政府の低利資金を借りて実現したもので、昭和四十七年にオープンし、以来、県内卸売総額の中で大きな比重を占め

るようになった。この建設には特に福田代議士をわずらわせて、中小企業金融公庫からの融資を引き出し、かつ地元の足並みをそろえるために、父の尽力があつたと関係者は口をそろえている。土地購入、配分、建築等について、利害の錯綜した話をまとめるのは、至難の業であつたことであろう。

ところで父がなかなかの芸達者であつたことは、親しい方ならよくご存じのことである。酒はあまり飲めないが、宴席で興至れば歌い、踊り、語り、周囲を楽しませた。ひところは「広燃一座」といわれたくらい、父を座長になかなかの芸人がそろつていたものである。歌舞音曲のたぐいは、どれもこれも少々は出来る。ひよいとしたポーズが、なかなか洒落で、手踊りのサマになつていた。歌舞伎は先代幸四郎、先代吉右衛門の口跡がいいといつてそれをまね、歌舞伎十八番のさわりを、風呂の中で気持ちよさそうによく語っていた。

勸進帳の安宅の関のやりとり、河内山宗俊の玄関先の場、白浪五人男、鳥辺山心中など、荒事から世話物まで、一番好んでいたのが修善寺物語の夜叉王のせりふで、たまたま歌舞伎を見に行つて、耳になじんだ本職のせりふ回しを聞く時、父の声帯模写もなかなかのもの

のだな、と思ったことがあった。声量はないが、それらしい味は出ている。浪曲は虎造や米岩が売り出しのころで、レコードも何枚あったのをおぼえているが、父は春日井梅鶯が男らしい節回しだといって好んだ。新国劇はいわゆる壮士劇として大正期の青年に人気があった。若い日の沢田正二郎の大ファンで、その劇的な死の場面―舞台で刺された―を父の口から何回も聞かされた。彼の舞台から見ると、辰巳も島田も、父にとってはいささか物足りないのであった。

藤原義江の「どんとどんとどんと波乗り越えて……」で始まる歌も、時おり父はいい気持ちそうに歌ったが、何しろ西洋的発声法（ベルカント唱法）は、明治の人



披露を興余で宴席

間には苦手らしく、のどにやたらと力を入れて、妙につくった声のご愛嬌だった。大正時代の街の演歌師のまね、「箱根山」をもじったサラリーマンエレジーや、長唄「越後獅子」の替歌も父のレパートリーで、いつの間にかやら私たちに口伝えで残して行っただ。

小唄は名取りをすすめられたが、「親からもらった名前があるのに、別の名前はいらん」と例によって憎まれ口をたたいて断った。むろんこれはお座敷でできたもの。その他民謡、童謡、独逸、詩吟に至るまで音感のよさと器用さで、ひと通りはこなしていた。

まだ昭和一けたのころ、母校の重春小学校の講堂に、ピアノを寄贈したことがあった。夏休みに私が遊びに行くと、従姉から「いいもん見せたげよ」と連れて行かれて、「福井市 藤原長司」とある金属板を打ったピアノを見せられた。その時のおまけでオルガンをもらったとかで、それが毛矢町の家にあった。夕方早くに父が帰ると、そのオルガンに向かって古い童謡を弾いてくれた。ところが自分の声が出る範囲でオクターブを上げたり下げたり、勝手な弾き方をするので聞いている方が面くらった。

父はなかなかのおしゃれで、スタイリストだった。

しかし至って地味好みで、決して目新しいことや冒険をしない。「反対色を使ってもいいんだが、どうも調和がとりにくい」といって、茶系統の背広にはベージュのネクタイを取り合わせ、私たちがなんとか「変身」させようと、さかんにそそのかしても、その手には乗らない。派手なシャツを家族が見立てても、いつの間にかやら兄や弟に払い下げられているので、がっかりさせられるのが常だった。東京へ出て来ると、夜、銀座の専門店をひやかして、気に入ったネクタイを探すのが楽しみだったが、少し値が張ると決して買おうとしない。「それくらい物買ってもバチは当たらないわ」といっても、決してウンといわないので、私が「買ってあげた」ことも何回もあった。自分のことに関しては、想像以上の始末屋で、子供たちにも決してぜいたくは許さなかった。

色物や縞のワイシャツがはやり始めた時も、よほど人目になじんでから、やっと身につけ始めた。もう十年ほど前、日曜日に用を頼んだ社員がカラーワイシャツで現われたのを見て、父はにやりと笑い「そんなものは、やくざの着るものや」と、憎まれ口をきいたそう。のちにビジネススマンも派手な色物を着るように

なったころ、父もカラーシャツを着始めたが、それもいたって地味で、平凡な色調のものばかり。人がどうであろうと、自分はこれ、と個性を頑固なほどに守り通した。したがって帽子もネクタイも、自分の目で選ぶ方が多くて、母や娘たちの見立てでは、時おり「お義理で着てます」といった顔をあからさまに見せた。私たちがタイトスカートををはき始めたころ、「もっとパーッと大きいスカートの方がいい」と父は言い、これが流行だといっても受け付けない。冗談のように「生地をもっと使ってもらわんと」と言ったが、おそらく半分は本音だったであろう。



父の父の対局中。考える手

遊びでは最もキャリアの長かったのは囲碁で、日本棋院から名誉五段を受けている。晩年にはゆつくり打つことも少なかった。最大の強敵は福田代議士で、三目置いて打ち、負けると非常に口惜しがった。日ごろ自分がなかなか勝てない相手に、福田代議士との手合おもしろがるといふ茶目っ気があった。どういうわけかマージャンはきらいで、戦前に広瀬の若い社員が使っていたマージャン卓を、父が「こんなものはいらん」といって、戦争中にたたきこわして燃やしてしまい、緑のフェルトだけが残してあった。宵っばりでは人後に落ちない父が「マージャンをすると夜ふかししていかん。体をこわす亡国遊戯や」といったのはどう考えても手前勝手な、矛盾している。

夜ふかしといえば、時間を忘れて話し込んだり、テレビの深夜映画で西部劇を見たりして、夜中になると「どうや、腹が減らんか」と、夜食を催促するのが楽しみの一つだった。めん類を作らせて、さもおいしそうに食べる時が、一番心なごむ時間だったかもしれない。何か心に屈託があると、むずかしい顔で黙りこくっていて、家族もそっとしておいたが、気がむくと

康の元というが、父にとっては朝寝こそ健康の元だったのである。

ゴルフはハンデ二十八。もともと運動神経のすぐれている方ではなく、気分転換と歩くために出かけることが多かった。とはいえブレーで負けてはおもしろからうはずがなく、あまり強過ぎない相手を誘うことが多かった。その意味で、好敵手は玉村亀太郎氏だった。

さて長い人生で出あった人たちへの心配りはいろいろあった。鈴木商店以来の友人榊岡勝弥氏が、広瀬大阪支店長在職のまま、昭和二十一年四月に亡くなったあと、遺族への物心両面の援助は続いていた。しか



ナイスショットで白球を飛ばす

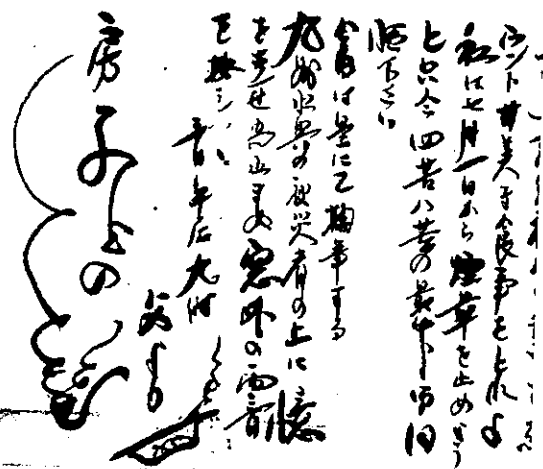
「炉辺談話」よろしく昔話や新しい経験談を午前一時、二時まで聞かせてくれた。「あ、もうこんな時間や」といって切り上げる時、皆残り惜しそうに席を立った。それだけに朝寝坊で、年をとつても放っておくと何時までもぐっすり眠っていた。「年をとると目ざとくなるというが、わしはさっぱりやなあ」と、なかば照れくさそうになぞをかけ、「それだけ体が若いんやわきつ」と、相手から引き出すと、我が意を得たりという気持ちでけん命にかくしながらも、満足そうな表情になった。朝寝が自分の唯一のぜいたくだと、かつて日本経済新聞のコラム「私のせいたく」にも書いたことがある。「ふだんの起床は八時から八時半、特に用件のない日は昼前まで快眠をむさぼる。外での会合は早くて十一時ごろからだだが、それに出ようとすると、かなり努力を要するといった調子である。だから朝の八時に朝礼をしなくてはならないような会社の社長職などは、辞退しているくらいで、現に関連会社の工場で行なう年頭の社長訓示は、特に正午の食事の時間に繰り下げてもらった(昭和四十六年十二月)」と書いている。だがたまさかのゴルフや、特別の用件の時は、五時か六時に起きることもある。ともあれ早起きは健

し子供を育てながら、戦後のインフレ期を乗り切るのは、生やさしいことではない。戦後、大阪支店が再開されたある日、父は大阪支店で榊岡未亡人とばったり出あった。「ちよつと用事でそこまで来ましたので」という未亡人に、なおも尋ねると生活のために保険の外務員でしようかと、ある会社へ応募に来たとの返事。「そんなことをしなくても」と、すぐに未亡人を広瀬の独身寮寮母ということにして、生活は従来の上まで毎月給料を送り続けた。男の子が大学を出るまでは、との約束で次男博司氏(長男清氏は夭折)が広瀬に入るまで、援助は続いた。

戦前には戦死した酒井忠雄氏(一覚氏の兄)が、勉強好きの弟のために、と頼んだのに対し、旧制中学校五年間の学資をポケットマネーから送り続けたのをはじめ、その親類の人たちへも、助言と共に経済面では折にふれて細かい心使いを見せている。

両親を失った榊岡喜美枝さんら姉弟四人には、心の里親」となり、結婚や就職の世話を喜んで引き受けた。その他身内の者にも、援助の手をさしのべていたが、かつて苦労した若い日をふり返りながら、それのできる幸せを謙虚に味わっていたと思う。

父は細くてきやしゃな体つきだったが、シンは丈夫なたちだった。福井へ来た年の暮、腸チフスで生死を危ぶまれたことと、戦前の毛矢町時代に、急性大腸カタルで寝込んだこと、戦後は五十歳ごろ原発性異型肺炎で床にいたのは、風邪をひく程度で、ほとんど病氣らしい病氣をしなかった。戦後の肺炎は二十五年の一月三日、関西方面の正月挨拶回りのため京都へ出張して、夜になっても遊びに行く場所がなく、出張所の人を誘って映画を見に行き、暖房のきかない映画館ですっかり冷え込んだせいらしかった。その肺炎の時から富田病院院長富田信夫医師が主治医となった。父は負けん気が強くて、なかなか床につこうとせず、いつも母を手こずらせた。ところが私たちには健康が大切とやかましくいい、私が初めて東京の大学で寮生活にはいった時、手紙の終りに「病には負けよ。打勝とうと思うなどだれかが言った」と書いて寄越したことがある。自分のことは棚にあげて、とはまさにこのことであった。煙草が体に悪いと皆がいい、何回か禁煙した。いつも途中で決心が鈍り、やめてしまうのだが、昭和二十八年七月三日付で「同情下さい」と、絵入りのユーモラスな手紙を私はもらっている。



禁煙をして四苦八苦しているころの手紙。灰皿とパイプの絵も自筆。一筆描きで即興の絵をよく描いた

安心していた。

ところが昭和四十九年春、風邪をひいたあと咳がとれず、胸に鈍痛が走り、痰に血線がまじるようになった。ちょうど市長選のさ中で、父にはさまざまな用件が持ち込まれ、病人になろうにも周囲がそれを許さない事情があった。父自身もできることなら、医者通いはしたくないとの気持ち強く、意地と頑張りで、受診をどんどん遅らせていた。

四月にはいり、主治医の富田先生から「一度精密検査を受ける必要があるのでは」とわざわざ東京の自宅へ電話をいただき、急いで福田代議士にお願いして内科の権威・虎の門病院前院長沖中重雄博士の診断を仰ぐよう、手続きを取った。六月に母と二人で上京した父は、なんのやつれもなかった。診察ののち検査入院まで、何日か待たなければならぬといわれ、父はほっとした様子で「ならば福井へ一度帰るか」とその支度までしたのである。その時は実にうれしそうで、一刻も早く逃げ帰りたいという風に見えた。ところがさあ家を出ようと玄関まで行った時電話がかかり、有無をいわさず「明日入院して下さい」とのこと。これではすせばベッドがいつあくかわからないから、と聞い

周囲のすすめで、何度かしぶしぶ人間ドックに入り、最後は四十六年六月、大阪の帝塚山病院で母と二人で検査を受けている。目に老人性そこの徴候があること以外は、年齢相応の健康状態ですまはめでたいと喜んでた。むしろ母の方が高血圧で警戒信号が出ていたくらいであった。「わしはまだこれからや」というのが父の口癖で、私たちもそれを聞くたびに喜び、かつ

で、仕方なく父は東京に残り、余儀ない用事のある母だけ、予定通りひとまず帰福することになった。虎の門病院はさすがに看護婦さんたちが行き届き、父も「これならしばらく我慢できる」と納得してくれた。三週間の検査入院、その結果重い気管支拡張症との診断で、いったん帰福、自宅療養にはいった。虎の門病院ではこの時、私たちに最終的な宣告をしていたが、母には何も知らせなかった。

福井へ帰る時の新幹線の旅が、思えば最後の旅行であった。東京駅の改札口を通る時、いつになく足早に、さっさと先頭を行ったのが印象に残っている。グリーン車の席を二つ向かい合わせ、母と弟と私が乗り込んだ。何度も見慣れた窓外の景色に見とれ、車内売りのお菓子などを買い、実にうれしそうなのを見るたびに、涙ぐみそうになって私は困惑した。米原へは兄が車で出迎え、父の専用車と二台に分乗して福井へ走った。

途中、敦賀の海が見えるドライブ・インでざるそばを食べ「うまいなあ」と父は目を細めた。家までの道のりを、思い切り欲ばって楽しみたかったのであろう。ひさびさにわが家へ戻って、暑い盛りを父は冷房のない部屋で、この方がいいとかたくなに言い張って寝



幹部研修会での訓辞

理を承知で父は出席、全員の前で「むずかしい時期を乗り切るためには、人の和が大切だ」と、こんなことと説いた。しかしそのころは声がかなりかすれていて、前の方でも聞き取りにくかったそうである。研修会から帰ってからは、ぐ

ったりして急に体力が落ちたようだと母は案じていたが、あとのことを思うと、ぜひ言っておかなくては、と考えたのだろう。

その後痛みがあまりに激しいため、せめて対症療法でもいいから、苦痛をやわらげてほしいと私たちは考え、富田先生のご紹介で金沢大学医学部平松保教授の往診を受け、九月

の往診を受け、九月になつて金大付属病院に入った。平松教授は放射線科の教授だったので、父は「なぜ放射線科に」といふことが、富田先生と格別にご懇意な方だから、といい、放射線治療も肺に巣食うカビ類を退治するためだと、私たちは説明した。父はそれをどう受け取っていただろうか。入院

後まもなく放射線治療の効果が現れ、痛みもやわらぎ、血痰も減り、年末には退院か、とさえ思わせた。父も相当期待して、退院の挨拶状の文案を作り、それを印刷に回せといていたほどである。外出も許され、快晴の晩秋の一日、母と二人で兼六公園を散歩し、園内の写真屋に頼んで珍しく記念撮影をしている。よほどうれしかったものとみえ、有名な琴柱灯籠が秋色に映える大判の絵葉書を私あてに書いて来た。父から受け取った最後のたよりである。

長らく御心配をかけております。おかげ様にて順調に快方に向かいつつあり、きのう好天に浮かれ、主治医の許可を得て兼六公園を散歩してゆく秋をしのびました。来月十日ごろまでには、なんとか退院できるのではないかと期待しております。

金沢大学病院にて
十一月二十八日
藤原長司

しかし医師の判断で、時期尚早といわれた時の落胆ぶりは大変なもので、私たちはなんといつて入院延長をもつともうしく理解してもらうかに心を砕いた。退



外出許可を得て散歩。
49年11月27日

院の挨拶状は、その後「小康を得つつあります」との歳末の挨拶状に変え、ひとまず正月は自宅を迎えることで、ようやく納得を得た。暮にはいそいそと帰宅し、子供や孫たちに囲まれて、にぎやかに祝い膳を共にし、自由に正月を過ごして再入院した。その前夜、同じ部屋に寝ていた母と私が寝支度をしていると、父が床の上に座り直し、母に向かって「あすからまた病院や。ま、よろしく頼みます」と、ちよつとおどけた調子で言い出したかと思うと、急に声をつまらせて、はらはらと落涙した。母があわてて「こんなに元気になってるのに、何をいいなさる。弱気を出したらあきません」といい、私もそれにかぶせて「暖かくなったら、また東京で歌舞伎でも見に行きましょ」といって、父

は「行けるようになるかな」と小声で力なくつぶやいて横になった。

再入院後は一進一退をくり返しながら、次第に体力が衰えて行った。一月十八日に成瀬氏からの見舞状に対し、返事を書かなくてはとペンを執ったのが、自分の手で文章を書いた最後になった。文字も文章もやや乱れている。

成瀬君、御病氣と聞いた時は、私も珍しく病氣になって入院して居りましたので、お尋ねもせずに居りました。

当方は九月十一日に入院して今日に及んで居ります。幸い病氣は進行性ではありませんので、病氣と辛抱比べのようなかつこうで、まだいつ出るという目途もついていません。

お互様にこの年ではどうにもなりません。私の病氣は気管支拡張症で慢性の肺炎の症状を呈しております。

冬来たりなば春遠からじのたとえ通りになるかならぬか。それでも入院してから初めて筆をとり、あまりのなつかしさに。

成瀬兄

ではさようなら。

藤原 長司

病床での父は、涙ぐましいほどまじめな闘病者だった。好きな煙草を早くにやめ、養生につとめていた。家族もみな交替で、あらゆる手をつくして看護をしたが、すべてはむなしく、四月二十四日の午後、ついに静かにその一生の幕を閉じたのである。不屈の誠意をもって生きた父への、天からの贈物であるかのように、最期の時はきわめて安らかであった。



お正月の一家団らん、前列中央は玉村亀太郎氏、自宅応接間で。昭和50年1月

本稿をまとめるに当り、左の方々のご協力を得ました。記して厚く御礼申し上げます。

(順不同・敬称略)

◇帝人関係◇大屋晋三・白井栄次郎・五十嵐集・鷺田

勇・煙石隼人・庄司健之助

◇友人関係◇福田一・玉村亀太郎・富田信夫・山形義

孝・納村力弥・森川房治郎・長井武之介・

古谷しずゑ

◇辰巳会関係◇西川政一・柳田義一・成瀬佐太郎・伏

見俊助・斎藤席吉

◇業界関係◇細川喜代治・伊藤秀一・有馬広吉

◇体協関係◇林武明

◇元広燃社員および家族◇榎岡喜久恵・竹内豊造・岡

田義一・土蔵昇・永野暁・松尾浩史・千

葉光正・中谷れい子

◇広燃社員◇小林悟録・野村志計雄・石山新

◇親族◇藤原敏子・同隆ほか

履 歴

明治33年4月	兵庫県多可郡重春村野村に生まる	昭和24年12月	大同織物株式会社と福井広燃商会と合併の上広燃株式会社と商号変更し引続き取締役社長就任
大正4年3月	重春尋常高等小学校高等科卒業		
大正4年4月	神戸市合名会社鈴木商店入社	昭和25年7月	福井人絹倉庫株式会社監査役辞任取締役就任
大正9年4月	同店名古屋支店綿糸毛類部勤務	昭和26年2月	福井人絹取引所再開同所理事就任
昭和2年4月	鈴木商店破綻により退社	昭和26年4月	財団法人福井県共同募金委員会創立同会理事就任
昭和5年4月	福井市に転住福井広燃商会を創設人絹糸並に絹人絹織物問屋開業	昭和27年3月	福井人絹取引所副理事長就任
昭和7年5月	福井人絹取引所創立により会員となり仲買店兼業同所監事となる	昭和27年7月	福井精練加工株式会社取締役就任
昭和17年4月	企業整備により大同織物商事株式会社創立同時に取締役社長就任	昭和27年12月	日本絹人織糸布輸出組合人絹織物委員就任
昭和17年7月	福井人絹倉庫株式会社監査役就任	昭和28年6月	福井人絹代行株式会社取締役社長就任
昭和20年2月	大同織物商事株式会社解散のため取締役社長辞任	昭和28年11月	株式会社福井ステーションビル取締役就任
昭和23年1月	大同織物株式会社設立取締役社長就任	昭和29年5月	福井人絹取引所仲買人協会会長就任
昭和23年3月	帝人織布株式会社取締役就任	昭和32年4月	広燃サイジング株式会社取締役社長
昭和24年4月	福井県原糸織物商同業会理事就任		

昭和32年5月	就任	昭和36年11月	社団法人福井県繊維協会副会長就任
昭和32年5月	興国織染株式会社取締役就任	昭和37年2月	財団法人国民協会福井県支部長就任
昭和32年10月	福井県原糸織物商同業会会長就任	昭和37年4月	福井県商工会議所連合会会頭就任
昭和32年10月	福井人絹取引所仲買人協会会長就任	昭和37年5月	九二興業株式会社取締役社長就任
昭和33年11月	福井商工会議所副会頭就任	昭和37年7月	近畿商工会議所連合会副会長就任
昭和34年5月	日本輸出絹化織物商組合連合会副会長就任	昭和38年9月	福井県経済団体連合会会長就任
昭和34年5月	日本レーヨン織物輸出振興株式会社運営委員就任	昭和39年4月	白木興業株式会社取締役就任
昭和35年1月	社団法人福井県繊維協会副会長就任	昭和40年4月	日本輸出絹化織物商組合連合会副会長就任
昭和35年1月	九二興業株式会社取締役就任	昭和40年4月	福井県原糸織物商同業会会長就任
昭和36年10月	日本貿易振興会福井貿易相談所所長就任	昭和40年8月	福井県体育協会副会長就任
昭和36年10月	広燃産業株式会社取締役社長就任	昭和41年7月	財団法人福井県民会館理事就任
昭和36年11月	福井商工会議所会頭就任	昭和41年11月	財団法人国民協会福井県支部長就任
昭和36年11月	福井県商工会議所連合会理事就任	昭和42年4月	住友生命保険相互会社社員総代就任
昭和36年11月	近畿商工会議所連合会地域開発委員就任	昭和42年11月	北陸経済連合会副会長就任
昭和36年11月	日本商工会議所常議員並びに運営委員就任	昭和43年3月	広燃ニット株式会社取締役社長就任
昭和36年11月	福井人絹取引所副理事長就任	昭和43年4月	協同組合福井問屋センター理事長就任
			日本レーヨン織物輸出振興株式会社

昭和43年5月	解散のため委員辞任
昭和43年5月	北陸電力株式会社取締役就任
昭和44年1月	国鉄中部支社評議委員会評議員就任
昭和44年6月	福井テレビジョン放送株式会社取締役就任
昭和44年6月	福井人絹取引所理事長就任
昭和44年6月	広撫殖産株式会社取締役就任
昭和45年12月	ウラセ合同染工株式会社取締役就任
昭和46年6月	福井県体育協会会長就任
昭和46年9月	広撫テキスタイル株式会社社長就任
昭和47年3月	福井県卸売市場審議会会長就任
昭和47年4月	財団法人福井県予防医学協会会長就任
昭和47年8月	白木興業株式会社取締役就任
昭和47年10月	社団法人福井県繊維卸商協会理事長就任
昭和48年7月	広撫株式会社取締役社長就任
昭和49年5月	北陸電力株式会社取締役就任
昭和50年3月	福井商工会議所会頭就任

昭和50年4月	金沢大学付属病院にて逝去
昭和30年4月	賞
昭和37年5月28日	紺綬褒章受賞
昭和41年11月3日	藍綬褒章受賞
昭和47年5月10日	福井市文化功勞獎勵賞受賞
昭和50年5月2日	勲三等瑞宝章受賞
	從四位に叙せられ勲三等旭日中綬章追贈さる

合同葬 (福井商工会議所) の記録

合同葬概要
写真
歎徳教訓
告別の辞
弔辞

つわる数限りないエピソードも、今は懐かしい思い出となりました。以来、話題がごと選手強化の問題に触れると会長さんは、孫子の兵法を引用され、「天のとき地の利を得て戦えば百戦危うからず」と、きまり文句のように、私達の膝を叩いて指導、激励され、眼鏡ごしにじっと見つめられたあの暖かいまなざしが今にしてなつかしく、ただただ当時の面影がほうふつとして私どもの脳裏を去来してなりません。特に会長さんは、体育協会の財政の確立には人一倍神経を使われ、財界の第一人者としても体育協会基本金ならびに、福井県スポーツ振興基金制度の推進に委員長として卓越した手腕を発揮され、おかげさまで昭和四十六年に設立の念願がかなえられました。こうした時も会長さんは、自ら募金協力の第一号としてその任を果され、その意志の強さと実行力の素晴らしさには、私達一同感服するのみでした。また、財団法人福井県体育協会として法人格を備え、新しく衣替えすることができましたのも、会長さんのお力に負うことが非常に大きいものがあります。本年に入り更にいっそうの競技力の向上と、県民スポーツの振興に邁進すべく四月二十五日、昭和五十年年度体育協会総会を目前にして、私ども福井県ス

ポーツ界が心の支えとしておりました会長さんの突然の訃報に接し、悲嘆にくるばかりでございます。この上は、会長さんのご遺志を忘れることなく福井県のスポーツの振興のために、誠心誠意全力を尽くす覚悟でございます。本日、ここに合同葬をあげられるにあたり、財団法人福井県体育協会は、会長さんの面影をしのび心から弔意をささげますとともに、県スポーツ界発展のため永くご加護を賜わりますよう、会長さんの御霊に合掌しご冥福をお祈りし、追悼の辞いたします。

弔 辞

謹んで藤原君の霊に申しあげます。

藤原君は少年の頃に、今を去る六十年前に鈴木商店にいわゆるボンさんとして、私より三年ほど早く入社し、主として繊維の販売を担当していたのであります。その一方で私は、やがて帝人に移って岩国に近代的な大工場を建設していたのであります。それが昭和二年あたかも生産を開始した時に、親会社の鈴木商店が破綻したのであります。そこで岩国工場を中心とする帝人の糸を売りさばくために、帝人の販売機関として広島惣糸商会（広惣株式会社）を設立して、鈴木商店の青年社員であった、千葉順一、小橋一水と藤原長司の三君をしてこれに当たらせていたのであります。藤原君はこうして日本の人造繊維については、この人絹に始まって、やがては合成繊維の時代に入り、実にその後五十年の生涯をこれに終始したのであります。即ち藤

友人代表 大 屋 晋 三

原君は、日本の人絨工業と、半世紀にわたって、これと栄枯盛衰をともにして、販売の面において大きな貢献をしたのでありまして、日本の人絨工業史上においては偉大な存在なのであります。

こうして私は藤原君を他の二君とともに、その青年時代から五十年にわたって知悉しているのであります。当時私はこの三君を観察して、千葉君は豪放磊落ではあるが、緻密さには欠けるので大成は難しいと見たのであります。果して彼は、一時は巨富をなしたのであります。果して彼は、あまりにも度を過ごしてついに終わりをよくしなかったのであります。これに反して小橋君は地道な人ではあったが大した特徴はなく、私は初めから期待しなかったのであります。

ところで藤原君は、人間として底力があり、商機を見るに冷静かつ読みが深く、しかもものを締めくくる

ことを知っておりまして。そこで私はその当時から結局は藤原君が一番大成すると予測していたのでありますが、その見るところに誤ちはなかったであります。

藤原君は広島惣糸では名古屋に駐在して、岐阜、一の宮と浜松地帯を担当したのでありますが、やがて北陸機業地が人絹織物の中心地であることに着目し、昭和五年四月本拠をここに移して「福井広惣商会」を創業したのであります。

これが現在の「広惣株式会社」の発端であります。開店当時の陣容は社長の君を含めて五名、電話一本、三輪自転車一台、自転車二台のまことに微々たるものであったのであります。それが君の着実な性格を反映して堅実な経営を続け、逐次その地歩を拡大して、ついに現在のように北陸の商社間で最高の資産内容を誇るまでに至ったのであります。ところで化合織、なかでも化織はその相場の変動が非常に激しいので、これに従事する人の興亡は実に甚しいものであります。そのために業界では「錦を着たりボロを着たり」と、よくいわれるのであります。それを藤原君は、この変動の激しい事業に従事しながら、如何なる不況期に際しても業績を動揺させたことがなく、また偉なりといわ

なくてはなりません。

こうして藤原君は、広惣を中心として事業を拡大するとともに商工界にも活発に活動し、福井商工会議所会頭を初めとして、各種商工団体の代表的地位に立つて福井県商工界に重きをなしたのであります。さらに地域社会の開発にも意を注ぎ、各種公共事業にも活動し、福井県にとっては無くてはならない重要な存在になっていたのであります。

さらに君の人柄は、実に情愛が深く人の面倒をよく見たのであります。いまを時めく自治大臣福田一君にしても、その今日を築くについては、藤原君の親身な蔭の力が大きくものをいっているのであります。これはかつて藤原君が、私の参議院議員選挙について、献身的に尽くしてくれたことから察知できるものであります。またかつての同僚が失意に沈んでいる場合、取引先が困っている場合などに常に暖かい救援の手を差し伸べていたのであります。しかもその手は、ただに当人だけに限らず、その子弟や遺族にまで及んでいたものであります。

君は徒手空拳にして立ち、一布衣から商人として大成した立志伝中の人物であります。しかも常に人から

慕われ、かつて人から指弾されたことがないのであります。しかも家庭的にも恵まれ温良貞淑な夫人にかしずかれ、さらに子息は優秀であつてよく君の事業を継ぎ、そこには後顧の憂いは少しもないのであります。

弔 辞

広惣株式会社・関係会社

役員代表

野村 志 計 雄

謹んで故会長のご霊前に役員一同に代わり、最後のご挨拶を申しあげます。

思えば昨年九月より入院されて療養中、久し振りに懐しの自宅へ、正月七日間泊りになり、一家揃つて可愛い孫さん達に囲まれお過ごしになりました。私達は、春には自宅で療養されるものと信じきつて居りましたのに、今、はかなく悲しい現実の前に、慈父とお慕いしておりました会長にお別れ申しあげねばならぬとは……。

顧りみれば、会長が昭和五年、三十歳にして当社を

まことに君の生涯こそは、幸福なものであったといわなければなりませんまい。

藤原君、こうして君に先立たれて私は実に悲しい。ここに心から君のご冥福をお祈りする。

創立されて、当時早くも満州・朝鮮の市場開拓に渡航され、以来戦中戦後の混乱、激動の中から不退転の信念を以つて当社の復興に努力せられ、本年四月、四十五周年を迎えました。

昭和十五年、国の企業合同政策により、大同織物商事株式会社を設立し、前後して八戸市と宮崎県高千穂に鉱山を経営せられ、なお宝永木工株式会社、礦研天然製砥工業所を設立、航空機落下タンク、研磨砥石等の事業を多角的に経営し、国策に日夜尽力されました。昭和二十年、福井市は大空襲をうけ焦土と化しまし